

野分

夏目漱石

青空文庫

白井道也しろいどうやは文学者である。

八年前まえ大学を卒業してから田舎いなかの中学を二三箇所かしょ流して歩いた末、去年の春ひょうぜん飄然ひょうぜんと東京へ戻つて来た。流すとは門かどづけ附つけに用いる言葉で飄然とは徂徠そらいに拘かかわらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受合あわぬ。纏もつれたる糸の片端かたはしも眼ちやくを着きすればただ一筋の末とあらわるるに過ぎぬ。ただ一筋の出しゅつ処しよの裏には十重二十重えの因縁いんねんが絡からんでいるかも知れぬ。鴻雁こうがんの北に去りて乙いっちょう鳥ちうの南きたに来るさえ、鳥の身みになつては相当の弁解べんげがあるはずじや。

始めて赴任ふにんしたのは越後えちごのどこかであつた。越後は石油の名所である。学校の在ある町を四五町隔へつて大きな石油会社があつた。学校のある町の繁榮はんえいは三分二ぶ以上この石油会社の方が遙はるかにあで維持えいじされている。町のものに取つては幾個の中学校よりもこの石油会社の方が遙はるかにあでりが見える。会社の役員は金のある点において紳士しんしである。中学の教師は貧乏ひんぱんなところが下等かたがに見える。この下等な教師と金のある紳士が衝突しうはすれば勝しょう敗はいは誰が眼あきにも明あきかであ

る。道也はある時の演説会で、金力と品性と云う題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員らの暴慢と、青年子弟の何らの定見もなくしていたずらに黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた。

役員らは生意気な奴だと云った。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐くと評した。彼の同僚すら余計な事をして学校の位地を危うくするのは愚だと思った。校長は町と会社との関係を説いて、漫に平地に風波を起すのは得策でないと説諭した。道也の最後に望を属していた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほどを知らぬ馬鹿教師と云い出した。道也は飄然として越後を去った。

次に渡つたのは九州である。九州を中断してその北部から工業を除けば九州は白紙となる。炭礦の煙りを浴びて、黒い呼吸をせぬ者は人間の資格はない。垢光りのする背広の上へ蒼い顔を出して、世の中がこうの、社会がああの、未来の国民がなんのかのと白銅一個にさえ換算の出来ぬ不生産的な言説を弄するものに存在の権利のあらうはずがない。権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲である。無駄口を叩く学者や、蓄音機の代理をする教師が露命をつなぐ月々幾片の紙幣は、どこから湧いてくる。手の掌をぼんと叩けば、自から降る幾億の富の、塵の塵の末を舐めさして、生かして置くのが学者であ

る、文士である、さては教師である。

金の力で生きておりながら、金を誹そしるのは、生んで貰った親に悪あく体たいをつくと同じ事である。その金を作つてくれる実業家を軽んずるなら食わずに死んで見るがいい。死ぬるか、死に切れずに降参たをするか、試ためて見ようと云つて抛ほうり出された時、道也はまた飄然と九州を去つた。

第三に出現したのは中国辺へんの田舎いなかである。ここの気風はさほどに猛烈な現金主義ではなかつた。ただ土着のものがむやみに幅きを利かして、他県たけんのものを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手を廻まわしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であてこする。それから新聞で厭味いやみを並べる。生徒にからかわせる。そうしてそれが何のためでもない。ただ他県たけんのものが自分と同化せぬのが氣かに懸かるからである。同化は社会の要素に違ちがない。仏蘭西フランスのタルドと云う学者は社会は模倣まぼなりとさえ云うたくらいだ。同化は大切かも知れぬ。その大切さ加減は道也といえども心得ている。心得ているどころではない、高等な教育を受けて、広義な社会観を有している彼は、凡俗以上に同化の功德くどくを認めている。ただ高いものに同化するか低いものに同化するかが問題である。この問題を解釈しないでいたずらに同化するの世の

ためにならぬ。自分から云えば一分が立たぬ。

ある時旧藩主が学校を参観に來た。旧藩主は殿様で華族様である。所のものから云えば神様である。この神様が道也の教室へ這入つて來た時、道也は別に意にも留めず授業を継続していた。神様の方では無論挨拶もしなかつた。これから事が六ずかしくなつた。教場は神聖である。教師が教壇に立つて業を授けるのは侍が物の具に身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張であつた。この主張のために道也はまた飄然として任地を去つた。去る時に土地のものは彼を目して頑愚だと評し合うたそうである。頑愚と云われたる道也はこの嘲罵を背に受けながら飄然として去つた。

三たび飄然と中学を去つた道也は飄然と東京へ戻つたなり再び動く景色がない。東京は日本で一番世地辛い所である。田舎にいるほどの俸給を受けてさえ樂には暮せない。まして教職を抛つて両手を袂へ入れたままで遣り切るのは、立ちながらみいらとなる工夫と評するよりほかに賞めようのない方法である。

道也には妻がある。妻と名がつく以上は養うべき義務は附随してくる。自からみいらとなるのを甘んじて妻を干乾にする訳には行かぬ。干乾にならぬよほど前から妻君はす

に不平である。

始めて越後えちごを去る時には妻君に一部始終いちぶしじゆうを話した。その時妻君はごもつともでござんと云つて、甲斐かい甲斐がいしく荷物の手拵てごしらえを始めた。九州を去る時にもその顛末てんまつを云つて聞かせた。今度はまたですかと云つたぎり何にも口を開かなかつた。中国を出る時の妻君の言葉は、あなたのように頑固がんこではどこへいらしても落ちつけありませんわと云う訓戒的の挨拶あいさつに変化していた。七年の間に三たび漂泊して、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍を遠退とのおのくようになった。

妻君が自分の傍を遠退とのおのくのは漂泊のためであろうか、俸禄ほうろくを棄すてるためであろうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がつたらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉を洩もらしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に転任してもやはり「あなたのように……」が繰り返されるであろうか。妻君の了簡りようけんは聞いて見なければ分らぬ。

博士になり、教授になり、空むなしき名を空しく世間に謳うたわるがため、その反響が妻君の胸むねに轟とどろいて、急に夫おつとの待遇を变えるならばこの細君は夫の知己ちぎとは云えぬ。世の中が夫を遇する朝ちよう夕せきの模様で、夫の価値を朝夕ちようせきに变える細君は、夫を評価する上において、世せ

間並けんなみの一人である。嫁とつがぬ前、名を知らぬ前、の己おのれと異なるところがない。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁ぐ前と嫁ぐ後のちとに変わりがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。世界はこの細君らしからぬ細君をもつて充満している。道也は自分の妻さいをやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容いれられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟つたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充満していると云つた。かかる細君をもつて充満しておりながら、皆円満にくらしている。順境にある者が細君の心事をここまで解剖する必要がない。皮膚病に罹かかればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣も無いのに汚ないものを頭けんびき微鏡ようなで眺めるのは、事なきに苦しんで肥柄こえびしやく杓やくを振り廻すと一般である。ただこの順境が一転して逆さか落おとしに運命の淵ふちへころがり込む時、いかな夫婦の間にも気まずい事が起る。親子の羈絆きずなもほつりと切れる。美くしいのは血の上を薄く蔽おほう皮の事であつたと気がつく。道也はどこまで気がついたか知らぬ。

道也の三たび去つたのは、好んで自から窮地おちいに陥るためではない。罪もない妻に苦勞を掛けるためではなおさらない。世間おのが己おのれを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬ

ならなぜこちらから世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那に道也は
 奇麗きれいに消滅してしまうからである。道也は人格において流俗りゆうぞくより高いと自信している。
 流俗より高ければ高いほど、低いものの手を引いて、高い方へ導いてやるのが責任である。
 高いと知りながらも低きにつくのは、自から多年の教育を受けながら、この教育の結果が
 もたらした財宝を床下ゆかしたに埋うづむるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、
 せつかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒
 費した訳になる。英語を教え、歴史を教え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に
 附随たぐわして蓄えられた、芸を教えたのである。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、
 教場で書物を開いてさえいれば済む。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが
 綱を渡つて飯を食い、皿廻しが皿を廻わして飯を食うのと理論において異なるところはな
 い。学問は綱渡りや皿廻しとは違う。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来上るのが
 目的である。大小の区別のつく、軽重けいちゆうの等差を知る、好悪こうおの判然する、善悪の分界を
 呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬あやまらざる大丈夫が出来上がるのが目的である。
 道也はこう考えている。だから芸を售うつて口を糊こするのを恥辱とせぬと同時に、学問の
 根底たる立脚地を離るるのを深く陋劣ろうれつと心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の

本体に根拠地を構えての上の去就きよしゆうであるから、彼自身は内に顧みて疚やましいところもなければ、意気地がないとも思いつかぬ。頑愚がんぐなどと云う嘲罵ちようばは、掌てのひらへ載せて、夏の日の南軒なんけんに、虫眼鏡むしめがねで検査しても了解が出来ん。

三度教師みたびとなつて三度追ひ出された彼は、追ひ出されるたびに博士よりも偉大な手柄てがらを立てたつもりでいる。博士はえらからう、しかしたかが芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位じゆごいをちようだいするのと大した変りはない。道也が追ひ出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるすべてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴たつとしとは道也が追われるごとに心のうちで繰り返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。

わからねばこそ餓死うじにもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻さいを気の毒と思わぬほどの道也ではない。ただ妻の歡心を得るために吾わが行く道を曲げぬだけが普通の夫と違うのである。世は単に人と呼ぶ。娶めとれば夫である。交まじわれば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。さるを単に人と呼ぶ。人と呼んで事足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純

な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道也もない、志士としての道也もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先き先きで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到る所に職を辞するのは、自から求むる酔興いぎようにほかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出て来た道也は、もう田舎いなかへは行かぬと言い出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正きようせいするには筆の力によらねばならぬと悟ったのである。今まではいずこの果はてで、どんな職業をしようとも、己おのれさえ真直であれば曲がったものは苧殻おがらのように向うで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼まなこを開かしむるため、取捨しゆしゃ分別の好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだ通りを六年余り実行して、見事に失敗したのである。渡る世間に鬼はないと云うから、同情は正しき所、高き所、物の理窟りくつのよく分かる所に聚あつまると早合点はやがてんして、この年月としつきを今度こそ、今度こそ、と経験の足らぬ吾身わがみに、待ち受けたのは生涯しょうがいの誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識のあるものでもない。同情とは強きもの、富めるもののみ

随したがう影かげにほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買い被かぶつて、一足飛いっそくとびに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へ丈夫な家を建てようとおせるようなものだ。建てかけるが早い、風と云い雨と云う曲くせもの者が来て壊こわしてしまふ。地ならしをするか、雨あめ風かぜを退治たいじるかせぬうちは、落ちついてこの世に住めぬ。落ちついて住めぬ世を住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金かねも勢いきおいもないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。舌たすけの援たすけを藉からねばならぬ。脳味のうみそ膾あつさくを圧あつさく搾あつさくして利り他たの智慧ちえを絞しぼらねばならぬ。脳味のうみそ膾あつさくは溷かれる、舌ただは爛ただれる、筆は何本でも折れる、それでも世の中が云う事を聞かなければそれまでである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけは食わんで済むとしても、妻は食わずに辛しんぼう抱あつかする氣きづ遣かいはない。豊かに妻を養わぬ夫は、妻の眼から見れば大罪人である。今年の春、田舎から出て来て、芝しば琴こと平ひら町の安宿へ着いた時、道也と妻君の間にはこんな会話が起つた。

「教師をおやめなさるつて、これから何をなさるおつもりですか」

「別にこれと云うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかなるだろう」

「その内うちどうかなるだろうって、それじゃまるで雲を攫つかむような話しじゃありませんか」

「そうさな。あんまり判はん然ぜんとしちやいない」

「そう呑のん氣きじや困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしようが、ちつとは私の身にもなつて見て下さらなくつちやあ……」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならない事にきめたんだよ」

「きめるのは御勝手ですけれども、きめたつて月給が取れなけりや仕方がないじゃありませんか」

「月給がとれなくつても金がとれば、よかろう」

「金がとれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさつて、御金のとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着ちやく、早そう々そう計画が立つものか」

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいるときめたって、きめただけの思案しあんじゃ仕方がないじゃありませんか」

「どうも御前おまえはむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折おり合あいがわるくつちや、おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよっぽど癩癩かんしゃくも持ちですわ」

「そうかも知れない。しかしおれの癩癩かんしゃくもは……まあ、いいや。どうにか東京で食えるようにするから」

「御お兄あにさんの所へいらしって御頼おたのみなすったら、どうでしょう」

「うん、それも好いがね。兄はいつたい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そう何でも一人できめて御おしまいになるから悪るいんですわ。昨日きのうもあんなに親切にいろいろ言つて下さったじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くような事を言った。言ったがね……」

「言つてもいけないんですか」

「いけないかないよ。言うのは結構だが……あんまり当あてにならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、その内だんだんわかるさ」

「じゃ御友達の方にでも願って、あしたからでも運動をなすったらいいでしょう」

「友達って別に友達なんかありやしない。同級生はみんな散ってしまった」

「だって毎年年始状を御寄およこしになる足立あだちさんなんか東京で立派にしていらつしやるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらつしやるから人に嫌きらわれるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりや結構じゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行って頼んで見ようよ。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんな事を云っていらつしやる。あなたはよつぽど強情ね」

「うん、おれはよつぽど強情だよ」

午ごにせま通る秋の日は、頂いたく帽だを透とおして頭蓋骨ずがいこつのなかさえ朗ほかならしめたかの感がある。公園のロハ台はそのロハ台たるの故ゆえをもつてことごとくロハ的に占領されてしまった。高た柳かやなぎくん君は、どこぞ空あいた所はあるまいかと、さつきからちようど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛も思うように我を迎えないのを発見した時、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対の方から同年輩の青年が早足に這はい入つて来て、やあと声を掛けた。

「やあ」と高柳君も同じような挨拶あいさつをした。

「どこへ行つたんだい」と青年が聞く。

「今ぐるぐる巡まわつて、休もうと思つたが、どこも空あいていない。駄目だめだ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。なかなか抜目ぬけめはないもんだな」

「天気がいいせいだよ。なるほど随分人が出ているね。——おい、あの孟宗藪もうそうやぶを回つて噴水の方へ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知つてる人かね」

「知るものか」

「それじゃ何で見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「何だか立派なものを着ているじゃないか」

「あの色を竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あれは、こう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「別に感じない。しかし奇麗きれいは奇麗だ」

「ただ奇麗だけじゃ可哀かわいそう想だ。君はこれから作家になるんだろう」

「そうさ」

「それじゃもう少し感じが鋭敏でなくっちゃ駄目だぜ」

「なに、あんな方は鈍くつてもいいんだ。ほかに鋭敏なところが沢山あるんだから」

「ハハハハそう自信があれば結構だ。時に君せつかく逢あったものだから、もう一遍あるこ
うじゃないか」

「あるくのは、真平まっぴらだ。これからすぐ電車へ乗つて帰えらないと午食ひるめしを食い損そくなう」

「その午食を奢おごろうじゃないか」

「うん、また今度にしよう」

「なぜ？ いやかい」

「厭いやじゃない——厭いやじゃないが、始終御馳走ごちそうにばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあ来たまえ」と青年は否いや応おうなしに高柳君を公園の真中の西洋料理屋へ引つ張り込んで、眺ちよう望ぼうのいい二階へ陣を取る。

注文の来る間、高柳君は蒼あおい顔へ両手で突つつかい棒ぼうをして、さもつかれたと云う風に往來わらいを見ている。青年は独ひとりで「ふんだいぶ広いな」「なかなか繁はん昌じようすると見える」

「なんだ、妙な所へ姿見の広告などを出して」などと半分口のうちで云うかと思つたら、やがて洋袴ズボンの隠袋かくしへ手を入れて「や、しまった。煙草たばこを買つてくるのを忘れた」と大きな声を出した。

「煙草なら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布たくふの上へ抛ほうり出す。

ところへ下女おあつらえが御お誂あつらえを持ってくる。煙草に火を点つける間はなかつた。

「これは樽たる麦酒ビールだね。おい君樽麦酒の祝杯を一つ挙あげようじゃないか」と青年は琥珀こはく色の底ろから湧わき上がる泡あわをぐいと飲む。

「何の祝杯を挙げるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今頃卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃コップを下へおろしてしまった。

「卒業は生涯しょうがいにたった一度しかないんだから、いつまで祝つてもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。——姉さん、このフライは何だい。え？ 鮭さけか。ここん所とこへ君、

このオレンジの露をかけて見たまえ」と青年は人指指ひとさしゆびと親指の間からちゅうと黄色い汁を鮭こらもの衣の上へ落す。庭の面おもてにはらはらと降る時雨しぐれのごとく、すぐ油の中へ吸い込まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は裝飾についてるのかと思った」

姿見の札幌さっぽろビール麦酒の広告の本もとに、大きくなって構えていた二人の男が、この時急に大きな破われるような声を出して笑い始めた。高柳君はオレンジをつまんだまま、厭な顔をして二人を見る。二人はいつこう構わない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エへへへ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エへへへ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘つて繰り出そうと思つていたんだ。え

？　ハハハハ。なにそれほどでもない。ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、
どうにもこうにもやり切れないのさ。エヘヘヘ、アハハハハハハ」

土鍋どなべの底そこのようなあか緒おい顔かほが広告の姿見に写つて崩くずれたり、かたまったり、伸びたり縮んだり、傍そば若わか無な人ひとに動揺どうごうしている。高柳君は一種異様な厭いとな眼まなこつきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に云う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジを絞しぼるのをやめてしまつた。

土鍋の底は、やがて勘定を払つて、ついでに下女にからかつて、二階を買い切つたような大きな声を出して、そうして出て行つた。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口いっばい頬張ほおばっている。

「あの連れん中じゆうは世の中を何と思つてるだろう」

「何とも思うものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「羨うらやましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものが羨しくつちや大変だ。そんな考だから卒業祝に同意しないんだろう。さあもう一杯景気よく飲んだ」

「あの人が羨ましいのじやないが、ああ云う風に余裕があるような身分が羨ましい。いくら卒業したつてこう奔命ほんめいに疲れちや、少しも卒業のありがた味はない」

「そうかなあ、僕なんざ嬉しくつてたまらないがなあ。我々の生命はこれからだぜ。今からそんな心細い事を云つちやあしようがない」

「我々の生命はこれからだのに、これから先が覚束おぼつかないから厭いやになってしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじやないか、大にやるさ。僕もやる気だ、いっしょにやろう。大に西洋料理でも食つて——そらビステキが来た。これでおしまいだよ。君ビステキの生焼なまやきは消化がいいつて云うぜ。こいつはどうかな」と中野君は洋刀ナイフを揮つて厚切りの一片あつぎを中央まんなかから切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」

高柳君は何にも答えずにむしやむしや赤いビステキを食い始めた。いくら赤くてもけつして消化がよさそうには思えなかつた。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底せぬうち、先方から中途半把ちゆうとはんぱな慰い

藉しやを与えらるるのは快こころよくないものだ。わが不平が通じたのか、通じないのか、本当に気の毒ながるのか、御世辞おせじに気きの毒どくがるのか分らない。高柳君はビステキの赤あかさ加減かへんを眺ながめながら、相手はなぜなぞこう感情かんじが粗大そだいだろうと思つた。もう少し切り込みたいと云う矢先やさきへ持つて来て、ざああと水を懸かけるのが中野君の例である。不親切な人、冷淡な人ならば始めからそれ相應の用意よういをしてかかるから、いくら冷たくても驚おどろく氣遣きづかいはない。中野君がかような人であつたなら、出鼻でびしをはたかれてもさほどに口惜くやくしくはなかつたろう。しかし高柳君の眼まなこに映うつずる中野輝一なかのきいちは美しい、賢さとしい、よく人情にんじやうを解わかして事理じりを弁わえた秀才しやうさいである。この秀才しやうさいが折々しりしりこの癖くせを出すのは解わかしにくい。

彼らは同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴いて、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。同じ年に卒業したものは両手の指を二三度屈するほどいる。しかしこの二人ぐらい親しいものはなかつた。高柳君は口数をきかぬ、人交ひとまじわりをせぬ、厭世家えんせいの皮肉屋かにくやと云われた男である。中野君は鷹揚おうえうな、円満な、趣味に富んだ秀才である。この兩人ふたりが卒然まじわりていと交まじを訂たづねてから、傍目はためにも不審ふしんと思われらくるくらい昵懇じつこんな間柄あいだがらとなつた。運命はおおしま大島の表と秩父ちちぶの裏とを縫ぬい合せる。

天下に親しきものがただ一人あつて、ただこの一人よりほかに親しきものを見出し得ぬとき、この一人は親でもある、兄弟でもある。さては愛人である。高柳君は単なる朋友をもつて中野君を目してはおらぬ。その中野君がわが不平を残りなく聞いてくれぬのは残念である。途中で夕立に逢つて思う所へ行かずに引き返したようなものである。残りなく聞いてくれぬ上に、呑気な慰藉をかぶせられるのはなおさら残念だ。膿を出してくれと頼んだ腫物を、いい加減の真綿で、撫で廻わされたつてむず痒いばかりである。

しかしこう思うのは高柳君の無理である。御雛様に芸者の立て引きがないと云つて攻撃するのは御雛様の恋を解せぬものの言草である。中野君は富裕な名門に生れて、暖かい家庭に育つたほか、浮世の雨風は、炬燵へあたつて、椽側の硝子戸越に眺めたばかりである。友禪の模様はわかる、金屏の冴えも解せる、銀燭の耀きもまばゆく思う。生きた女の美しさはなおさらに眼に映る。親の恩、兄弟の情、朋友の信、これらを知らぬほどの木強漢では無論ない。ただ彼の住む半球には今までいつでも日が照つていた。日の照つている半球に住んでいるものが、片足をとんと地に突いて、この足の下に真暗な半球があると気がつくのは地理学を習つた時ばかりである。たまには歩いていて、気がつかぬとも限らぬ。しかしさぞ暗い事だろうと身に沁みてぞつとする事はあるまい。高

柳君はこの暗い所に淋しく住んでいる人間である。中野君とはただ大地を踏まえる足の裏が向き合っているというほかに何らの交渉もない。縫い合わされた大島の表と秩父の裏とは覺束おぼつかなき針の目を忍んで繋ぐ、細い糸の御蔭おかげである。この細いものを、するすると抜けば鹿児島と埼玉の間には依然として何百里の山河さんがが横よこわっている。齒を病やんだ事のないものに、齒の痛みを持って行くよりも、早く齒医者に馳かけつけるのが近道だ。そう痛がらんでもいいさと云われる病人は、けっして慰藉を受けたとは思うまい。

「君などは悲観する必要がないから結構だ」と、ビステキを半分で断念した高柳君は敷島をふかしながら、相手の顔を眺めた。相手は口をもがもがさせながら、右の手を首と共に左右に振ったのは、高柳君に同意を表しないと見える。

「僕が悲観する必要がない？ 悲観する必要がないとすると、つまりおめでたい人間と云う意味になるね」

高柳君は覺えず、薄くちびるい唇を動かしかけたが、微かすかな漣さざなみは頬ほまで広がらぬ先に消えた。相手はなお言葉をつづける。

「僕だつて三年も大学にいて多少の哲学書や文学書を読んでるじゃないか。こう見えても世の中が、どれほど悲観すべきものであるかぐらいは知ってるつもりだ」

「書物の上でだろう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろしたように云う。

「書物の上——書物の上では無論だが、実際だって、これでなかなか苦痛もあり煩悶もあるんだよ」

「だって、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたいだけ出来るし、述作は思う通りにやれるし。僕に較べると君は実に幸福だ」と高柳君今度はさも羨ましそうに嘆息する。

「ところが裏面はなかなかそんな気楽なんじゃないさ。これでもいろいろな心配があつて、いやになるのだよ」と中野君は強いて心配の所有権を主張している。

「そうかなあ」と相手は、なかなか信じない。

「そう君まで茶かしちや、いよいよつまらなくなる。実は今日あたり、君の所へでも出掛けて、大に同情してもらおうかと思つていたところさ」

「訳をきかせなくつちや同情も出来ないね」

「訳はだんだん話すよ。あんまり、くさくさするから、こうやって散歩に来たくらいなものさ。ちつとは察するがいい」

高柳君は今度は公然とにやにやと笑つた。ちつとは察するつもりでも、察しようがない

のである。

「そうして、君はまたなんで今頃公園なんか散歩しているんだね」と中野君は正面から高柳君の顔を見たが、

「や、君の顔は妙だ。日の射^さしている右側の方は大変血色がいいが、影になつてる方は非常に色^{いろつや}沢^やが悪い。奇妙だな。鼻を境に矛盾^{むじゆん}が睨^{にら}めこをしている。悲劇と喜劇の仮面^{めん}を半々につき合せたようだ」と息もつがず、述べ立てた。

この無心の評を聞いた、高柳君は心の秘密を顔の上で読まれたように、はつと思つと、右の手で額の方から顚^{あご}のあたりまで、ぐるりと撫^なで廻^まわした。こうして顔の上の矛盾をかき混^まぜるつもりなのかも知れない。

「いくら天氣がよくつても、散歩なんかする暇^{ひま}はない。今日は新橋の先まで遺失品を探^さがしに行つてその帰りがけにちよつとついだから、ここで休んで行こうと思つて来たのさ」と顔を攪^かき廻^ました手を顎^{あご}の下へかつて依然として浮かぬ様子をする。悲劇の面^{めん}と喜劇の面をまぜ返えしたから通例の顔になるはずであるのに、妙に濁つたものが出来上つてしまつた。

「遺失品で、何を落したんだい」

「昨日電車の中で草稿を失つて——」

「草稿？ そりや大変だ。僕は書き上げた原稿が雑誌へ出るまでは心配でたまらない。実際草稿なんてものは、吾々に取つて、命より大切なものだからね」

「なに、そんな大切な草稿でも書ける暇があるようだといいんだけれども——駄目だ」と自分を軽蔑したような口調で云う。

「じゃ何の草稿だい」

「地理教授法の訳だ。あしたまでに届けるはずにしてあるのだから、今なくなつちや原稿料も貰えず、またやり直さなくつちやならず、実に厭になつちまう」

「それで、探がしに行つても出て来ないのかい」

「来ない」

「どうしたんだらう」

「おおかた車掌が、うちへ持つて行つて、はたきでも拵えたんだらう」

「まさか、しかし出なくつちや困るね」

「困るなあ自分の不注意と我慢するが、その遺失品係りの厭な奴だ事つて——実に不親切で、形式的で——まるで版行におしたような事をべらべらと一通り述べたが以上、何を

聞いても知りません知りませんで持ち切っている。あいつは廿世紀の日本人を代表している模範的人物だ。あすこの社長もきつとあんな奴に違ちがない」

「ひどく癩しやくさわに障さわつたものだね。しかし世の中はその遺失品係りのようなのばかりじゃないからいいじゃないか」

「もう少し人間らしいのがいるかい」

「皮肉な事を云う」

「なに世の中が皮肉なのさ。今の世のなかは冷酷の競進きやうしん会かい 見たようなものだ」と云いながら呑みかけの「敷島」を二階の欄干てすりから、下へ抛なげる途端とたんに、ありがとうと云う声が出て、ぬつと門かどぐち口ぐちを出た二人連ふたりづれの中折帽の上へ、うまい具合に燃殻もえがらが乗のりつかった。男は帽子から煙を吐いて得意になつて行く。

「おい、ひどい事をするぜ」と中野君が云う。

「なに過あやちだ。——ありや、さつきの実業家だ。構はうもんか抛ほうつて置け」

「なるほどさつきの男だ。何で今までぐずぐずしていたんだらう。下で球たまでも突ついていたのか知らん」

「どうせ遺失品係りの同類だから何でもするだらう」

「そら気がついた——帽子を取ってはたいている」

「ハハハハ滑稽だ」と高柳君は愉快そうに笑った。

「随分人が悪いなあ」と中野君が云う。

「なるほど善くないね。偶然とは申しながら、あんな事で仇を打つのは下等だ。こんな真似をして嬉しがるようでは文学士の価値もめちやめちやだ」と高柳君は瞬時にしてまた元の浮かぬ顔にかえる。

「そうさ」と中野君は非難するような賛成するような返事をする。

「しかし文学士は名前だけで、その実は筆耕だからな。文学士にもなって、地理教授法の翻訳の下働きをやつてるようじゃ、心細い訳だ。これでも僕が卒業したら、卒業したらつて待つててくれた親もあるんだからな。考えると気の毒なものだ。この様子じやいつまで待つててくれたつて仕方がない」

「まだ卒業したばかりだから、そう急に有名にはなれないさ。そのうち立派な作物を出して、大に本領を發揮する時に天下は我々のものとなるんだよ」

「いつの事やら」

「そう急いたつて、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、何でも気を永くして尻を

据^すえてかからなくつちや、駄目だ。なに、世間じや追々我々の真価を認めて来るんだからね。僕なんぞでも、こうやって始^し終^{じゆう}書いていると少しは人の口に乗るからね」

「君はいいさ。自分の好きな事を書く余裕があるんだから。僕なんか書きたい事はいくらかでもあるんだけど落ちついて述作なぞをする暇はとてもない。実に残念でたまらない。保護者でもあつて、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな。せめて、何でもいいから、月々きまつて六十円ばかり取れる口があるといいのだけでも、卒業前から自活はしていたのだが、卒業してもやつぱりこんな困難するだろうとは思わなかった」

「そう困難じや仕方がない。僕の中の財産が僕の自由になると、保護者になつてやるんだがな」

「どうか願います。——実に厭^{いや}になつてしまふ。君、今考えると田舎の中学の教師の口だつて、容易にあるもんじやないな」

「そうだろうな」

「僕の友人の哲学科を出たものなんか、卒業してから三年になるが、まだ遊^{あそ}んでるぜ」

「そうかな」

「それを考えると、子供の時なんか、訳もわからずに悪い事をしたもんだね。もつとも今

とその頃とは時勢が違うから、教師の口も今ほど^{ふつてい}扠底でなかったかも知れないが」

「何をしたんだい」

「僕の国の中学校に白井道也^{しらいどうや}と云う英語の教師がいたんだがね」

「道也た妙な名だね。釜^{かま}の銘^{めい}にありそうじゃないか」

「道也^{どうや}と読むんだか、何だか知らないが、僕らは道也、道也って呼んだものだ。その道也先生がね——やつぱり君、文学士だぜ。その先生をとうとうみんなして追い出してしまった」

「どうして」

「どうしてって、ただいじめて追い出しちまったのさ。なに良い先生なんだよ。人物や何かは、子供だからまるでわからなかったが、どうも悪い人じゃなかったらしい……」

「それで、なぜ追い出したんだい」

「それがさ、中学校の教師なんて、あれでなかなか悪い奴がいるもんだぜ。僕らあ煽^{せんど}動^うされたんだね、つまり。今でも覚えているが、夜^よる十五六人で隊を組んで道也先生の家の前へ行ってワーって^{うち}呐喊^{とっかん}して二つ三つ石を投げ込んで来るんだ」

「乱暴だね。何だって、そんな馬鹿な真似^{まね}をするんだい」

「なぜだかわからない。ただ面白いからやるのさ。おそらく吾々の仲間でなぜやるんだか知ってたものは誰もあるまい」

「気楽だね」

「実に気楽さ。知ってるのは僕らを煽動せんどうした教師ばかりだろう。何でも生意気なまいきだからやれって云うのさ」

「ひどい奴だな。そんな奴が教師にいるかい」

「いるとも。相手が子供だから、どうしても云う事を聞くからかも知れないが、いるよ」

「それで道也先生どうしたい」

「辞職しちまった」

「可哀想かわいそうに」

「実に気の毒な事をしたもんだ。定めし転任先をさがす間活計かつけいに困ったろうと思つてね。今度逢おおいつたら大に謝罪の意を表するつもりだ」

「今どこにいるんだい」

「どこにいるか知らない」

「じゃいつ逢うか知れないじゃないか」

「しかしいつ逢うかわからない。ことによると教師の口がなくなつて死んでしまつたかも知れないね。——何でも先生辞職する前に教場へ出て来て云つた事がある」

「何て」

「諸君、吾々は教師のために生きべきものではない。道のために生きべきものである。道は尊たつといものである。この理窟りくつがわからないうちは、まだ一人前になつたのではない。諸君も精出してわかるようにおなり」

「へえ」

「僕らは不あいかわらず相変教場内でワーつと笑つたあね。生意気だ、生意気だつて笑つたあね。——どつちが生意気か分りやしない」

「随分田舎の学校などにや妙な事があるものだね」

「なに東京だつて、あるんだよ。学校ばかりじゃない。世の中はみんなこれなんだ。つまらない」

「時にだいが長話しをした。どうだ君。これから品川の妙花園みょうかえんまで行かないか」

「何しに」

「花を見にさ」

「これから帰って地理教授法を訳さなくっちゃならない」

「一日ぐらい遊んだってよかろう。ああ云う美くしい所へ行くと、好い心持ちになって、翻訳もはかが行くぜ」

「そうかな。君は遊びに行くのかい」

「遊かたがたさ。あすこへ行つて、ちよつと写生して来て、材料にしようと思つてるんだがね」

「何の材料に」

「出来たら見せるよ。小説をかいているんだ。そのうちの一章に女が花園はなぞののなかに立つて、小さな赤い花を余念よねんなく見詰みつめっていると、その赤い花がだんだん薄くなつてしまいに真白になつてしまふと云うところを書いて見たいと思うんだがね」

「空想小説かい」

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいような気持のするものが書きたい。うまく感じが出ればいいが。まあ出来たら読んでくれたまえ」

「妙花園えなんぎ、そんな参考にやならないよ。それよりかうちへ帰つてホルマン・ハントの画えでも見る方がいい。ああ、僕も書きたい事があるんだがな。どうしても時がない」

「君は全体自然がきらいだから、いけない」

「自然なんて、どうでもいいじゃないか。この痛切な二十世紀にそんな気楽な事が云って
 いられるものか。僕のは書けば、そんな夢見たようなものじゃないんだからな。奇麗きれいでな
 くつても、痛くつても、苦しくつても、僕の内面の消息にどこか、触れていればそれで満
 足するんだ。詩的でも詩的でなくつても、そんな事は構わない。たとい飛び立つほど痛く
 つても、自分で自分の身体からだを切つて見て、なるほど痛いなど云うところを充分書いて、人
 に知らせてやりたい。呑気のんきなものや気楽なものはどうてい夢にも想像し得られぬ奥の方に
 こんな事実がある、人間の本体はここにあるのを知らないかと、世の道楽ものに教えて、
 おやそうか、おれは、まさか、こんなものとは思つていなかったが、云われて見るとなる
 ほど一言いちごんもない、恐れ入つたと頭を下げさせるのが僕の願なんだ。君とはだいぶ方角が
 違う」

「しかしそんな文学は何だか心持ちがわるい。——そりや御随意だが、どうだい妙花園みょうかえん
 に行く気はないかい」

「妙花園へ行くひまがあれば一頁ページでも僕の主張をかくがなあ。何だか考えると身体がむず
 むずするようだ。実際こんなに呑気のんきにして、生焼なまやきのビステッキなどを食つちやいられな

いんだ」

「ハハハハまたあせる。いいじゃないか、さっきの商人見たような連中もいるんだから」

「あんなのがいるから、こっちはなお仕事をしたくなる。せめて、あの連中の十分一の金と時があれば、書いて見せるがな」

「じゃ、どうしても妙花園は不賛成かね」

「遅くなるもの。君は冬服を着ているが、僕はいまだに夏服だから帰りに寒くなって風でも引くといけない」

「ハハハハ妙な逃げ路を発見したね。もう冬服の時節だね。着換えればいい事を。君は万事無精だよ」

「無精で着換えないんじゃない。ないから着換えないんだ。この夏服だって、まだ一文も払っていやしない」

「そうなのか」と中野君は気の毒な顔をした。

午飯ひるめしの客は皆去り尽して、二人が椅子いすを離れた頃はどこどころの卓布たくふの上に麵麩パンくず屑こぎやかである。ロハ台は依然として、が淋しく散らばっていた。公園の中は最前よりも一層賑かである。ロハ台は依然として、

どこの何某か知らぬ男と知らぬ女で占領されている。秋の日は赫として夏服の背中を通す。

三

檜の扉に銀のような瓦を載せた門を這入ると、御影の敷石に水を打って、斜めに十歩ばかり歩ませる。敷石の尽きた所に擦り硝子の開き戸が左右から寂然と鎖されて、秋の更くるに任すがごとく邸内は物静かである。

磨き上げた、柂の柱に象牙の臍をちよつと押すと、しばらくして奥の方から足音が近づいてくる。がちやと鍵をひねる。玄関の扉は左右に開かれて、下は鏡のようなたたきとなる。右の方に周囲一尺余の朱泥まがいの鉢があつて、鉢のなかには棕栢竹が二三本靡くべき風も受けずに、ひそやかに控えている。正面には高さ四尺の金屏に、三条の小鍛冶が、異形のものを相槌に、霊夢に叶う、御門の太刀を丁と打ち、丁と打っている。

取次に出たのは十八九のしとやかな下女である。白井道也と云う名刺を受取つたまま、

あの若旦那様で？ と聞く。道也先生は首を傾けてちよつと考えた。若旦那にも大旦那にも中野と云う人に逢うのは今が始めてである。ことによるとまるで逢えないで帰るかも計られん。若旦那か大旦那かは逢つて始めてわかるのである。あるいは分らないで生涯それぎりになるかも知れない。今まで訪問に出懸けて、年寄か、小供か、跛か、眼つかちか、要領を得る前に門前から追い還された事は何遍もある。追い還されさえしなければ大旦那か若旦那かは問うところでない。しかし聞かれた以上はどつちか片づけなければならん。どうでもいい事を、どうしてもよくないように決断しろと逼らるる事は賢者が愚物に對して払う租税である。

「大学を御卒業になつた方の……」とまで云つたが、ことによると、おやじも大学を卒業しているかも知れんと心づいたから

「あの文学をおやりになる」と訂正した。下女は何とも云わずに御辭儀をして立つて行く。白足袋の裏だけが目立つてよごれて見える。道也先生の頭の上には丸く鉄を鑄抜いた、かな灯籠がぶら下がっている。波に千鳥をすかして、すかした所に紙が張つてある。このなかへ、どうしたら灯がつけられるのかと、先生は仰向いて長い鎖りを眺めながら考えた。下女がまた出てくる。どうぞこちらへと云う。道也先生は親指の凹んで、前緒のゆるん

だ下駄を立派な沓脱へ残して、ひよる長い糸瓜のようなからだを下女の後ろから運んで行く。

応接間は西洋式に出来ている。丸い卓には、薔薇の花を模様にした五六輪を、淡い色で織り出したテーブル掛を、雑作もなく引き被せて、末は同じ色合の絨毯と、続づくがごとく、切れたるがごとく、波を描いて床の上に落ちてゐる。暖炉は塞いだままの一尺前に、二枚折の小屏風を穴隠しに立ててある。窓掛は緞子の海老茶色だから少々全体の装飾上調和を破るようだが、そんな事は道也先生の眼には入らない。先生は生れてからいまだかつてこんな奇麗な室へ這入った事はないのである。

先生は仰いで壁間の額を見た。京の舞子が友禪の振袖に鼓を調べている。今打つて、鼓から、白い指が弾き返されたばかりの姿が、小指の先までよくあらわれている。しかし、そんな事に氣のつく道也先生ではない。先生はただ氣品のない画を掛けたものだと思つたばかりである。向の隅にヌーボー式の書棚があつて、美しい洋書の一部が、窓掛の隙間から洩れて射す光線に、金文字の甲羅を干している。なかなか立派である。しかし道也先生これには毫も辟易しなかつた。

ところへ中野君が出てくる。紬の綿入に縮緬の兵子帯をぐるぐる巻きつけて、金縁

の眼鏡めがね越なしに、道也先生をまぼしそうに見て、「や、御待たせ申しまして」と椅子へ腰をおろす。

道也先生は、あやしげな、銘仙めいせんの上を蔽おほうに黒木綿くろもめんの紋付をもつてして、嘉平かへい次平じへいの下へ両手を入れたまま、

「どうも御邪魔をします」と挨拶あいさつをする。泰然たいぜんたるものだ。

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしそうにしていたが、やがて思い切った調子で

「あなたが、白井道也とおつしやるんで」と大なる好奇心おおいをもつて聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ。それをかように聞くのは世馴よなれぬ文学士だからである。

「はい」と道也先生は落ちついている。中野君のあては外はずれた。中野君は名刺を見た時はつと思つて、頭のなかは追い出された中学校の教師だけになっている。可哀かわい想そうだと云う念頭に尾羽おほうち枯らした姿を目前に見て、あなたが、あの中学校で生徒からいじめられた白井さんですかと聞き糺ただしたくてならない。いくら気の毒でも白井違いで気の毒がったのでは役に立たない。気の毒がるためには、聞き糺すためには「あなたが白井道也とおつしやるんで」と切り出さなくつてはならなかった。しかしせっかくの切り出しようも泰然た

る「はい」のために無駄死むだじにをしてしまった。初心しよしんなる文学士は二の句をつぐ元気も作さりや略くもないのである。人に同情を寄せたいと思うとき、向むじうが泰然の具足とくで身を固めていては芝居にはならん。器用なものはこの泰然いっかくの一角を針で突き透とおしても思おもいを遂いとげる。中野君は好人物ながらそれほど人を取り扱い得るほど世の中を知らない。

「実は今日御邪魔に上がったのは、少々御願があつて参つたのですが」と今度は道也先生の方から打つて出る。御願は同情の好敵手である。御願を持たない人には同情する張り合がない。

「はあ、何でも出来ます事なら」と中野君は快く承知した。

「実は今度江湖雜誌こうこざつしで現代青年の煩悶はんもんに対する解決と云う題で諸先生方の御高説を發表する計画がありまして、それで普通の大家ばかりでは面白くないと云うので、なるべく新しい方もそれぞれ訪問する訳になりましたので——そこで実はちよつと往つて来てくれと頼まれて来たのですが、御差支おさしつかえがなければ、御話を筆記して参りたいと思います」

道也先生は静かに懐ふところから手帳と鉛筆を取り出した。取り出しはしたものの別に筆記した様子もなければ強しいて話させたい景色けしきも見えない。彼はかかる愚ぐな問題を、かかる青年の口から解決して貰もらいたいとは考えていない。

「なるほど」と青年は、耀かがやく眼めを挙あげて、道也先生を見たが、先生は宵越よいごしの麦酒ビールのごとく気の抜けた顔をしているので、今度は「さよう」と長く引つ張つて下を向いてしまった。

「どうぞでしょう、何か御説はありますまいか」と催促を義理ぎりなくめにする。ありませんと云つたら、すぐ帰る気かも知れない。

「そうですね。あつたつて、僕のようなものの云う事は雑誌へ載のせる価値はありませんよ」「いえ結構です」

「全体どこから、聞いていらしたんです。あまり突然まともじや纏まとつた話の出来るはずがないですから」

「御名前は社主が折々雑誌の上で拝見するそうで」

「いえ、どうしまして」と中野君は横を向いた。

「何でもよいですから、少し御話し下さい」

「そうですね」と青年は窓の外を見て躊躇ちゆうちよしている。

「せっかく来たものですか」

「じゃ何か話しましょう」

「はあ、どうぞ」と道也先生鉛筆を取り上げた。

「いったい煩悶と云う言葉は近頃だいぶはやるようだが、大抵は当座のもので、いわゆる三日坊主のものが多い。そんな種類の煩悶は世の中が始まってから、世の中がなくなるまで続くので、ちつとも問題にはならないでしょう」

「ふん」と道也先生は下を向いたなり、鉛筆を動かしている。紙の上を滑らす音が耳立って聞える。

「しかし多くの青年が一度は必ず陥る、また必ず陥るべく自然から要求せられている深刻な煩悶が一つある。……」

鉛筆の音がする。

「それは何だと云うと——恋である……」

道也先生はぴたりと筆記をやめて、妙な顔をして、相手を見た。中野君は、今さら気がついたようにちよつとしよげ返したが、すぐ気を取り直して、あとをつづけた。

「ただ恋と云うと妙に御聞きになるかも知れない。また近頃はあまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶は大なる事実であって、事実の前にはいかなるものも頭を下げねばならぬ訳だからどうする事も出来ないのである」

道也先生はまた顔をあげた。しかし彼の長い蒼白い相貌の「微塵」だも動いておらんから、彼の心のうちは無論わからない。

「我々が生涯を通じて受ける煩悶のうちで、もつとも痛切なもつとも深刻な、またもつとも劇烈な煩悶は恋よりほかにないだろうと思うのです。それでですね、こう云う強大な威力のあるものだから、我々が一度びこの煩悶の炎火のうちに入ると非常な変形をうけるのです」

「変形？　ですか」

「ええ形を変ずるのです。今まではただふわふわ浮いていた。世の中と自分の関係がよくわからないで、のんびんぐらりんに暮らしていたのが、急に自分が「明瞭」になるんです」

「自分が明瞭とは？」

「自分の存在がです。自分が生きているような心持ちが確然と出てくるのです。だから恋は一方から云えば煩悶に相違ないが、しかしこの煩悶を経過しないと自分の存在を生涯悟る事が出来ないのです。この浄罪界に足を入れたものでなければ決して天国へは登れまいと思うのです。ただ楽天だつてしようがない。恋の苦みを嘗めて人生の意義を確かめた上の楽天でなくっちゃ、うそです。それだから恋の煩悶は決して他の方法によって解決

されない。恋を解決するものは恋よりほかにないです。恋は吾人ごじんをして煩悶せしめて、また吾人をして解脱げだつせしむるのである。……」

「そのくらいなところで」と道也先生は三度目に顔を挙げた。

「まだ少しあるんですが……」

「承うけたまわるのはいいですが、だいぶ多数の意見を載せるつもりですから、かえってあとから削除さくじよすると失礼になりますから」

「そうですか、それじゃそのくらいにして置きましょう。何だかこんな話をするのは始めてですから、さぞ筆記しにくかったでしょう」

「いいえ」と道也先生は手帳ふとじろを懐へ入れた。

青年は筆記者が自分の説を聴いて、感心の余り少しは贅辞でも呈するかと思つたが、相手は例のごとく泰然としてただいいえと云つたのみである。

「いやこれは御邪魔をしました」と客は立ちかける。

「まあいいでしょう」と中野君はとめた。せめて自分の説を少々でも批評して行つて貰いたいのである。それでなくても、せんだつて日比谷で聞いた高柳君の事をちよつと好奇心から、あたつて見たいのである。一言いちごんにして云えば中野君はひまなのである。

「いえ、せつかくですが少々急ぎますから」と客はもう椅子を離れて、一步テーブルを退いた。いかにひまな中野君も「それでは」とついに降参して御辞儀をする。玄関まで送つて出た時思い切つて

「あなたは、もしや高柳周作と云う男を御存じじやないですか」と念晴らしのため聞いて見る。

「高柳？ どうも知らんようです」と沓脱から片足をタタキへおろして、高い背を半分後ろへ振り向けた。

「ことし大学を卒業した……」

「それじゃ知らん訳だ」と両足ともタタキの上へ運んだ。

中野君はまだ何か云おうとした時、敷石をがらがらと車の軋る音がして梶棒は硝子の扉の前にとまった。道也先生が扉を開く途端に車上の人はひらり厚い雪駄を御影の上に落した。五色の雲がわが眼を掠めて過ぎた心持ちで往来へ出る。

時計はもう四時過ぎである。深い碧りの上へ薄いセピヤを流した空のなかに、はつきりせぬ鳶が一羽舞っている。雁はまだ渡つて来ぬ。向から袴の股立ちを取つた小供が唱歌を謡いながら愉快そうにあるいて来た。肩に担いだ笹の枝には草の穂で作つた梟が踊りなが

らぶら下がって行く。おおかた雑子ヶ谷へでも行つたのだろう。軒の深い菓物屋の奥の方に柿ばかりがあかるく見える。夕暮に近づくと何となくうそ寒い。

薬王寺前に来たのは、帽子の庇の下から往来の人の顔がしかと見分けのつかぬ頃である。三十三所と彫つてある石標を右に見て、紺屋の横町を半丁ほど西へ這入るとわが家の門口へ出る、家のなかは暗い。

「おや御帰り」と細君が台所で云う。台所も玄関も大した相違のないほど小さな家である。「下女はどつかへ行つたのか」と二畳の玄関から、六畳の座敷へ通る。

「ちよつと、柳町まで使に行きました」と細君はまた台所へ引き返す。

道也先生は正面の床の片隅に寄せてあつた、洋灯を取つて、椽側へ出て、手ずから掃除を始めた。何か原稿用紙のようなもので、油壺を拭き、ほやを拭き、最後に心の黒い所を好い加減になすくつて、丸めた紙は庭へ棄てた。庭は暗くなって様子が頓とわからない。ない。

机の前へ坐つた先生は燐寸を擦つて、しゅつと云う間に火をランプに移した。室はたちまち明かになる。道也先生のために云えばむしろ明かるくならぬ方が増しである。床はあるが、言訳ばかりで、現に幅も何も懸つておらん。その代り累々と書物やら、原稿紙

やら、手帳やらが積んである。机は白木の三宝を大きくしたくらいな単簡なもので、インキ壺と粗末な筆硯のほかには何物をも載せておらぬ。装飾は道也先生にとって不要であるのか、または必要でもこれに耽る余裕がないのかは疑問である。ただ道也先生がこの一点の温気なき陋室に、晏如として筆硯を呵するの勇氣あるは、外部より見て争うべからざる事実である。ことによると先生は装飾以外のあるものを目的にして、生活しているのかも知れない。ただこの争うべからざる事実を確めれば、確かめるほど細君は不愉快である。女は装飾をもつて生れ、装飾をもつて死ぬ。多数の女はわが運命を支配する恋さえも装飾視して憚からぬものだ。恋が装飾ならば恋の本尊たる愛人は無論装飾品である。否、自己自身すら装飾品をもつて甘んずるのみならず、装飾品をもつて自己を目前にくれぬ人を評して馬鹿と云う。しかし多数の女はしかく人世を観ずるにもかかわらず、しかく観ずるとはけつして思わない。ただ自己の周囲を纏綿する事物や人間がこの装飾用の目的に叶わぬを発見するとき、何となく不愉快を受ける。不愉快を受けると云うのに周囲の事物人間が依然として旧態をあらためぬ時、わが眼に映ずる不愉快を左右前後に反射して、これでも改めぬかと云う。ついにはこれでもか、これでもかと念入りの不愉快を反射する。道也の細君がここまで進歩しているかは疑問である。しかし普通一般の女性であ

るからには裝飾気なきこの空氣のうちに生息する結果として、自然この方向に進行するのが順当であろう。現に進行しつつあるかも知れぬ。

道也先生はやがて懐から例の筆記帳を出して、原稿紙の上へ写し始めた。袴を着けたままである。かしこまったままである。袴を着けたまま、かしこまったままで、中野輝一の恋愛論を筆記している。恋とこの室、恋とこの道也とはどうてい調和しない。道也は何と思つて浄書しているかしらん。人は様々である、世も様々である。様々の世に、様々の人が動くのもまた自然の理である。ただ大きく動くものが勝ち、深く動くものが勝たねばならぬ。道也は、あの金縁の眼鏡を掛けた恋愛論よりも、小さくかつ浅いと自覚して、かく慎重に筆記を写し直しているのであらうか。床の後ろでが鳴いている。

細君が襖をすうと開けた。道也は振り向きもしない。「まあ」と云つたなり細君の顔は隠れた。

下女は帰つたようである。煮豆が切れたから、てつか味噌を買つて来たと云っている。豆腐が五厘高くなつたと云っている。裏の専念寺で夕の御務めをかあんかあんやっている。細君の顔がまた襖の後ろから出た。

「あなた」

道也先生は、いつの間にやら、筆記帳を閉じて、今度はまた別の紙へ、何か熱心に認めている。

「あなた」と妻君は二度呼んだ。

「何だい」

「御飯です」

「そうか、今行くよ」

道也先生はちよつと細君と顔を合せたぎり、すぐ机へ向つた。細君の顔もすぐ消えた。台所の方でくすくす笑う声がある。道也先生はこの一節をかき終るまでは飯も食いたくないのだろう。やがて句切りのよい所へ来たと見えて、ちよつと筆を擱いて、傍へ積んだ草稿をはぐつて見て「二百三十一頁」と独語した。著述でもしていると見える。

立つて次の間へ這入る。小さな長火鉢に平鍋がかかつて、白い豆腐が煙りを吐いて、ふるふる顫えている。

「湯豆腐かい」

「はあ、何にもなくて、御気の毒ですが……」

「何、なんでもいい。食ってさえいれば何でも構わない」と、膳にして重箱をかねた

るごとき四角なものの前へ坐つて箸を執る。

「あら、まだ袴を御脱ぎなさらないの、随分ね」と細君は飯を盛った茶碗を出す。

「忙がしいものだから、つい忘れた」

「求めて、忙がしい思をしていらつしやるのだから、……」と云つたぎり、細君は、湯豆腐の鍋と鉄瓶とを懸け換える。

「そう見えるかい」と道也先生は存外平気である。

「だって、楽で御金の取れる口は断つておしまいなすつて、忙がしくつて、一文にもならない事ばかりなさるんですもの、誰だつて酔興と思ひますわ」

「思われてもしようがない。これがおれの主義なんだから」

「あなたは主義だからそれでいいでしょうさ。しかし私は……」

「御前は主義が嫌だと云うのかね」

「嫌も好もないんですけれども、せめて——人並には——なんぼ私だつて……」

「食えさえすればいいじゃないか、贅沢を云や誰だつて際限はない」

「どうせ、そうでしょう。私なんざどんなになつても御構いなすつちや下さらないのでし

よう」

「このてつか味噌は非常に辛いな。どこで買って来たのだ」

「どこですか」

道也先生は頭をあげて向の壁を見た。鼠色の寒い色の上に大きな細君の影が写っている。その影と妻君とは同じように無意義に道也の眼に映じた。

影の隣りに糸織かとも思われる、女の晴衣が衣紋竹につるしてかけてある。細君のものにしては少し派出過ぎるが、これは多少景氣のいい時、田舎で買ってやったものだ。今だに記憶している。あの時分は今とはだいぶ考えも違っていた。己れと同じような思想やら、感情やら持っているものは珍らしくあるまいと信じていた。したがって文筆の力で自分から卒先して世間を警醒しようとする気にもならなかった。

今はまるで反対だ。世は名門を謳歌する、世は富豪を謳歌する、世は博士、学士までも謳歌する。しかし公正な人格に逢うて、位地を無にし、金錢を無にし、もしくはその学力、才芸を無にして、人格そのものを尊敬する事を解しておらん。人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、その上皮たる附属物をもつてすべてを律しようとする。この附属物と、公正なる人格と戦うとき世間は必ず、この附属物に雷同して他の人格を蹂躪せんと試みる。天下一人の公正なる人格を失うとき、天下一段の光明を失う。公正

なる人格は百の華族、百の紳商、百の博士をもつてするも償いがたきほど貴きものである。われはこの人格を維持せんがために生れたるのほか、人世において何らの意義をも認め得ぬ。寒に衣し、餓に食するはこの人格を維持するの便法に過ぎぬ。筆を呵し硯を磨するのもまたこの人格を他の面上に貫徹するの方策に過ぎぬ。——これが今の道也の信念である。この信念を抱いて世に処する道也は細君の御機嫌ばかり取つてはおれぬ。壁に掛けてあつた小袖を眺めていた道也はしばらくして、夕飯を済ましながら、

「どこぞへ行つたのかい」と聞く。

「ええ」と細君は二字の返事を与えた。道也は黙つて、茶を飲んでゐる。末枯るる秋の季節だけにすこぶる閑静な問答である。

「そう、べんべんと真田の方を引つ張つとく訳にも行きませぬ、家主の方もどうかしなければならず、今月の末になると米薪の払でまた心配しなくつちやなりませんから、算段に出掛けたんです」と今度は細君の方から切り出した。

「そうか、質屋へでも行つたのかい」

「質に入れるようなものは、もうありやしませんわ」と細君は恨めしそうに夫の顔を見る。

「じゃ、どこへ行つたんだい」

「どこつて、別に行く所ありませんから、御兄さんの所へ行きました」

「兄の所？ 駄目だよ。兄の所なんぞへ行つたつて、何になるものか」

「そう、あなたは、何でも始から、けなしておしまいなさるから、よくないんです。いくら教育が違うからつて、気性が合わないからつて、血を分けた兄弟じゃありませんか」

「兄弟は兄弟さ。兄弟でないとは云わん」

「だからさ、膝とも談合と云うじやありませんか。こんな時には、ちつと相談にいらつしやるがいいじやありませんか」

「おれは、行かんよ」

「それが瘦我慢ですよ。あなたはそれが癖なんですよ。損じやあ、ありませんか、好んで人に嫌われて……」

道也先生は空然として壁に動く細君の影を見ている。

「それで才覚が出来たのかい」

「あなたは何でも一足飛ね」

「なにが」

「だって、才覚が出来る前にはそれぞれ魂胆もあれば工面もあるじやありませんか」

「そうか、それじゃ最初から聞き直そう。で、御前が兄のうちへ行つたんだね。おれに内所いしよで」

「内所だつて、あなたのためじやありませんか」

「いいよ、ためでいいよ。それから」

「で御兄おあにいさんに、御目に懸かかつていろいろ今までの御無沙汰ごぶさたの御託おわびやら、何やらして、それから一部始終いちぶしじゆうの御話をしたんです」

「それから」

「すると御兄おあにいさんが、そりや御前には大変わたくし気の毒だつて大変私わたしに同情して下さつて……」

「御前に同情した。ふうん。——ちよつとその炭取を取れ。炭をつがないと火種ひたねが切れる」

「で、そりや早く整理しなくつちや駄目だ。全体なぜ今まで抛ほうつて置いたんだつておつしやるんです」

「旨うまい事を云わあ」

「まだ、あなたは御兄おあにいさんを疑つていらつしやるのね。罰ばつがあたりますよ」

「それで、金でも貸したのかい」

「ほらまた一足飛いっそくとびをなさる」

道也先生は少々おかしくなつたと見えて、にやりと下を向きながら、黒く積んだ炭を吹き出した。

「まあどのくらいあれば、これまでの穴が奇麗きれいに埋うまるのかと御聞きになるから、——よつぽど言い悪にくかつたんですけれども——とうとう思い切つてね……」でちよつと留めた。道也はしきりに吹いている。

「ねえ、あなた。とうとう思い切つてね——あなた。聞いていらつしやらないの」

「聞かいてるよ」と赫かっ気で赤くなつた顔をあげた。

「思い切つて百円ばかりと云つたの」

「そうか。兄は驚ろいたろう」

「そうしたらね。ふうんて考えて、百円と云う金は、なかなか容易に都合がつく訳のものじゃない……」

「兄の云いそうな事だ」

「まあ聞いていらつしやい。まだ、あとが有るんです。——しかし、ほかの事とは違ちがうから、是非なければ困ると云うならおれが保証人になって、人から借りてやってもいいって仰おしやるんです」

「あやしいものだ」

「まあさ、しまいまで御聞きなさい。——それで、ともかくも本人に逢つて篤と了簡を聞いた上にしようと言うところまでに漕ぎつけて来たのです」

細君は大功名をしたように頬骨の高い顔を持ち上げて、夫を覗き込んだ。細君の眼つきが云う。夫は意気地なしである。終日終夜、机と首つ引をして、兀々と出精しながら、妻と自分を安らかに養うほどの働きもない。

「そうか」と道也は云つたぎり、この手腕に対して、別段に感謝の意を表しようともせぬ。「そうかじや困りますわ。私がここまで拵えたのだから、あとは、あなたが、どうとも為さらくつちやあ。あなたの楯のとりようでせつかくの私の苦心も何の役にも立たなくありますわ」

「いいさ、そう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は手に這入る見込があるから」と道也先生は何の苦もなく云つて退けた。

江湖雑誌の編輯で二十円、英和字典の編纂で十五円、これが道也のきまつた収入である。但しこのほかに仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事においては毎日毎夜筆を休ませた事はないくらいである。しかし金にはならない。たまさか二円、

三円の報酬が彼の懐に落つる時、彼はかえつて不思議に思うのみである。

この物質的に何らの機能もない述作的労力の裡には彼の生命がある。彼の気魄が滴々の墨汁と化して、一字一画に満腔の精神が飛動している。この断篇が読者の眼に映じた時、瞳裏に一道の電流を呼び起して、全身の骨肉が刹那に震えかしと念じて、道也は筆を執る。吾輩は道を載す。道を遮ぎるものは神といえども許さずと誓つて紙に向う。誠は指頭より迸つて、尖る毛穎の端に紙を焼く熱気あるがごとき心地にて句を綴る。白紙が人格と化して、淋漓として飛騰する文章があるとすれば道也の文章はまさにこれである。されども世は華族、紳商、博士、学士の世である。附属物が本体を踏み潰す世である。道也の文章は出るたびに黙殺せられている。妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を作るものを意気地なしと云う。

道也の言葉を聞いた妻君は、火箸を灰のなかに刺したまま、
「今でも、そんな御金が這入る見込があるんですか」と不思議そうに尋ねた。

「今は昔より下落したと云うのかい。ハハハハハ」と道也先生は大きな声を出して笑つた。
妻君は毒気を抜かれて口をあける。

「どうりや一勉強やろうか」と道也は立ち上がる。その夜彼は彼の著述人格論を二百

五十頁までかいた。寝たのは二時過である。

四

「どこへ行く」と中野君が高柳君をつらまえた。所は動物園の前である。太い桜の幹が黒ずんだ色のなかから、銀のような光りを秋の日に射返して、梢を離れる病葉は風なき折々行人の肩にかかる。足元には、ここかしこに枝を辞したる古い奴ががきついている。

色は様々である。鮮血を日に曝して、七日の間日ごとにその変化を葉裏に印して、注意なく一枚のなかに畳み込めたら、こんな色になるだろうと高柳君はさつきから眺めていた。血を連想した時高柳君は腋の下から何か冷たいものが襯衣に伝わるような気分がした。ごほんとり締りのない咳を一つする。

形も様々である。火にあぶったかき餅の状は千差万別であるが、我も我もとみんな反り返る。桜の落葉もがさがさに反り返って、反り返ったまま吹く風に誘われて行く。水気のないものには未練も執着もない。飄々としてわが行末を覚束ない風に任せて平気なのは、死んだ後の祭りに、から騒ぎにはしやぐ了。簡かも知れぬ。風にめぐる落葉と攫

われて行くかんな屑くずとは一種の氣狂きらがである。ただ死したるものの氣狂である。高柳君は死と氣狂とを自然界に点綴てんてつした時、瘡やせた両肩そびを聳そびやかして、またごほんと言うつろな咳せきを一つした。

高柳君はこの瞬間に中野君からつらまえられたのである。ふと気がついて見ると世は太平である。空は朗らかである。美しい着物をきた人が続々行く。相手は薄羅紗うすらしやの外套がいとうに恰好かっこうのいい姿を包んで、頤あごの下に真珠の留針とめばりを輝かしている。——高柳君は相手の姿を見守つたなり黙つていた。

「どこへ行く」と青年は再び問うた。

「今図書館へ行つた帰りだ」と相手はようやく答えた。

「また地理学教授法じゃないか。ハハハハ。何だか不景氣な顔をしているね。どうかしたかい」

「近頃は喜劇の面めんをどこかへ遺失おとしてしまつた」

「また新橋の先まで探さがしに行つて、拳突けんつを喰つたんじやないか。つまらない」

「新橋どころか、世界中探がしてあるいても落ちていそうもない。もう、御やめだ」
「何を」

「何でも御やめだ」

「万事御やめか。当分御やめがよかろう。万事御やめにして僕といっしょに来たまえ」

「どこへ」

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買わされたんだが、ほかに誰も行き手が
がないから、ちょうどいい。君行きたまえ」

「いらぬ切符などを買うのかい。もつたない事をするんだな」

「なに義理だから仕方がない。おやじが買ったんだが、おやじは西洋音楽なんかわからないから
いからね」

「それじゃ余った方を送ってやればいいのに」

「実は君の所へ送ろうと思つたんだが……」

「いいえ。あすこへさ」

「あすことは。——うん。あすこか。何、ありや、いいんだ。自分でも買ったんだ」

高柳君は何とも返事をしないで、相手を真正面から見ている。中野君は少々恐縮の微笑
を洩らして、右の手に握つたままの、山羊やぎの手袋で外套がいとうの胸をびしゃびしゃたた敲き始めた。
「穿はめもしない手袋を握つてあるのは何のためだい」

「なに、今ちよつと隠袋ポツケットから出したんだ」と云いながら中野君は、すぐ手袋をかくしの裏うちに収めた。高柳君の癩かんしゃく癩かはこれで少々治おさまったようである。

ところへ後ろからエーイと云う掛声ひづめがして蹄の音が風を動かしてくる。兩人ふたりは足早に道み傍ちばたへ立ち退いた。黒塗くろぬりのランドーおおいの蓋を、秋の日の暖かきに、払い退けた、中には絹シ帽ルクハットが一つ、美しい紅くれないの日傘ひがさが一つ見えながら、兩人の前を通り過ぎる。

「ああ云う連中が行くのかい」と高柳君が顛あじで馬車の後ろ影を指さす。

「あれは徳川侯爵だよ」と中野君は教えた。

「よく、知ってるね。君はあの人の家来かい」

「家来じゃない」と中野君は真面目まじめに弁解した。高柳君は腹のなかでまたちよつと愉快を覚えた。

「どうだい行こうじゃないか。時間がおくれるよ」

「おけると逢えないと云うのかね」

中野君は、すこし赤くなつた。怒つたのか、弱点をつかれたためか、恥はずかしかったのか、わかるのは高柳君だけである。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌つてばかりいるから、一人坊ひとりぼ

つちになつてしまふんだよ」

打つものは打たれる。参るのは今度こそ高柳君の番である。一人坊つちと云う言葉を聞いた彼は、耳がしいんと鳴つて、非常に淋しい気持がした。

「いやかい。いやなら仕方がない。僕は失敬する」

相手は同情の笑を湛えながら半歩踵をめぐらしかけた。高柳君はまた打たれた。

「いこう」と単簡たんかんに降参する。彼が音楽会へ臨むのは生れてから、これが始めてである。

玄関にかかった時は受付が右へ左りへの案内で忙殺ぼうざつされて、接待掛りの胸につけた、青いリボンを見失うほど込み合つていた。突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲がるのが並等である。下等はないそうだ。中野君は無論上等である。高柳君を顧みながら、こつちだよと、さも物馴ものなれたさまに云う。今日に限つて、特別に下等席を設けて貰つて、そこへ自分だけ這入はいつて聴きいて見たいと一人坊つちの青年は、中野君のあとをつきながら階段を上ぼりつつ考えた。己おのれの右を上のぼる人も、左りを上る人も、またあとからぞろぞろついて来るものも、皆異種類の動物で、わざと自分を包围して、のつぴきさせず二階の大広間へ押し上げた上、あとから、慰み半分に手を拍うつて笑う策さくりやく略りやくのように思われた。後ろを振り向くと、下から緑みどりの滴したたる束髪そくはつの脳巔のうてんが見える。コスメチックで奇麗きれな

一直線を七分三分の割合に鍊り出した頭蓋骨が見える。これらの頭が十も二十も重なり合つて、もう高柳周作は一步でも退く事はならぬとせり上がってくる。

樂堂の入口を這入ると、霞に酔うた人のようにぼうつとした。空を隠す茂みのなかを通り抜けて頂に攀じ登つた時、思いも寄らぬ、眼の下に百里の眺めが展開する時の感じはこれである。演奏台は遙かの谷底にある。近づくためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と逼る播鉢の底に近寄らねばならぬ。播鉢の底は半円形を劃して空に向つて広がる内側面には人間の堀が段々に横輪をえがいている。七八段を下りた高柳君は念のために振り返つて播鉢の側面を天井まで見上げた時、目がちらちらしてちよつと留つた。excuse me と云つて、大きな異人が、高柳君を蔽いかぶせるようにして、一段下へ通り抜けた。駝鳥の白い毛が鼻の先にふらついて、品のいい香りがふんとする。あとから、脳巔の禿げた大男が絹帽を大事そうに抱えて身を横にして女につきながら、二人を擦り抜ける。

「おい、あすこに椅子が二つ空いている」と物馴れた中野君は階段を横へ切れる。並んでいる人は席を立つて二人を通す。自分だけであつたら、誰も席を立つてくれるものはあるまいと高柳君は思つた。

「大変な人だね」と椅子に腰をおろしながら中野君は満場を見廻わす。やがて相手の服装に気がついた時、急に小声になって、

「おい、帽子をとらなくつちや、いけないよ」と云う。

高柳君は卒然として帽子を取って、左右をちよつと見た。三四人の眼が自分の頭の上に注がれていたのを発見した時、やつぱり包圍攻撃だなど思った。なるほど帽子を被つていたものはこの広い演奏場に自分一人である。

「外套は着ていてもいいのか」と中野君に聞いて見る。

「外套は構わないんだ。しかしあつ過ぎるから脱ごうか」と中野君はちよつと立ち上がった。外套の襟を三寸ばかり廻と返したら、左の袖がするりと抜けた、右の袖を抜くとき、領のあたりをつまんだと思つたら、裏を表てに、外套ははや畳まれて、椅子の背中に早くも隠した。下は仕立ておろしのフロックに、近頃流行る白いスリツプが胸衣の胸開に沿うて細い筋を奇麗にあらわしている。高柳君はなるほどいい手際だと羨ましく眺めていた。中野君はどう云ものか容易に坐らない。片手を椅子の背に凭たせて、立ちながら後ろから、左右へかけて眺めている。多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君はこの平気をまた羨ましく感じた。

しばらくすると、中野君は千以上陳列せられたる顔のなかで、ようやくあるものを物色し得たごとく、豊かなる双頬に愛嬌の渦を浮かして、軽く何人にか会釈した。高柳君は振り向かざるを得ない。友の挨拶はどの辺に落ちたのだろうと、こそばゆくも首を振り向けて、斜めに三段ばかり上を見ると、たちまち目があった。黒い髪のただ中に黄の勝った大きなリボンの蝶を颯とひらめかして、細くうねる頸筋を今真直に立て直す女の姿が目があった。紅いは眼の縁を薄く染めて、潤った眼睫の奥から、人の世を夢の底に吸い込むような光りを中野君の方に注いでいる。高柳君はすわよと思つた。

わが穿く袴は小倉である。羽織は染めが剥けて、濁つた色の上に垢が容赦なく日光を反射する。湯には五日前に這入つたぎりだ。襯衣を洗わざる事は久しい。音楽会と自分とはどうい両立するものでない。わが友と自分とは？——やはり両立しない。友のハイカラ姿とこの魔力ある眼の所有者とは、千里を隔ても無線の電気がかかるべく作られている。この一堂の裡に綺羅の香りを嗅ぎ、和楽の温かみを吸うて、落ち合うからは、二人の魂は無論の事、溶けて流れて、かき鳴らす箏の線の細きうちにも、めぐり合わねばならぬ。演奏会は数千の人を集めて、数千の人はことごとく双手を挙げながらこの二人を歓迎している。同じ数千の人はことごとく五指を弾いて、われ一人を排斥している。高柳君はこ

んな所へ来なければよかつたと思つた。友はそんな事を知りようがない。

「もう時間だ、始まるよ」と活版に刷つた曲目を見ながら云う。

「そうか」と高柳君は器械的に眼を活版の上に落した。

一、バイオリン、セロ、ピアノ合奏とある。高柳君はセロの何物たるを知らぬ。二、ソナタ……ベートーベン作とある。名前だけは心得ている。三、アダジヨ……パアージャル作とある。これも知らぬ。四、と読みかけた時拍手の音が急に梁を動かして起つた。演奏者はすでに台上に現われている。

やがて三部合奏曲は始まつた。満場は化石したかのごとく静かである。右手の窓の外に、高い樅の木が半分見えて後ろは暁かの空の国に入る。左手の碧りの窓掛けを洩れて、澄み切つた秋の日が斜めに白い壁を明らかに照らす。

曲は静かなる自然と、静かなる人間のうちに、快よく進行する。中野は絢爛たる空氣の振動を鼓膜に聞いた。声にも色があると嬉しく感じている。高柳は樅の枝を離るる鳶の舞う様を眺めている。鳶が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなと思つた。

拍手がまた盛に起る。高柳君ははつと気がついた。自分はやはり異種類の動物のなかに一人坊つちでおつたのである。隣りを見ると中野君は一生懸命に敲いている。高い高い鳶

の空から、己れをこの窮屈な谷底に呼び返したものの一人は、われを無理矢理にここへ連れ込んだ友達である。

演奏は第二に移る。千余人の呼吸は一度にやむ。高柳君の心はまた豊かになった。窓の外を見ると鳶はもう舞っておらぬ。眼を移して天井を見る。周圍一尺もあろうと思われる梁の六角形に削られたのが三本ほど、樂堂を竪に貫ぬいている、後ろはどこまで通っているか、頭を回らさないから分らぬ。所々に模様に崩した草花が、長い蔓と共に六角を絡んでいる。仰向いて見ていると広い御寺のなかへでも這入った心持になる。そうして黄色い声や青い声が、梁を纏う唐草のように、纏れ合つて、天井から降ってくる。高柳君は無人の境に一人坊つちで佇んでいる。

三度目の拍手が、断わりもなくまた起る。隣の友達は一倍けたたましい敲き方をする。無人の境におつた一人坊つちが急に、霰のごとき拍手のなかに包圍された一人坊つちとなる。包圍はなかなか已まぬ。演奏者が闇を排してわが室に入らんとする間際になおなお烈しくなった。ヴァイオリンを温かに右の腋下に護りたる演奏者は、ぐるりと戸側に体を回らして、薄紅葉を点じたる裾模様を台上に動かして来る。狂うばかりに咲き乱れる白菊の花束を、飄える袖の影に受けとつて、なよやかなる上軀を聴衆の前に、少し

くかがめたる時、高柳は感じた。——この女の楽を聴いたのは、聴かされたのではない。聴かさぬと云うを、ひそかに忍び寄りて、偷み聴いたのである。

演奏は喝采のどよめきの静まらぬうちにまた始まる。聴衆はとっさの際にことごとく死んでしまう。高柳君はまた自由になった。何だか広い原にただ一人立って、遙かの向うから熟柿のような色の暖かい太陽が、のつと上つてくる心持ちがする。小供のうちはこんな感じがよくあつた。今はなぜこう窮屈になつたろう。右を見ても左を見ても人は我を擯斥しているように見える。たつた一人の友達さえ肝心のところで無残の手をぱちぱち敲く。たよる所がなければ親の所へ逃げ帰れと云う話もある。その親があれば始からこんなにはならなかつたろう。七つの時おやじは、どこかへ行つたなり帰つて来ない。友達はそのれから自分と遊ばなくなつた。母に聞くと、おとっさんは今に帰る今に帰ると云つた。母は帰らぬ父を、帰ると云つてだましたのである。その母は今でもいる。住み古るした家を引き払つて、生れた町から三里の山奥に一人侘びしく暮らしている。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共餓えて死ななければならぬ。——たちまち拍手の声が一面に湧き返る。

「今のは面白かつた。今までのうち一番よく出来た。非常に感じをよく出す人だ。——ど

うだい君」と中野君が聞く。

「うん」

「君面白くないか」

「そうさな」

「そうさなじや困ったな。——おいあすこの西洋人の隣りにいる、細かい友禅の着物を着ている女があるだろう。——あんな模様が近頃流行んだ。派出だろう」

「そうかなあ」

「君はカラー・センスのない男だね。ああ云う派出な着物は、集会の時や何かにはごくいいのだね。遠くから見て、見醒めがしない。うつくしくっていい」

「君のあれも、同じようなのを着ているね」

「え、そうかしら、何、ありや、いい加減に着ているんだろう」

「いい加減に着ていれば弁解になるのかい」

中野君はちよつと会話をやめた。左の方に鼻眼鏡をかけて揉上を容赦なく、耳の上で剃り落した男が帳面を出してしきりに何か書いている。

「ありや、音楽の批評でもする男かな」と今度は高柳君が聞いた。

「どれ、——あの男か、あの黒服を着た。なあに、あれはね。画工だよ。いつでも来る男だがね、来るたんびに写生帖を持って来て、人の顔を写している」

「断わりなしにか」

「まあ、そうだろう」

「泥棒だね。顔泥棒だ」

中野君は小さい声でくくと笑った。休憩時間は十分である。廊下へ出るもの、喫煙に行くもの、用を足して帰るもの、が高柳君の眼に写る。女は小供の時見た、豊国の田舎源氏を一枚一枚はぐって行く時の心持である。男は芳年の書いた討ち入り当夜の義士が動いてるようだ。ただ自分が彼らの眼にどう写るであろうかと思うと、早く帰りたくなる。自分の左右前後は活動している。うつくしく活動している。しかし衣食のために活動しているのではない。娯楽のために活動している。胡蝶の花に戯むるがごとく、浮藻の漣に靡くがごとく、実用以上の活動を示している。この堂に入るものは実用以上に余裕のある人でなくてはならぬ。

自分の活動は食うか食わぬかの活動である。和煦的作用ではない。肅殺の運行である。儼たる天命に制せられて、無条件に生を享けたる罪業を償わんがために働らくのである。

頭から云えば胡蝶のごとく、かく翩々たる公衆のいづれを捕え来つて比較されても、少しも恥かしいとは思わぬ。云いたき事、云うて人が点頭く事、云うて人が尊ぶ事はないから云わぬのではない。生活の競争にすべての時間を捧げて、云うべき機会を与えてくれぬからである。吾が云いたくて云われぬ事は、世が聞きたくても聞かれぬ事は、天がわが手を縛るからである。人がわが口を箝するからである。巨万の富をわれに与えて、一銭も使うなかれと命ぜられたる時は富なき昔の心安きに帰る能わずして、命を下せる人を逆しまに詛わんとす。われは呪い死にに死なねばならぬか。——たちまち咽喉が塞がって、ごほんごほん咳き入る。袂からハンケチを出して痰を取る。買った時の白いのが、妙な茶色に変つている。顔を挙げると、肩から觀世よりのように細い金鎖りを懸けて、朱に黄を交えた厚板の帯の間に時計を隠した女が、列のはずれに立って、中野君に挨拶している。

「よう、いらつしやいました」と可愛らしい一二重脛を細めに云う。

「いや、だいぶ盛会ですね。冬田さんは非常な出来でしたな」と中野君は半身を、女の方へ向けながら云う。

「ええ、大喜びで……」と云い捨てて下りて行く。

「あの女を知ってるかい」

「知るものかね」と高柳君は拳突を喰わす。

相手は驚ろいて黙つてしまった。途端に休憩後の演奏は始まる。「四葉の首蓆花」とか云うものである。曲の続く間は高柳君はうつらうつらと聴いている。ぱちぱちと手が鳴ると熱病の人が夢から醒めたように我に帰る。この過程を二三度繰り返して、最後の幻覚から喚び醒まされた時は、タンホイゼルのマーチで銅鑼を敲き大喇叭を吹くところであった。

やがて、千余人の影は一度に動き出した。二人の青年は揉まれながらに門を出た。

日はようやく暮れかかる。図書館の横手に聳える松の林が緑りの色を微かに残して、しだいに黒い影に變つて行く。

「寒くなつたね」

高柳君の答は力の抜けた咳二つであつた。

「君さつきから、咳をするね。妙な咳だぜ。医者にでも見て貰つたら、どうだい」

「何、大丈夫だ」と云いながら高柳君は尖つた肩を二三度ゆすぶつた。松林を横切つて、博物館の前に出る。大きな銀杏に墨汁を点じたような滴々の烏が乱れている。暮

れて行く空に輝くは無数の落葉である。今は風さえ出た。

「君二三日前にさんちまえに白井道也しらいどうやと云う人が来たぜ」

「道也先生？」

「だろうと思うのさ。余り沢山ある名じやないから」

「聞いて見たかい」

「聞こうと思つたが、何だかきまりが悪るかつたからやめた」

「なぜ」

「だつて、あなたは中学校で生徒から追い出された事はありませんかとも聞けまいじやないか」

「追い出されましたかと聞かなくつてもいいさ」

「しかし容易に聞きにくい男だよ。ありや、困る人だ。用事よりほかに云わない人だ」

「そんなになつたかも知れない。元来何の用で君の所へなんぞ来たのだい」

「なあに、江湖雜誌こうちうざっしの記者だつて、僕の所へ談話の筆記に来たのさ」

「君の談話をかい。——世の中も妙な事になるものだ。やっぱり金が勝つんだね」

「なぜ」

「なぜって。——可哀想かわいそうに、そんなに零落れいらくしたかなあ。——君道也先生、どんな、服な装りをしていた」

「そうさ、あんまり立派じゃないね」

「立派でなくつても、まあどのくらいな服装をしていた」

「そうさ。どのくらいとも云い悪いにくが、そうさ、まあ君ぐらいなところだろう」

「え、このくらいか、この羽織ぐらいなところか」

「羽織いはもう少し色が好いよ」

「袴はかまは」

「袴もめんは木綿じゃないが、その代りもつと皺しわ苦茶ちやだ」

「要するに僕と伯仲はくちゆうの間か」

「要するに君と伯仲の間だ」

「そうかなあ。——君、背せいの高い、ひよろ長い人だぜ」

「背の高い、顔の細長い人だ」

「じゃ道也先生に違ちがない。——世の中は随分無慈悲むじひなものだなあ。——君番地を知しってるだろう」

「番地は聞かなかつた」

「聞かなかつた？」

「うん。しかし江湖雜誌こうこざつしで聞けばすぐわかるさ。何でもほかの雑誌や新聞にも関係しているかも知れないよ。どこかで白井道也と云う名を見たようだ」

音楽会の帰りの馬車や車は最前さいぜんから絡繹らくえきとして二人を後ろから追いつ越して夕暮を吾家がやへ急ぐ。勇ましく馳かけて来た二挺ちようの人力じんりきがまた追いつ越すのかと思つたら、大仏を横に見て、西洋軒のなかに掛声ながら引き込んだ。黄昏たそがれの白き靄もやのなかに、逼せまり来る暮色を弾はじき返すほどの目覚めざましき衣きぬは由よしある女に相違ない。中野君はびたりと留まつた。

「僕はこれで失敬する。少し待ち合せている人があるから」

「西洋軒で会食すると云う約束か」

「うんまあ、そうさ。じゃ失敬」と中野君は向むこうへ歩き出す。高柳君は往來の真中へたつた一人残された。

淋しい世の中を池いけの端はたへ下くだる。その時一人坊つちの周作はこう思った。「恋をする時間があれば、この自分の苦痛をかいいて、一篇の創作を天下に伝える事が出来るだろうに」
見上げたら西洋軒の二階に奇麗きれいな花瓦斯はなガスがついていた。

五

ミルクホールに這入る。上下を擦り硝子にして中一枚を透き通しにした腰障子に近く据えた一脚の椅子に腰をおろす。焼麩麩を嚙つて、牛乳を飲む。懐中には二十円五十銭ある。ただ今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換えて来たばかりである。一頁五十銭の割合になる。一頁五十銭を超ゆべからず、一カ月五十頁を超ゆべからずと申し渡されてある。

これで今月はどうか、こうか食える。ほかからくれる十円近くの金は故里の母に送らなければならぬ。故里はもう落鮎の時節である。ことによると崩れかかった藁屋根に初霜が降ったかも知れない。鶏が菊の根方を暴らしている事だろう。母は丈夫かしら。向うの机を占領している学生が二人、西洋菓子を食べながら、団子坂の菊人形の収入について大に論じている。左に蜜柑をむきながら、その汁を牛乳の中へたらしめている書生がある。一房絞つては、文芸倶楽部の芸者の写真を一枚はぐり、一房絞つては一枚はぐる。芸者の絵が尽きた時、彼はコップの中を匙で攪き廻して妙な顔をしている。酸で牛乳

が固まったので驚ろいているのだろう。

高柳君はそこに重ねてある新聞の下から雑誌を引きずり出して、あれこれと見る。目的の江湖雑誌は朝日新聞の下に折れていた。折れてはいるがまだ新らしい。四五日前に出たばかりのである。折れた所は六号活字で何だか色鉛筆の赤い圈点けんてんが一面についている。僕の恋愛観と云う表題の下に中野春台なかのしゅんたいとある。春台は無論輝一の号である。高柳君は食い欠いた焼麩麩やきパンを皿の上へ置いたなり「僕の恋愛観」を見ていたがやがて、にやりと笑った。恋愛観の結末に同じく色鉛筆で色情狂※と書いてある。高柳君は頁をはぐった。六号活字はだいぶ長い。もつともいろいろの人の名前が出ている。一番始めには現代青年の煩悶はんもんに対する諸家の解決とある。高柳君は急に読んで見る気になった。——第一は静せい心の工夫を積めと云う注意だ。積めとはどう積むのかちつともわからない。第二は運動をして冷水摩擦れいすいしまさつをやれと云う。簡単なものである。第三は読書もせず、世間も知らぬ青年が煩悶する法がないと論じている。無いと云つても有れば仕方がない。第四は休暇ごとに必ず旅行せよと勧告している。しかし旅費の出処は明記してない。——高柳君はあとを読むのが厭いやになった。颯さつと引っくりかえして、第一頁をあける。「解脱げだつと拘泥こうでい……憂ゆ世子うせいし」と云うのがある。標題が面白いのでちよつと目を通す。

「身体からだの局部がどこぞ悪いと気にかかる。何をしても、それがコダワって来る。ところが非常に健康な人は行住坐臥ぎようじゆうざがともにわが身体の存在を忘れてゐる。一点の局部だにわが注意を集注すべき患所かんしよがないから、かく安々と胖かなのである。瘡やせて蒼あおい顔をしてゐる人に、君は胃が悪いだろうと尋ねて見た事がある。するとその男が答えて、胃は少しも故障がない、その証拠には僕はこの年になるが、いまだに胃がどこにあるか知らないと云うた。その時は笑つて済んだが、後あとで考えて見ると大に悟おおいさとつた言葉である。この人は全く胃が健康だから胃に拘泥こうでいする必要がない、必要がないから胃がどこにあつても構わないの見える。自在飲じざいりん、自在食じざいしよく、いつこう平氣である。この男は胃において悟さとを開いたものである。……」

高柳君はこれは少し妙だよと口のなかで云つた。胃の悟りは妙だと云つた。

「胃について道い得べき事は、惣身そうしんについても道い得べき事である。惣身について道い得べき事は、精神についても道い得べき事である。ただ精神生活においては得失の両面において等しく拘泥こうでいを免まぬかれぬところが、身体からだより煩わづらいになる。

「一能いちのうの士しは一能に拘泥こうでいし、一芸いちげいの人は一芸に拘泥して己おのれを苦しめてゐる。芸能は氣の持ちようではすぐ忘れる事も出来る。わが欠点に至つては容易に解脱げだつは出来ぬ。

「百円や二百円もする帯をしめて女が音楽会へ行くとこの帯が妙に気になって音楽が耳に入らぬ事がある。これは帯に拘泥こうでいするからである。しかしこれは自慢の例じゃ。得意の方は前云う通り崇たたりを避け易やすい。しかし不面目ふめんぼくの側はなかなか強情たに崇たたる。昔しさる所で一人の客に紹介された時、御互に椅子の上で礼をして双方共頭かしらを下くだげた。下げながら、向うの足を見るとその男の靴足袋くつたびの片々かたかたが破れて親指の爪が出ている。こちらが頭を下くだげると同時に彼は満足な足をあげて、破やれ足袋たびの上に加えた。この人は足袋の穴に拘泥こうでいしていたのである。……」

おれも拘泥こうでいしている。おれのからだは穴だらけだと高柳君は思いながら先へ進む。

「拘泥こうでいは苦痛である。避けなければならぬ。苦痛そのものは避けがたい世であろう。しかし拘泥こうでいの苦痛は一日で済む苦痛を五日いつか、七日なぬかに延長する苦痛である。いらざる苦痛である。避けなければならぬ。

「自己が拘泥こうでいするのは他人が自己に注意を集注すると思うからで、つまりは他人が拘泥こうでいするからである。……」

高柳君は音楽会の事を思いだした。

「したがって拘泥こうでいを解脱するには二つの方法がある。他人がいくら拘泥こうでいしても自分は拘泥こうでい

せぬのが一つの解脱法である。人が目を恃そばだてても、耳を聳そびやかしても、冷評しても罵ばり詈りしても自分だけは拘泥せず、にさつさと事を運んで行く。大久保彦左衛門は盃たらいで登城とじょうした事がある。……」

高柳君は彦左衛門が羨うらやましくなった。

「立派な衣いしやう装まづを馬士まごに着せると馬士はすぐ拘泥してしまふ。華族や大名はこの点において解脱の方を得ている。華族や大名に馬士の腹はらがけ掛かけをかけさすと、すぐ拘泥してしまふ。釈迦しゃかや孔子こうしはこの点において解脱を心得ている。物質界ぶつしつがいに重おもきを置かぬものは物質界に拘泥する必要がないからである。……」

高柳君は冷さめかかった牛乳をぐつと飲んで、ううと云った。

「第二の解脱法は常じやうじん人の解脱法である。常人の解脱法は拘泥まぬを免まぬかるるのではない、拘泥せねばならぬような苦しい地位に身を置くのを避けるのである。人の視聽しんていを惹ひくの結果、われより苦痛が反射せぬようにと始めから用心するのである。したがって始めより流り俗ゆうぞくに媚こびて一世いせいに附和ふわする心底しんていがなければ成功せぬ。江戸風な町人はこの解脱法を心得ている。芸妓げいぎ通客つうかくはこの解脱法を心得ている。西洋のいわゆる紳士ゼントルマンはもつともよくこの解脱法を心得たものである。……」

芸者ゼントルマンと紳士がいつしよになつてゐるのは、面白いと、青年はまた焼麵やきパンの一片ぺんを、横合から半円形に食い欠いた。親指についた牛酪バターをそのまま袴はかまの膝ひざへなすりつけた。

「芸妓、紳士、通人つうじんから耶蘇ヤソ孔子こうし釈迦しやくかを見れば全然たる狂人である。耶蘇、孔子、釈迦から芸妓、紳士、通人を見れば依然として拘泥こうでいしている。拘泥のうちに拘泥を脱し得たりと得意なるものは彼らである。両者の解脱げだつは根本義において一致すべからざるものである。……」

高柳君は今まで解脱の二字においてかつて考えた事はなかつた。ただ文界に立つて、ある物になりたい、なりたいたがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄つてたかつて己おのれを苦しめる、残念だ無念だどばかり思つていた。あとを讀む氣になる。「解脱は便法べんぽうに過ぎぬ。下れる世に立つて、わが真を貫徹し、わが善を標榜ひょうぼうし、わが美を提唱するの際、泥帶水たでいたいすいの弊をまぬがれ、勇猛精進ゆうもうしやうじんの志を固くして、現代下根こんの衆生しゆじやうより受くる迫害の苦痛を委却いきやくするための便法である。この便法を証得しやうとくし得ざる時、英靈の俊兒しゆんじ、またついに鬼窟裏きくつりに墮在だざいして彼のいわゆる芸妓紳士通人と得失を較かうするの愚ぐを演じて憚はばからず。国家のため悲しむべき事である。

「解脱は便法である。この方便門ほうべんもんを通じて出頭しゅつとうし来る行為、動作、言説の是非は解

脱の関するところではない。したがって吾人は解脱を修得する前に正鵠せいこくにあたる趣味を養成せねばならぬ。下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹とまつするは学人の恥辱である。彼らが貴重なる十年二十年を挙あげて故紙堆裏こしたいりに兀々こつこつたるは、衣食のためではない、名聞みやうもんのためではない、ないし爵禄しやくろく財宝さいほうのためではない。微かなる墨痕ぼつこんのうちに、光明の一炬ぎよを点じ得て、点じ得たる道火どうかを解脱の方便門より担にない出して暗黒世界を遍へんじよう照せんがためである。

「このゆえに真に自家証得底じかしようとくていの見解けんげあるもののために、拘泥こつねいの煩はんを払って、でき得る限り彼らをして第一種の解脱に近づかしむるを道徳と云う。道徳とは有道ゆうどうの士をして道を行わしめんがために、吾人がこれに対して与うる自由の異名いみょうである。この大道徳を解せざるものを俗人と云う。

「天下の多数は俗人である。わが位ちやくに着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。わが富に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。下れるものくだは、わが酒とわが女に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。

「光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会は成立せぬ。汚れたる油けがに廻転する社会は墮落だらくする。かの紳士、通人、芸妓の徒とは、汚れたる油の上を滑すべって墓に

入るものである。華族と云い貴顕きけんと云い豪商と云うものは門閥もんぱつの油、権勢けんせいの油、黄こうは白くの油をもつて一世を逆さかしまに廻転せんと欲するものである。

「真正しんせいの油は彼らの知るところではない。彼らは生れてより以来この油について何らの工夫くふうも費やしておらん。何らの工夫を費やさぬものが、この大道徳を解せぬのは許す。光明の学徒を圧迫せんとするに至つては、俗人の域を超越して罪人の群むれに入る。

「三味線しやみせんを習うにも五六年はかかる。巧拙こうせつを聴き分くるさえ一カ月の修業では出来ぬ。趣味の修養が三味しやみの稽古けいこより易やすいと思ふのは間違つている。茶の湯を学ぶ彼らはいらざる儀式に貴重な時間を費やして、一々に師匠の云う通りになる。趣味は茶の湯より六むずかしいものじゃ。茶坊主に頭を下げる謙徳けんとくがあるならば、趣味の本家ほんけたる学者の考はなおさら傾聴せねばならぬ。

「趣味は人間に大切なものである。楽器を壊こぼつものは社会から音楽を奪う点において罪人である。書物を焼くものは社会から学問を奪う点において罪人である。趣味を崩くずすものは社会そのものを覆くつえす点において刑法の罪人よりもはなはだしき罪人である。音楽はなくとも吾人は生きている、学問がなくても吾人はいきている。趣味がなくても生きておられるかも知れぬ。しかし趣味は生活の全体に渉わたる社会の根本要素である。これなくして生き

んとするは野に入つて虎と共に生きんとすると一般である。

「ここに一人がある。この一人が単に自己の思うようにならぬと云う原因のもとに、多勢が朝に晩に、この一人を突つき廻わして、幾年の後この一人の人格を墮落せしめて、下劣なる趣味に誘い去りたる時、彼らは殺人より重い罪を犯したのである。人を殺せば殺される。殺されたものは社会から消えて行く。後患は遺さない。趣味の墮落したものは依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを製造したものはもちろん罪人である。

「趣味の世界にペストを製造して罰せられんのは人殺しをして罰せられんのと同様である。位地の高いものもつともこの罪を犯しやすい。彼らは彼らの社会的地位からして、他に働きかける便宜の多い場所に立っている。他に働きかける便宜を有して、働きかける道を弁えぬものは危険である。

「彼らは趣味において専門の学徒に及ばぬ。しかも学徒以上他に働きかけるの能力を有している。能力は権利ではない。彼らのあるものはこの区別さえ心得ておらん。彼らの趣味を教育すべくこの世に出現せる文学者を捕えてすらこれを逆しまに吾意のごとくせんとする。彼らは単に大道徳を忘れたるのみならず、大不道徳を犯して恬然として社会に横行

しつつあるのである。

「彼らの意のごとくなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる学徒である。彼らを教育する事の出来ぬ学徒があれば腰の抜けたる学徒である。学徒は光明を体せん事を要す。光明より流れ出ずる趣味を現実せん事を要す。しかしてこれを現実せんがために、拘泥せざらん事を要す。拘泥せざらんがために解脱を要す」

高柳君は雑誌を開いたまま、茫然として眼を挙げた。正面の柱にかかっている、八角時計がぼうんと一時を打つ。柱の下の椅子にぽつ然と腰を掛けていた小女郎が時計の音と共に立ち上がった。丸テーブルの上には安い京焼の花活に、浅ましく水仙を突きさして、葉の先が黄ばんでいるのを、いつまでもそのままに水をやらぬ気と見える。小女郎は水仙の花にちよつと手を触れて、花活のそばにある新聞をとり上げた。読むかと思つたら四つに畳んで傍に置いた。この女は用もないのに立ち上がったのである。退屈のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がったのである。羨ましい女だと高柳君はすぐ思う。菊人形の収入についての議論は片づいたと見えて、二人の学生は煙草をふかして往来を見ている。

「おや、富田が通る」と一人が云う。

「どこに」と一人が聞く。富田君は三寸ばかり開いていた硝子戸ガラスドの間をちらと通り抜けたのである。

「あれは、よく食う奴やつじゃな」

「食う、食う」と答えたところによるとよほど食うと見える。

「人間は食う割わりに肥ふとらんものだな。あいつはあんなに食う癖こにいつこう肥こえん」

「書物は沢山読むが、ちつとも、えろうならんのがおると同じ事じゃ」

「そうよ。御互に勉強はなるべくせん方がいいの」

「ハハハハ。そんなつもりで云つたんじゃない」

「僕はそう云うつもりにしたのさ」

「富田は肥ふとらんがなかなか敏びん捷しょうだ。やはり沢山食うだけの事はある」

「敏捷な事があるものか」

「いや、この間四丁目を通つたら、後ろから出し抜けに呼ぶものがあるから、振り反ると

富田だ。頭を半分刈かつたままで、大きな敷布まどのようなものを肩から纏まとうている」

「元来どうしたのか」

「床屋から飛び出して来たのだ」

「どうして」

「髪を刈っておつたら、僕の影が鏡に写つたものだから、すぐ馳^かけ出したんだそうだ」

「ハハハハそいつは驚ろいた」

「おれも驚ろいた。そうして尚^{しやう}志^{しかい}会の寄附金を無理に取つて、また床屋へ引き返したぜ」

「ハハハハなるほど敏^{びん}捷^{しやう}なものだ。それじゃ御互になるべく食う事にしよう。敏捷にせんと、卒業してから困るからな」

「そうよ。文学士のように二十円くらいで下宿に屏^{へい}息^{そく}しては人間と生れた甲^か斐^いはな
いからな」

高柳君は勘定をして立ち上つた。ありがとうと云う下女の声に、文芸倶楽部の上につつ伏していた書生が、赤い眼をとろつかせて、睨^{にら}めるように高柳君を見た。牛の乳のなかの酸に中毒でもしたのだろう。

六

「私は高^{たか}柳^{やなぎ}周^{しゅう}作^{さく}と申すもので……」と丁寧^{ていねい}に頭を下げた。高柳君が丁寧^{ていねい}に頭を下げ

た事は今まで何度もある。しかしこの時のように快よく頭を下げた事はない。教授の家を訪問しても、翻訳を頼まれる人に面会しても、その他の先輩に対しても皆丁寧な頭をさげろ。せんだつて中野のおやじに紹介された時などはいよいよもつて丁寧な頭をさげろ。かし頭を下げるうちにいつでも圧迫を感じている。位地、年輩、服装、住居が睥睨して、頭を下げぬか、下げぬかと催促されてやむを得ず頓首するのである。道也先生に対しては全く趣が違ふ。先生の服装は中野君の説明したごとく、自分と伯仲の間にある。先生の書齋は座敷をかねる点において自分の室と同様である。先生の机は白木なるの点において、丸裸なるの点において、またもつとも無趣味に四角張つたる点において自分の机と同様である。先生の顔は蒼い点において瘠せた点において自分と同様である。すべてこれらの諸点において、先生と弟たりがたく兄たりがたき間柄にありながら、しかも丁寧に頭を下げるのは、逼まられて仕方なしに下げるのではない。仕方あるにもかかわらず、こつちの好意をもつて下げるのである。同類に対する愛憐の念より生ずる真正の御辞儀である。世間に対する御辞儀はこの野郎がと心中に思いながらも、公然には反比例に丁寧な御辞儀を極めたる虚偽の御辞儀でありますと断わりたくらいに思つて、高柳君は頭を下げた。道也先生はそれと覺つたかどうか知らぬ。

「ああ、そうですか、私が白井道也で……」とつくろつた景色もなく云う。高柳君にはこの挨拶振りが気に入った。両人はしばらくの間黙つて控えている。道也は相手の来意がわからぬから、先方の切り出すのを待つのが当然と考える。高柳君は昔しの關係を残りなく打ち開けて、一刻も早く同類相憐むの間柄になりたい。しかしあまり突然であるから、ちよつと言ひ出しかねる。のみならず、一昔し前の事とは申しながら、自分達がいじめて追ひ出した先生が、そのためにかく零落したのではあるまいかと思うと、何となく気がひけて云い切れない。高柳君はこんなところになるとすこぶる勇氣に乏しい。謝罪かたがた尋ねはしたが、いよいよと云う段になると少々怖くて罪滅しが出来かねる。心にいろいろな冒頭を作つて見たが、どれもこれもきまりがわるい。

「だんだん寒くなりますね」と道也先生は、こつちの了簡を知らないから、超然たる時候の挨拶をする。

「ええ、だいぶ寒くなつたようで……」

高柳君の脳中の冒頭はこれでまるで打ち壊されてしまった。いつその事自白はこの次にしようという気になる。しかし何だか話して行きたい気がする。

「先生御忙がしいですか……」

「ええ、なかなか忙がしいんで弱ります。貧乏閑ひまなしで」

高柳君はやり損そくなつたと思う。再び出直さねばならん。

「少し御話を承うけたまわりたいと思つて上がつたんですが……」

「はあ、何か雑誌へでも御載おのせになるんですか」

あてはまたはずれる。おれの態度がどうしても向むこうには酌くみ取れないと見えると青年は心中少しく残念に思つた。

「いえ、そうじゃないので——ただ——ただつちや失礼ですが。——御邪魔ならまた上がつてもよろしゅうございますが……」

「いえ邪魔じゃありません。談話と云うからちよつと聞いて見たのです。——わたしのうちへ話なんか聞きにくるものはありませんよ」

「いいえ」と青年は妙な言葉をもつて先生の辞ことばを否定した。

「あなたは何の学問をなさるんですか」

「文学の方を——今年大学を出たばかりです」

「はあそうですか。ではこれから何かおやりになるんですね」

「やれば、やりたいのですが、暇ひまがなくなつて……」

「暇はないですね。わたしなども暇がなくなつて困っています。しかし暇はかえつてない方がいいかも知れない。何ですね。暇のあるものはだいぶいるようだが、余り誰も何もやっていないようじゃありませんか」

「それは人に依りよはしませんか」と高柳君はおれが暇さえあればと云うところを暗あんにほめかした。

「人にも依るでしょう。しかし今の金持ちと云うものは……」と道也は句を半分で切つて、机の上を見た。机の上には二寸ほどの厚さの原稿がのつている。障子には洗濯した足袋たびの影がさす。

「金持ちは駄目です。金がなくなつて困つてるものが……」

「金がなくなつて困つてるものは、困りなりにやればいいのです」と道也先生困つてる癖に太平な事を云う。高柳君は少々不満である。

「しかし衣食のために勢力をとられてしまつて……」

「それでいいのですよ。勢力をとられてしまつたら、ほかに何にもしないで構わないのです」

青年は唾然あぜんとして、道也を見た。道也は孔子様のように真面目まじめである。馬鹿にされてる

んじやたまらないと高柳君は思う。高柳君は大抵の事を馬鹿にされたように聞き取る男である。

「先生ならいいかも知れません」とつるつると口を滑らして、はつと言い過ぎたと下を向いた。道也は何とも思わない。

「わたしは無論いい。あなただつて好いですよ」と相手までも平気に捲き込もうとする。

「なぜですか」と二三歩逃げて、振り向きながら佇む狐のように探りを入れた。

「だつて、あなたは文学をやつたと云われたじやありませんか。そうですか」

「ええやりました」と力を入れる。すべて他の点に関しては断乎たる返事をする資格のない高柳君は自己の本領においては何人の前にも出てもひるまぬつもりである。

「それならいい訳だ。それならそれでいい訳だ」と道也先生は繰り返して云つた。高柳君には何の事か少しも分らない。また、なぜですと突き込むのも、何だか伏兵に罹る気がして厭である。ちよつと手のつけようがないので、黙つて相手の顔を見た。顔を見ているうちに、先方でどうか解決してくれるだろうと、暗に催促の意を籠めて見たのである。

「分りましたか」と道也先生が云う。顔を見たのはやっぱり何の役にも立たなかつた。

「どうも」と折れざるを得ない。

「だってそうじゃありませんか。——文学はほかの学問とは違うのです」と道也先生は凜然と云い放った。

「はあ」と高柳君は覚えす応答をした。

「ほかの学問はですね。その学問や、その学問の研究を阻害するものが敵である。たとえば貧とか、多忙とか、圧迫とか、不幸とか、悲酸な事情とか、不和とか、喧嘩とかですね。これがあると学問が出来ない。だからなるべくこれを避けて時と心の余裕を得ようとする。文学者も今まではやはりそう云う了簡でしたのです。そう云う了簡どころではない。あらゆる学問のうちで、文学者が一番呑気な閑日月がなくてはならんように思われていた。おかしいのは当人自身までがその氣でいた。しかしそれは間違です。文学は人生そのものである。苦痛にあれ、困窮にあれ、窮愁にあれ、凡そ人生の行路にあたるものはすなわち文学で、それらを管め得たものが文学者である。文学者と云うのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねっているような閑人じゃありません。円熟して深厚な趣味を体して、人間の万事を臆面なく取り捌いたり、感得したりする普通以上の吾々を指すのであります。その取り捌き方や感得し具合を紙に写したのが文学書になるのです、だから書物は読まないでも実際その事にあたれば立派な文学者です。したがってほ

かの学問ができ得る限り研究を妨害する事物を避けて、しだいに人世とわざに遠かるに引き易かえ
て文学者は進んでこの障害のなかに飛び込むのであります」

「なるほど」と高柳君は妙な顔をして云った。

「あなたは、そうは考えませんか」

そう考えるにも、考えぬにも生れて始めて聞いた説である。批評的の返事が出るときは
大抵用意のある場合に限る。不意撃ふいうちに応ずる事が出来れば不意撃ではない。

「ふうん」と云つて高柳君は首を低たれた。文学は自己の本領である。自己の本領について、
他人が答弁さえ出来ぬほどの説を吐はくならばその本領はあまり鞏きようこ固なものではない。道
也先生さえ、こんな見すばらしい家に住んで、こんな、きたならしい着物をきているなら
ば、おれは当然二十円五十銭の月給で沢山だと思つた。何だか急に広い世界へ引き出され
たような感じがする。

「先生はだいぶ御忙おいそがしいようですが……」

「ええ。進んで忙しい中へ飛び込んで、人から見ると酔すい興きような苦勞をします。ハハハハ」
と笑う。これなら苦勞が苦勞にたたない。

「失礼ながら今はどんな事をやっておいでで……」

「今ですか、ええいろいろな事をやりますよ。飯を食う方と本領の方と両方やろうとするからなかなか骨が折れます。近頃は頼まれてよく方々へ談話の筆記に行きますがね」

「随分御面倒でしょう」

「面倒と云いや、面倒ですがね。そう面倒と云うよりむしろ馬鹿ばか気げています。まあいい加減げんに書いては来ますが」

「なかなか面白い事を云うのがおりましたよ」と暗あんに中野春台なかのしゆんたいの事を釣り出そうとする。

「面白いの何のって、この間はうま、うまの講釈を聞かされました」

「うま、うまですか？」

「ええ、あの小供こどもが食物たべものの事をうまうまと云いましょう。あれの来歴です。その人の説によると小供が舌が回り出してから一番早く出る発音がうまうまだそうです。それでその時分は何を見てもうまうま、何を見なくともうまうまだからつまりは何なににもつけなくてもいいのだそうだが、そこが小供に取って一番大切なものは食物だから、とうとう食物の方で、うまうまを専有してしまったのだそうです。そこで大人おとなもその癖くせがのこって、美味あじなものをうまいと云うようになった。だから人生じんせいの煩悶はんもんは要するに元もとへ還かえってうまう

まの二字に帰着すると云うのです。何だか寄席よせへでも行つたようじゃないですか」

「馬鹿にしていますね」

「ええ、大抵は馬鹿にされに行くんですよ」

「しかしそんなつまらない事を云うって失敬ですな」

「なに、失敬だつていいでさあ、どうせ、分らないんだから。そうかと思うとね。非常に真面目まじめだけれどもなかなか突飛とつぴなのがあつてね。この間は猛烈な恋愛論を聞かされました。もつとも若い人ですがね」

「中野じゃありませんか」

「君、知つてますか。ありや熱心なものだつた」

「私の同級生です」

「ああ、そうですね。中野春台とか云う人ですね。よつぽど暇があるんでしょう。あんな事を真面目に考えているくらいだから」

「金持ちです」

「うん立派な家うちにいますね。君はあの男と親密なのですか」

「ええ、もとはごく親密でした。しかしどうもいかんです。近頃は——何だか——未来の

細君か何か出来たんで、あんまり交際してくれないのです」

「いいでしょう。交際しなくつても。損にもなりそうもない。ハハハハハ」

「何だかしかし、こう、一人坊つちのひとりぼような気がして淋しくつていけません」

「一人坊つちで、いいでさあ」と道也先生またいいでさあをかつ担ぎ出した。高柳君はもう

「先生ならいいでしょう」と突き込む勇氣が出なかった。

「昔から何かしようと思えば大概は一人坊つちになるものです。そんな一人の友達をたよりにするようじゃ何も出来ません。ことによると親類ともなかがい仲違ちがになる事が出来て来ます。妻さいにまで馬鹿にされる事があります。しまいには下女までからかいます」

「私はそんなになつたら、不愉快で生きていられないだろうと思います」

「それじゃ、文学者にはなれないです」

高柳君はだまつて下を向いた。

「わたしも、あなたぐらいの時には、ここまでとは考えていなかった。しかし世の中の事実は実際ここまでやつて来るんです。うそじやない。苦しんだのは耶蘇ヤソや孔子こうしばかりで、吾々文学者はその苦しんだ耶蘇や孔子を筆の先でほめて、自分だけは吞氣のんきに暮して行けばいいのだなどと考えてるのは偽にせぶん文学者がくしゃですよ。そんなものは耶蘇や孔子をほめる権利

はないのです」

高柳君は今こそ苦しいが、もう少し立てば喬木きょうぼくにうつる時節があるだろうと、苦しいうちに絹糸ほどな細い望みを繋つないでいた。その絹糸が半分ばかり切れて、暗い谷から上へ出るたよりは、生きているうちは容易に来そうに思われなくなった。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知ってますか」と道也先生は淋さびし氣げに笑った。

「知ってるつもりですけれど、いつまでもこう苦しくつちや……」

「やり切れませんか。あなたは御両親おふたごが御在おありか」

「母だけ田舎いなかにいます」

「おつかさんだけ？」

「ええ」

「御母おつかさんだけでもあれば結構だ」

「なかなか結構でないです。——早くどうかしてやらないと、もう年を取っていますから。私が卒業したら、どうか出来るだろうと思つてたのですが……」

「さよう、近頃のように卒業生が殖えちや、ちよつと、口を得るのが困難ですね。——どうです、田舎の学校へ行く気はないですか」

「時々は田舎へ行こうとも思うんですが……」

「またいやになるかね。——そうさ、あまり勧められもしない。私も田舎の学校はだいぶ経験があるが」

「先生は……」と言いかけたが、また昔の事を云い出しにくくなった。

「ええ？」と道也は何も知らぬ気である。

「先生は——あの——江湖雑誌を御編輯になると云う事ですが、本当にそうなんで」

「ええ、この間から引き受けてやっています」

「今月の論説に解脱と拘泥と云うのがありましたが、あの憂世子と云うのは……」

「あれは、わたしです。読みましたか」

「ええ、大変面白く拝見しました。そう申しちゃ失礼ですが、あれは私の云いたい事を五六段高くして、表出したようなもので、利益を享けた上に痛快に感じました」

「それはありがたい。それじゃ君は僕の知己ですね。恐らく天下唯一の知己かも知れない。ハハハハ」

「そんな事はないでしょう」と高柳君はやや真面目に云った。

「そうですか、それじゃなお結構だ。しかし今まで僕の文章を見てほめてくれたものは一人もない。君だけですよ」

「これから皆んな賞めるつもりです」

「ハハハハそう云う人がせめて百人もいてくれると、わたしも本望だが——随分頓珍漢な事がありますよ。この間なんか妙な男が尋ねて来てね。……」

「何ですか」

「なあに商人ですがね。どこから聞いて来たか、わたしに、あなたは雑誌をやっておいでだそうだが文章を御書きなさるだろうと云うのです」

「へえ」

「書く事は書くとまあ云ったんです。するとねその男がどうぞ一つ、眼薬の広告をかいてもらいたいと云うんです」

「馬鹿な奴ですね」

「その代り雑誌へ眼薬の広告を出すからは是非一つ願いたいって——何でも点明水てんめいすいとか云う名ですがね……」

「妙な名をつけて——。御書きになつたんですか」

「いえ、とうとう断わりましたがね。それでまだおかしい事があるのですよ。その薬屋で売出しの日に大きな風船を揚げるんだと云うのです」

「御祝いのためですか」

「いえ、やはり広告のために。ところが風船は声も出さずに高い空を飛んでいるのだから、仰向けあおむば誰にでも見えるが、仰向けせなくっちゃいけないでしょう」

「へえ、なるほど」

「それでわたしにその、仰向けせの役をやってくれて云うのです」

「どうするのです」

「何、往來をあるいていても、電車へ乗っていてもいいから、風船を見たら、おや風船だ風船だ、何でもありや点明水の広告に違いないって何遍も何遍も云うのだそうです」

「ハハハ随分思い切つて人を馬鹿にした依頼ですね」

「おかしくもあり馬鹿馬鹿しくもあるが、何もそれだけの事をするにはわたしでなくても

よからう。車引でも雇えば訳ないじやないかと聞いて見たのです。するとその男がね。いえ、車引なんぞばかりでは信用がなくなつていけません。やっぱり髭でも生やしてもっともらしい顔をした人に頼まないと、人がだまされませんからと云うのです」

「実に失敬な奴ですね。全体何物でしょう」

「何物つてやはり普通の人間ですよ。世の中をだますために人を雇いに來たのです。呑気なものさハハハハ」

「どうも驚ろいちまう。私なら撲ぐつてやる」

「そんなのを撲つた日にや片つ端から撲らなくつちやあならない。君そう怒るが、今の世の中はそんな男ばかりで出來てるんですよ」

高柳君はまさかと思つた。障子にさした足袋の影はいつしか消えて、開け放つた一枚の間から、靴刷毛の端が見える。椽は泥だらけである。手の平ほどな庭の隅に一株の菊が、清らかに先生の貧を照らしている。自然をどうでもいいと思つている高柳君もこの菊だけは美しく感じた。杉垣の遥か向に大きな柿の木が見えて、空のなかへ五分珠の珊瑚をかためて嵌め込んだように奇麗に赤く映る。鳴子の音がして鳥がぱつと飛んだ。

「閑静な御住居ですね」

「ええ。蛸寺たこでらの和尚おしょうが鳥を追っているんです。毎日がらんがらん云わして、鳥ばかり追っている。ああ云う生しょうが涯がいも閑静でいいな」

「大変たくさん柿なが生なっていますね」

「渋柿ですよ。あの和尚は何が惜しくて、ああ渋柿の番ばかりするのか。——君せき妙な咳せきを時々するが、身体からだは丈夫ですか。だいぶ瘠やせてるようじゃありませんか。そう瘠やせてちやいかん。身体が資本だから」

「しかし先生だつて随分瘠やせていらつしやるじゃありませんか」

「わたし？ わたしは瘠やせている。瘠やせてはいるが大丈夫」

七

白ちよう蝶ちようの、白ちよう花ちように、

小ちせき蝶ちせの、小ちせき花ちせに、

みだるるよ、みだるるよ。

長うれいき憂うれいは、長うれいき髪うれいに、

暗き憂は、暗き髪に、

みだるるよ、みだるるよ。

いたずらに、吹くは野分の、

いたずらに、住むか浮世に、

白き蝶も、黒き髪も、

みだるるよ、みだるるよ。

と女はうたい了る。銀椀ぎんわんに珠たまを盛りて、白魚しらうおの指うづこに揺かしたらば、こんな声がでようと、男は聴ききとれていた。

「うまく、唱うたえました。もう少し稽古けいこして音量りやうりやうが充分ちゆうぶんに出ると大きな場所で聴いても、立派りつぱに聴けるに違ちがいがない。今度こんど演奏会げんそうかいでためしにやって見ませんか」

「厭いやだわ、ためしだなんて」

「それじゃ本式ほんしきに」

「本式ほんしきにやなおできませんわ」

「それじゃ、つまりおやめと云いう訳わけですか」

「だってたくさん人のいる前まへなんかで、——恥はずかしくって、声こゑなんか出でやしませんわ」

「その新体詩はいいでしょう」

「ええ、わたし大好き」

「あなたが、そうやって、唱つてるところを写真に一つ取りましようか」

「写真に？」

「ええ、厭ですか」

「厭じゃないわ。だけれども、取つて人に御見せなさるでしょう」

「見せてわるければ、わたし一人で見ています」

女は何にも云わずに眼を横に向けた。こぼれ梅を一枚の半襟の表に掃き集めた真中に、明星と見まがうほどの留針が的と耀いて、男の眼を射る。

女の振り向いた方には三尺の台を二段に仕切つて、下には長方形の交趾の鉢に細き蘭が揺るがんとして、香の煙りのたなびくを待つてゐる。上段にはメロスの愛神の模像を、ほの暗き室の隅に夢かとはかり据えてある。女の眼は端なくもこの裸体像の上に落ちた。

「あの像は」と聞く。

「無論模造です。本物は巴理のルーヴルにあるそうです。しかし模造でもみごとですね。

腰から上の少し曲つたところと両足の方向とが非常に釣合がよく取れている。——これが

全身完全だと非常なものですが、惜しい事に手が欠けてます」

「本物も欠けてるんですか」

「ええ、本物が欠けてるから模造もかけてるんです」

「何の像でしょう」

「ヴィーナス。愛の神です」と男はことさらに愛と云う字を強く云った。

「ヴィーナス！」

深い眼睫まつげの奥から、ヴィーナスは溶けるとばかりに見詰められている。冷やかなるひや石膏せっこうの暖まるほど、丸き乳首ちくびの、呼吸につれて、かすかに動くかと疑あやしまるるほど、女は瞳ひとみを凝こらしている。女自身も艶えんなるヴィーナスである。

「そう」と女はやがて、かすかな声で云う。

「あんまり見ているとヴィーナスが動き出しますよ」

「これで愛の神でしょうか」と女はようやく頭かしらを回めくらした。

あなたの方が愛の神らしいと云おうとしたが、女と顔を見合した時、男は急に躊躇ちゅうちよした。云えば女の表情が崩くずれる。この、訝いぶかるがごとく、訴ううるがごとく、深い眼のうちに我を頼るがごとき女の表情を一瞬たりとも、我から働きかけて打ち壊こわすのは、メロスのヴ

イーナスの腕かひなを折ると同じく大なる罪科ざいかである。

「氣高けだか過ぎて……」と男の我を援たすけぬをもどかしくて女は首を傾けながら、我からと顔の上なる姿を変えた。男はしまったと思う。

「そう、すこし堅過ぎます。愛と云う感じがあまり現われていない」

「何だか冷めたいような心持がしますわ」

「その通りだ。冷めたいと云うのが適評だ。何だか妙だと思っていたが、どうも、いい言葉が出て来なかつたんです。冷めたい——冷めたい、と云うのが一番いい」

「なぜこんなに、拵こしらえたんでしょう」

「やっぱりフヒジアス式だから厳格なんでしょう」

「あなたは、こう云うのが御好き」

女は石像をさえ、自分と比較して愛人の心を窺うかがつて見る。ヴィーナスを愛するものは、自分を愛してはくれまいと云う掛念けねんがある。女はヴィーナスの、神である事を忘れていた。

「好きつて、いいじゃありませんか、古今ここんの傑作ですよ」

女の批判は直覺的である。男の好尚こうしようは半ば伝説的である。なまじいに美学などを聴いた因果いんがで、男はすぐ女に同意するだけの勇氣を失っている。学問は己おのれを欺あざむくとは心づ

かぬと見える。自から学問に欺かれながら、欺かれぬ女の判断を、いたずらに誤まれりとのみ見る。

「古今の傑作ですよ」と再び繰り返したのは、半ば女の趣味を教育するためであった。

「そう」と女は云つたばかりである。石火を交えざる刹那に、はっと受けた印象は、学者の一言のために打ち消されるものではない。

「元来ヴィーナスは、どう云うものか僕にはいやな聯想がある」

「どんな聯想なの」と女はおとなしく聞きつつ、双の手を立ちながら膝の上に重ねる。手頸からさきが二寸ほど白く見えて、あとは、しなやかなる衣のうちに隠れる。衣は薄紅に銀の雨を濃く淡く、所まだらに降らしたような縞柄である。

上になつた手の甲の、五つに岐れた先の、しだいに細まりてかつ丸く、つやある爪に蔽われたのが好い感じである。指は細く長く、すらりとした姿を崩さぬほどに、柔らかな肉を持たねばならぬ。この調える姿が五本ごとに異ならねばならぬ。異なる五本が一つにかたまつて、纏まる調子をつくらねばならぬ。美しくしき手を持つ人は、美しくしき顔を持つ人よりも少ない。美しくしき手を持つ人には貴き飾りが必要である。

女は燦たるものを、細き肉に戴いている。

「その指輪は見馴れませんか」

「これ？」と重ねた手は解けて、右の指に耀くものをなぶる。

「この間父様に買っていたのだ」

「ダイヤモンド
金剛石ですか」

「そうですね。天賞堂から取ったんですから」

「あんまり御父さんを苛めちゃいけませんよ」

「あら、そうじゃないのよ。父様の方から買って下さったのよ」

「そりや珍しい現象ですね」

「ホホホホ本当ね。あなたその訳を知ってて」

「知るものですか、探偵じゃあるまいし」

「だから御存じないでしょうと云うのですよ」

「だから知りませんよ」

「教えて上げましょうか」

「ええ教えて下さい」

「教えて上げるから笑っちゃいけませんよ」

「笑やしません。この通り真面目まじめできあ」

「この間ね、池上いけがみに競馬があつたでしょう。あの時父様があすこへいらしてね。そうして……」

「そうして、どうしたんです。——拾つて来たんですか」

「あら、いやだ。あなたは失敬ね」

「だつて、待つてもあとをおつしやらないですもの」

「今云うところなのよ。そうして賭かけをなすつたんですつて」

「こいつは驚ろいた。あなたの御父さんもやるんですか」

「いえ、やらないんだけど、試ためしにやって見たんだつて」

「やつぱりやつたんじゃありませんか」

「やった事はやったの。それで御金を五百円ばかり御取りになつたんだつて」

「へえ。それで買つて頂いたのですか」

「まあ、そうよ」

「ちよつと拝見」と手を出す。男は耀かがやくものを軽かろく抑おさえた。

指輪は魔物である。沙翁さおうは指輪を種に幾多の波瀾はらんを描いた。若い男と若い女を目に見え

ぬ空裏くうりに繋つなぐものは恋である。恋をそのまま手にとらすものは指輪である。

三重みえにうねる細き金の波の、環わと合うて膨ふくれ上るただ中を穿うがちて、動くなよと、安らかに据すえたる宝石の、眩まばゆさは天あめが下したを射れど、毀こぼたねば波の中より奪うばいがたき運命は、君ありての妾わね 妾わね故ゆえにの君である。男は白き指もろ共に指輪を見詰めている。

「こんな指輪だったのか知らん」と男が云う。女は寄り添ようて同じ長椅子ソールファを二人の間わかに分わかつ。

「昔こしさる好事家こうずかがヴィーナスの銅像を掘り出して、吾わが庭の眺ながめにと橄欖かんらんの香かの濃なく吹すくあたりに据すえたそうです」

「それは御話？ 突然なのね」

「それから或ある日テニスをしていたら……」

「あら、ちつとも分らないわ。誰がテニスをするの。銅像を掘り出した人なの？」

「銅像を掘り出したのは人足にんそくで、テニスをしたのは銅像を掘り出さした主人の方です」

「どっちだつて同じじやありませんか」

「主人と人足と同じじや少し困る」

「いいえさ、やっぱり掘り出した人がテニスをしたんでしょう」

「そう強情を御張りになるなら、それでよろしい。——では掘り出した人がテニスをする……」

「強情じゃない事よ。じゃ銅像を掘り出さした方がテニスをするの、ね。いいでしょう」

「どっちでも同じでさあ」

「あら、あなた、御怒りなすつたの。だから掘り出さした方だって、あやまっているじゃありませんか」

「ハハハハあやまらなくつてもいいです。それでテニスをしているとね。指輪が邪魔になつて、ラケットが思うように使えないんです。そこで、それをはずしてね、どこかへ置こうと思ったが小さいものだから置きなくすといけない。——大事な指輪ですよ。結納の指輪なんです」

「誰と結婚をなさるの？」

「誰とつて、そいつは少し——やっぱりさる令嬢とです」

「あら、お話しになつてもいじやありませんか」

「隠す訳じゃないが……」

「じゃ話してちょうだい。ね、いいでしょう。相手はどなたなの？」

「そいつは弱りましたね。実は忘れちゃった」

「それじゃ、ずるいわ」

「だって、メリメの本を貸しちゃってちよつと調べられないですもの」

「どうせ、御貸しになったんでしようよ。ようございます」

「困ったな。せつかくのところで名前を忘れたもんだから進行する事が出来なくなった。

——じゃ今日は御やめにして今度その令嬢の名を調べてから御話をしましょう」

「いやだわ。せつかくのところですよしたり、なんかして」

「だって名前を知らないんですもの」

「だからその先を話してちようだいな」

「名前はなくつてもいいのですか」

「ええ」

「そうか、そんなら早くすればよかった。——それでいろいろ考えた末、ようやく考えついで、ヴィーナスの小指へちよつとはめたんです」

「うまいところへ気がついたのね。詩的じゃありませんか」

「ところがテニスが済んでから、すっかりそれを忘れてしまって、しかも例の令嬢を連れ

に田舎へ旅行してから気がついたのです。しかしいまさらどうもする事が出来ないから、それなりにして、未来の細君にはちよつとしたでき合の指環を買って結納にしたのです」

「厭な方ね。不人情だわ」

「だって忘れたんだから仕方がない」

「忘れるなんて、不人情だわ」

「僕なら忘れないんだが、異人だから忘れちまつたんです」

「ホホホ異人だつて」

「そこで結納も滞りなく済んでから、うちへ帰つていよいよ結婚の晩に——」でわざと句を切る。

「結婚の晩にどうしたの」

「結婚の晩にね。庭のヴィーナスがどたりどたりと玄関を上がって……」

「おおいやだ」

「どたりどたりと二階を上がつて」

「怖いわ」

「寝室の戸をあけて」

「気味がわるいわ」

「気味がわるければ、そこいらで、やめて置きましょう」

「だけれど、しまいにどうなるの」

「だから、どたり、どたりと寢室の戸をあけて」

「そこは、よしてちょうだい。ただしまいにどうなるの」

「では間を抜きましょう。——あした見たら男は冷めたくなくなって死んでたそうです。ヴィーナスに抱きつかれたところだけ紫色に変つてたと云います」

「おお、厭いやだ」と眉まゆをあつめる。艶えんなる人の眉まゆをあつめたるは愛あい嬌きょうに醋すをかけたようなものである。甘き恋に酔えい過ぎたる男は折々のこの酸味さんみに舌を打つ。

濃くひける新月の寄り合いて、互あひに頭かしらを擡もたげたる、うねりの下に、臃おぼろに見ゆる情けの波のかがやきを男はひたすらに打ち守る。

「奥さんはどうしたでしょう」女を憐あはむものは女である。

「奥さんは病気になつて、病院は院いんに這入はいるのです」

「癒なほるのですか」

「そうさ。そこまでは覚えていない。どうしたっけかな」

「癒らない法はないでしょう。罪も何もないのに」

薄きにもかかわらず豊ゆたかなる下唇したくちびるはぷりぷりと動いた。男は女の不平を愚かなりとは思わず、情け深しと興おぼろがる。二人の世界は愛の世界である。愛はもつとも真面目まじめなる遊戯である。遊戯なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯たわむるる余裕のある人は至幸である。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戯である。遊戯であるから浮いている。深くして浮いているものは水底の藻もと青年の愛である。

「ハハハハ心配なさらんでもいいです。奥さんはきつと癒ります」と男はメリメに相談もせず受合うあった。

愛は迷まよいである。また悟りさとである。愛は天地万有ばんゆうをその中うちに吸収して刻下こつかに異様の生命を与える。故ゆえに迷である。愛の眼まなこを放つとき、大千世界だいせんせかいはことごとく黄金おうごんである。愛の心に映る宇宙は深き情けなさの宇宙である。故に愛は悟りである。しかして愛の空気を呼吸するものは迷とも悟とも知らぬ。ただおのずから人を引きまた人に引かる。自然は真空こりつを忌み愛は孤立きりつを嫌う。

「わたし、本当に御氣の毒だと思えますわ。わたしが、そんなになつたら、どうしようと

思うと」

愛は己れおのに対して深刻なる同情を有している。ただあまりに深刻なるが故に、享樂の満足ある場合に限りて、自己を貫つらぬき出でて、人の身の上にもまた普通以上の同情を寄せる事ができる。あまりに深刻なるが故に失恋の場合において、自己を貫き出でて、人の身の上にもまた普通以上の怨えん恨こんを寄せる事が出来る。愛に成功するものは必ず自己を善人と思う。愛に失敗するものもまた必ず自己を善人と思う。成せい敗ばいに論なく、愛は一直線である。ただ愛の尺度をもつて万事を律する。成功せる愛は同情を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。失敗せる愛は怨恨を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。愛はもつともわがままなるものである。

もつともわがままなる善人が二人、美しく飾りたる室しつに、深刻なる遊戯どじやを演じている。室外の天下は蕭しやうりやう寥りやうたる秋である。天下の秋は幾多の道也どうや先生を苦しめつつある。幾多の高柳君を淋しがらせつつある。しかして二人はあくまでも善人である。

「この間の音楽会には高柳さんとごいつしよでしたね」

「ええ、別に約束した訳わけでもないんですが、途中で逢ったものですかから誘ったのです。何だか動物園の前で悲しそうに立って、桜の落葉を眺ながめているんです。気の毒になつてね」
「よく誘さそつて御上おあげになつたのね。御病氣おびやうまじゃなくつて」

「少し咳せきをしていたようです。たいした事せきじゃないでしょう」

「顔の色が大変御おわるかったわ」

「あの男はあんまり神経質せきしつだもんだから、自分で病びょう気をこしらえるんです。そうして慰なぐさめてやると、かえって皮肉ひにくを云うのです。何なにだか近ちか来きはますます変かになるようです」

「御ご氣きの毒どくね。どうなすったんでしよう」

「どうしたつて、好このんで一人坊ひとりぼつちになつて、世よの中なかをみんな敵かたきのように思おもうんだから、手てのつけようがないです」

「失しつ恋れんなの」

「そんな話わもきいた事こともないですがね。いつそ細こ君きみでも世よ話わをしたらいいかも知しれない」

「御ご世よ話わをして上げたらいいでしょう」

「世よ話わをするつて、あゝ氣き六むずかしくつちや、駄だ目めですよ。細こ君きみが可かわ哀い想そうだ」

「でも。御ご持もちになつたら癒なるでしょう」

「少しは癒なるかも知しれないが、元がん来らいが性しょう分ぶんなんですからね。悲ひ観くわんする癖くせがあるんです。悲ひ観くわん病びょうに罹かつてるんです」

「ホホホどうして、そんな病びょう氣きが出でたんでしよう」

「どうしてですかね。遺伝かも知れません。それでなければ小供のうち何かあつたんでしよう」

「何か御聞おききになつた事はなくつて」

「いいえ、僕あまりそんな事を聞くのが嫌きらいだから、それに、あの男はいつこう何なんにも打ち明けない男だね。あれがもつと淡泊たんぱくに思つた事を云う風だと慰めようもあるんだけれども」

「困つていらつしやるんじゃないやなくつて」

「生活にですか、ええ、そりや困つてるんです。しかし無暗むやみに金をやろうなんていったら擲たぎつきますよ」

「だつて御自分で御金がとれそんなものじゃありませんか、文学士だから」

「取れるですとも。だからもう少し待つてるといいですが、どうも性急せつかちで卒業したあくる日ひからして、立派な作家になつて、有名になつて、そうして楽たのしみに暮らそうつて云うのだから六むずかしい」

「御国は一体どこなの」

「国は新潟県です」

「遠い所なのね。新潟県は御米の出来る所でしよう。やっぱり御百姓なの」

「農、^{のう}なんでしよう。——ああ新潟県で思い出した。この間あなたが御出^{おいで}のとき行き違^{ちが}いで出^いて行^ゆった男があるでしよう」

「ええ、あの長い顔の髭^{ひげ}を生^はやした。あれはなに、わたしあの人の下駄^{げんこ}を見て吃驚^{びっくり}したわ。随分薄^{うす}っぺらなのね。まるで草履^{ぞうり}よ」

「あれで泰然^{たいぜん}たるものですよ。そうしてちつとも愛嬌^{あいきょう}のない男でね。こっちから何か話^わしかけても、何^{なん}にも応答^{おうた}をしない」

「それで何しに来たの」

「江湖^{こつこぎ}雑誌の記者と云うんで、談話の筆記に来たんです」

「あなたの？ 何か話しておやりになつて？」

「ええ、あの雑誌を送つて来ているからあとで見せましょう。——それであの男について妙な話があるんです。高柳が国の中学にいた時分あの人に習^{まな}ったんです——あれで文学士^{ぶんがくし}ですよ」

「あれで？ まあ」

「ところが高柳^{たかやなぎ}なんぞが、いろいろな、いたずらをして、苛^{いじ}めて追^おい出してしまったんで

す」

「あの人を？ ひどい事をするのね」

「それで高柳は今となつて自分が生活に困難しているものだから、後悔して、さぞ先生も追い出されたために難義をしたろう、逢あつたら謝罪するつて云つてましたよ」

「全く追い出されたために、あんなに零落れいらくしたんでしようか。そうすると気の毒ね」

「それからせんだつて江湖雑誌の記者と云う事が分つたでしょう。だから音楽会の帰りに教えてやつたんです」

「高柳さんはいらしたでしようか」

「行つたかも知れませんよ」

「追い出したんなら、本当に早く御託おわびをなさる方がいいわね」

善人の会話はこれで一段落を告げる。

「どうです、あっちへ行つて、少しみんなと遊あそぼうじやありませんか。いやですか」

「写真は御やめなの」

「あ、すっかり忘れていた。写真は是非取らして下さい。僕はこれでなかなか美術的な奴を取るんです。うん、商売人の取るのは下等ですよ。——写真も五六年かたこの方大變進歩し

てね。今じや立派な美術です。普通の写真はだれが取ったって同じでしょう。近頃のは個人個人の趣味で調子がまるで違つてくるんです。いらぬものを抜いたり、いったいの調子を和げたり、際どい光線の作用を全景にあらわしたり、いろいろな事をやるんです。早いものでもう景色専門家や人物専門家が出来てるんですからね」

「あなたは人物の専門家なの」

「僕？ 僕は——そうさ、——あなただけの専門家になろうと思うのです」

「厭なかつたね」

ダイヤモンドがきらりとひらめいて、薄紅の袖のゆるる中から細い腕が男の膝の方に落ちて来た。軽くあたつたのは指先ばかりである。

善人の会話は写真撮影に終る。

八

秋は次第に行く。虫の音はようやく細る。

筆硯に命を籠むる道也先生は、ただ人生の一大事因縁に著して、他を顧みるの暇

なきが故に、暮るる秋の寒きを知らず、虫の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪の先に垢のたまるを知らず、蝟寺の柿の落ちた事は無論知らぬ。動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生の天職である。高く、偉いなる、公けなる、あるものの方に一步なりとも動かすが道也先生の使命である。道也先生はその他を知らぬ。

高柳君はそうは行かぬ。道也先生の何事をも知らざるに反して、彼は何事をも知る。往来の人の眼つきも知る。肌寒く吹く風の鋭どきも知る。かすれて渡る雁の数も知る。美しくしき女も知る。黄金の貴きも知る。木屑のごとく取り扱われる吾身のはかなくて、浮世の苦しみの骨に食い入る夕々を知る。下宿の菜の憐れにして芋ばかりなるはもとより知る。知り過ぎたるが君の癖にして、この癖を増長せしめたるが君の病である。天下に、人間は殺しても殺し切れぬほどある。しかしこの病を癒してくれるものは一人もない。この病を癒してくれぬ以上は何千万人いるも、おらぬと同様である。彼は一人坊つちになつた。己れに足りて人に待つ事なき呑気な一人坊つちではない。同情に餓え、人間に濁してやるせなき一人坊つちである。中野君は病氣と云う、われも病氣と思う。しかし自分を一人坊つちの病氣にしたものは世間である。自分を一人坊つちの病氣にした世間は危篤なる病人を眼前に控えて嘔いている。世間は自分を病氣にしたばかりでは満足せぬ。半死の病

人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪わざるを得ぬ。

道也先生から見た天地は人のためにする天地である。高柳君から見た天地は己れのためにする天地である。人のためにする天地であるから、世話をしてくれ手がなくても恨とは思わぬ。己れのためにする天地であるから、己れをかまってくれぬ世を残酷と思う。

世話をするために生れた人と、世話をされに生れた人とはこれほど違う。人を指導するものと、人にたよるものとはこれほど違う。同じく一人坊つちでありながらこれほど違う。高柳君にはこの違いがわからぬ。

垢染あかじみた布団ふとんを冷ひややかに敷いて、五分刈ごぶがりが七分ほどに延びた頭を薄ぎたない枕の上に横よこえていた高柳君はふと眼を挙あげて庭前ていぜんの梧桐ごしょうを見た。高柳君は述作をして眼がつかれると必ずこの梧桐を見る。地理学教授法を訳して、くさくさすると必ずこの梧桐を見る。手紙を書いてさえ行き詰まるときつとこの梧桐を見る。見るはずである。三坪ほどの荒庭あれにに見るべきものは一本の梧桐を除いてはほかに何にもない。

ことにこの間から、気分がわるくて、仕事をする元気がないので、あやしげな机ほおづに頬杖えを突えいては朝な夕なに梧桐ごしょうを眺ながめくらしして、うつらうつらとしていた。

一 葉落いちようちてと云う句は古い。悲しき秋は必ず梧桐から手を下くだす。ばつかりと垣にかか

る^{あわせ} 衾の頃は、さまでに心を動かす縁^{よすが}ともならぬと油断する翌^{よくあき}朝またばさりと落ちる。うそ寒いからと早く繰る雨戸の外にまたばさりと音がする。葉はようやくやく黄ばんで来る。

青いものがしだいに衰える裏から、浮き上がるのは薄く流した脂^{やに}の色である。脂は夜ごとを寒く明けて、濃く変つて行く。婆娑たる命は旦^{たんせき}夕^{せま}に逼る。

風が吹く。どこから来るか知らぬ風がすうと吹く。黄ばんだ梢^{こすえ}は動ぐとも見えぬ先に一^ひ葉^{とばたは}二葉がはらはら落ちる。あとはようやく助かる。

脂は夜ごとの秋の霜^{しも}にだんだん濃^こくなる。脂のなかに黒い筋が立つ。箒^{ほうぎ}で敲^{たた}けば煎餅^{せんべい}を折るような音がする。黒い筋は左右へ焼けひろがる。もう危うい。

風がくる。垣^{すき}の隙^{すき}から、椽^{えん}の下から吹いてくる。危ういものは落ちる。しきりに落ちる。危ういと思う心さえなくなるほど梢^{こすえ}を離れる。明らさまなる月がさすと枝の数^{かず}が読まれるくらいあらわに骨が出る。

わずかに残る葉を虫が食う。渋^{しぶ}色^{いろ}の濃いなかにぽつりと穴があく。隣りにもあく、その隣りにもぽつりぽつりとあく。一面が穴だらけになる。心細いと枯れた葉が云う。心細かろうと見ている人が云う。ところへ風が吹いて来る。葉はみんな飛んでしまう。

高柳君がふと眼を挙げた時、梧桐はすべてこれらの径路^{けいろ}を通り越して、から坊主^{ぼうず}になつ

ていた。窓に近く斜めに張った枝の先にただ一枚の虫食葉がかぶりついている。

「一人坊つちだ」と高柳君は口のなかで云った。

高柳君は先月あたりから、妙な咳をする。始めは気にもしなかつた。だんだん腹に答えのない咳が出る。咳だけではない。熱も出る。出るかと思うとやむ。やんだから仕事をしようかと思うとまた出る。高柳君は首を傾けた。

医者に行つて見てもらおうかと思つたが、見てもらうと決心すれば、自分で自分を病氣だと認定した事になる。自分で自分の病氣を認定するのは、自分で自分の罪悪を認定するよなものである。自分の罪悪は判決を受けるまでは腹のなかで弁護するのが人情である。高柳君は自分の身体を医師の宣告にからぬ先に弁護した。神経であると弁護した。神経と事実とは兄弟であると云う事を高柳君は知らない。

夜になると時々寝汗をかく。汗で眼がさめる事がある。真暗ななかで眼がさめる。この真暗さが永久続いてくれればいいと思う。夜があけて、人の声がして、世間が存在しているると云う事がわかると苦痛である。

暗いなかをなお暗くするために眼を眠つて、夜着のなかへ頭をつき込んで、もうこれぎり世の中へ顔が出したくない。このまま眠りに入つて、眠りから醒めぬ間に、あの世に行

つたら結構だろうと考えながら寝る。あくる日になると太陽は無慈悲にも赫奕として窓を照らしている。

時計を出しては一日に脈を何遍となく験して見る。何遍験しても平脈ではない。早く打ち過ぎる。不規則に打ち過ぎる。どうしても尋常には打たない。痰を吐くたびに眼を皿のようにして眺める。赤いもの見えないのが、せめてもの慰安である。

痰に血の交らぬのを慰安とするものは、血の交る時にはただ生きているのを慰安とせねばならぬ。生きているだけを慰安とする運命に近づくかも知れぬ高柳君は、生きているだけを厭う人である。人は多くの場合においてこの矛盾を冒す。彼らは幸福に生きるのを目的とする。幸福に生きんがためには、幸福を享受すべき生そのものの必要を認めぬ訳には行かぬ。単なる生命は彼らの目的にあらずとするも、幸福を享け得る必須条件として、あらゆる苦痛のもとに維持せねばならぬ。彼らがこの矛盾を冒して塵界に流転するとき死なんとして死ぬ能わず、しかも日ごとに死に引き入れらるる事を自覚する。負債を償うの目的をもつて月々に負債を新たにしつつあると変りはない。これを悲酸なる煩悶と云う。

高柳君は床のなかから這い出した。瓦斯系の蚊緋の綿入の上から黒木綿の羽織を着

る。机に向う。やつぱり翻訳をする了りようけん簡かんである。四五日しごんちそのままにして置いた机の上には、障子の破れから吹き込んだ砂が一面に軽かろくたまっている。硯すずりのなかは白く見える。高柳君は面倒だと見えて、塵ちりも吹かずに、上から水をさした。水入みずいれに在ある水ではない。五六輪まめぎくの豆菊まめぎくを挿さした硝子ガラスの小瓶こびんを花ながら傾けて、どっと硯の池に落した水である。さかに磨すり減らした古梅園こばいえんをしきりに動かすと、じやりじやり云う。高柳君は不愉快まゆの眉まゆをあつめた。不愉快の起る前に、不愉快を取り除く面倒をあえてせずして、不愉快の起つた時に唇くちびるを嚙かむのはかかる人の例である。彼は不愉快を忍ぶべく余り鋭敏である。しかしてあらかじめこれに備うべくあまり自棄じきである。

机上に原稿紙を展のべた彼は、一時間ほど呻しんぎん吟ぎんしてようやく二三枚黒くしたが、やがて打ちやるように筆を擱おいた。窓の外には落ち損そくなつた一枚の桐きりの葉が淋しく残っている。「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のうちにまたまた繰り返した。

見るうちに、葉は少しく上に揺れてまた下に揺れた。いよいよ落ちる。と思う間に風ははたとやんだ。

高柳君は巻紙を出して、今度は故里ふるさとの御母おつかさんの所へ手紙を書き始めた。「寒気かんき相加かわり候そろとこう 処いかが如何御暮あそぼされそろし被遊あいかわらず候や。不相変御丈夫の事と奉遥ようさつたてまつりそろ察さつ候候。私事も

無事」とまでかいて、しばらく考えていたが、やがてこの五六行を裂いてしまった。裂いた反古を口へ入れてくちやくちや噛んでいると思つたら、ぽつと黒いものを庭へ吐き出した。

一人坊つちの葉がまた揺れる。今度は右へ左へ二三度首を振る。その振りがようやく収つたと思う頃、颯と音がして、病葉はぼたりと落ちた。

「落ちた。落ちた」と高柳君はさも落ちたらしく云つた。

やがて三尺の押入を開けて茶色の中折を取り出す。門口へ出て空を仰ぐと、行く秋を重いものが上から囲んでいる。

「御婆さん、御婆さん」

はいと婆さんが雑巾を刺す手をやめて出て来る。

「傘をとって下さい。わたしの室の椽側にある」

降れば傘をさすまでも歩く考である。どこと云う目的もないがただ歩くつもりなのである。電車の走るのは電車が走るのだが、なぜ走るのだから電車にもわかるまい。高柳君は自分があるだけでは承知している。しかしなぜあるのだから電車のごとく無意識である。用もなく、あてもなく、またあるきたくもないものを無理にあるかせるのは残酷である。

残酷があるかせるのだから敵は取れない。敵が取りたければ、残酷を製造した発頭人に向うよりほかに仕方がない。残酷を製造した発頭人は世間である。高柳君はひとり敵の中にあるいている。いくら、あるいてもやつぱり一人坊つちである。

ぼつりぼつりと折々降ってくる。初時雨と云うのだろう。豆腐屋の軒下に豆を絞った殻が、山のように桶にもつてある。山の頂がぼくりと欠けて四面から煙が出る。風に連れて煙は往来へ靡く。塩物屋に鮭の切身が、渋びた赤い色を見せて、並んでいる。隣りに、しらす干がかたまつて白く反り返る。鰹節屋の小僧が一生懸命に土佐節をささらで磨いている。ぴかりぴかりと光る。奥に婚礼用の松が真青に景気を添える。葉茶屋では丁稚が抹茶をゆつくりゆつくり白で挽いている。番頭は往来を睨めながら茶を飲んでゐる。

——「えつ、あぶねえ」と高柳君は突き飛ばされた。

黒紋付の羽織に山高帽を被つた立派な紳士が綱曳で飛んで行く。車へ乗るものは勢がいい。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。「えつ、あぶねえ」と拳突を喰わされても黙つておらねばならん。高柳君は幽霊のようにあるいている。

青銅の鳥居をくぐる。敷石の上に鳩が五六羽、時雨の中を遠近している。唐人髻に結つた半玉が渋蛇の目をさして鳩を見ている。あらい八丈の羽織を長く着て、

素足すあしを爪皮つまかわのなかへさし込んで立った姿を、下宿の二階窓から書生が顔を二つ出して評している。柏手かしわでを打って鈴を鳴らして御賽銭おさいせんをなげ込んだ後姿が、見ている間にこつちへ逆ぎやくもどり戻もどる。黒縮緬くろぢりめんへ三つ柏がしわの紋をつけた意気な芸者がすれ違ふときに、高柳君の方に一瞥いちべつの秋波しゅうはを送った。高柳君は鉛しよを背負よつたような重い心持ちになる。

石段を三十六おりる。電車がごうごうと通る。岩崎いわさきの塀へいが冷酷そびに聳そびえている。あの塀へ頭をぶつけて壊こわしてやろうかと思う。時雨しぐれはいつか休やんで電車の停留所に五六人待っている。背せの高い黒紋付が蝙蝠傘こつせりを畳たたんで空を仰いでいた。

「先生」と一人坊ひとりぼつちの高柳君は呼びかけた。

「やあ妙な所で逢あいましたね。散歩かね」

「ええ」と高柳君は答えた。

「天気あまのわるいによく散歩するですね。——岩崎の塀へいを三度周まわるといい散歩になる。ハハハ」

高柳君はちよつといい心持ちになった。

「先生は？」

「僕ですか、僕はなかなか散歩する暇あひかわらなかないです。不あひかわら相ら変ず多忙たぼうでね。今日はちよつ

と上野の図書館まで調べ物に行ったです」

高柳君は道也先生に逢うと何だか元氣が出る。一人坊つちでありながら、こう平氣にしている先生が現在世のなかにあると思うと、多少は心丈夫になると見える。

「先生もう少し散歩をなさいませんか」

「そう、少しなら、してもいい。どつちの方へ。上野はもうよそう。今通つて来たばかりだから」

「私はどつちでもいいのです」

「じゃ坂を上つて、本郷の方へ行きましょう。僕はあつちへ帰るんだから」

二人は電車の路を沿うてあるき出した。高柳君は一人坊つちが急に二人坊つちになつたような気がする。そう思うと空も広く見える。もう綱つなひき曳から突き飛ばされるきづかい氣遣はあ
るまいとまで思う。

「先生」

「何ですか」

「さつき、車屋から突き飛ばされました」

「そりゃ、あぶなかつた。怪我けがをしやしませんか」

「いいえ、怪我はしませんが、腹は立ちました」

「そう。しかし腹を立てても仕方がないでしょう。——しかし腹も立てようによるですな。昔し渡辺^{わたなべ}華山^{かざん}が松平侯の供^{ともさき}先に粗忽^{そごつ}で突き当ってひどい目に逢^あった事がある。華山がその時の事を書いてね。——松平侯御横行——と云つてるのですが。この御横行の三字が非常に面白いじゃないですか。尊^{たつと}んで御^{おん}の字をつけてるがその裏に立派な反抗心がある。気概がある。君も綱引御横行と日記にかくさ」

「松平侯つて、だれですか」

「だれだか知れやしない。それが知れるくらいなら御横行はししないでですよ。その時発憤した華山はいまだに生きてるが、松平某なるものは誰も知りやしない」

「そう思うと愉快ですが、岩崎の堀^へなどを見ると頭をぶつけて、壊^{こわ}してやりたくありません」

「頭をぶつけて、壊せりや、君より先に壊してるものがあるかも知れない。そんな愚^ぐな事を云わずに正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです」

「その創作をさせてくれないのです」

「誰が」

「誰がつて訳じゃないですが、出来ないのです」

「からだでも悪いですか」と道也先生横から覗き込む。高柳君の頬は熱を帯びて、蒼い中から、ほてっている。道也は首を傾けた。

「君坂を上がると呼吸が切れるようだが、どこが悪いじゃないですか」

強いて自分にさえ隠そうとする事を言いあてられると、言いあてられるほど、明白な事実であつたかと落胆する。言いあてられた高柳君は暗い穴の中へ落ちた。人は知らず、かかる冷酷なる同情を加えて憚からぬが多い。

「先生」と高柳君は往來に立ち留まった。

「何ですか」

「私は病人に見えるでしょうか」

「ええ、まあ、——少し顔色は悪いです」

「どうしても肺病でしょうか」

「肺病？ そんな事はないです」

「いいえ、遠慮なく云つて下さい」

「肺の気でもあるんですか」

「遺伝です。おやじは肺病で死にました」

「それは……」と云つたが先生返答に窮した。

膀胱ぼうこうにはち切れるばかり水を詰めたのを針ほどの穴に洩もらせば、針ほどの穴はすぐ白銅ほどになる。高柳君は道也の返答をきかぬがごとくに、しゃべってしまふ。

「先生、私の歴史を聞いて下さいますか」

「ええ、聞きますとも」

「おやじは町で郵便局の役人でした。私が七つの年に拘こういん引されてしまいました」
道也先生は、だまつたまま、話し手といつしよにゆるく歩ほを運ばして行く。

「あとで聞くと官金を消費したんだそうで——その時はなんにも知りませんでした。母にきくと、おとつさんは今に帰る、今に帰ると云つてました。——しかしとうとう帰つて来ません。帰らないはずです。肺病になつて、牢屋ろうやのなかで死んでしまつたんです。それもずっとあとで聞きました。母は家を畳んで村へ引き込みました。……」

向むかひから威勢のいい車が二挺にちよう束髪そくはつの女を乗せてくる。二人はちよつとよける。話とはとぎれる。

「先生」

「何ですか」

「だから私には肺病の遺伝があるんです。駄目です」

「医者に見せたですか」

「医者には——見せません。見せたって見せなくたって同じ事です」

「そりゃ、いけない。肺病だつて癒なほらんとは限らない」

高柳君は気味の悪い笑いを洩もらした。時雨しぐれがはらはらと降つて来る。からたち寺てらの門の扉へきに 巖がん録ろく提てい唱しょうと貼はりつけた紙かみが際きわ立つて白く見える。女学校から生徒がぞろぞろ出てくる。赤や、紫や、海老茶えびぢやの色が往来へちらばる。

「先生、罪悪も遺伝するものでしょうか」と女学生の間を縫ぬいながら歩ほを移しつつ高柳君が聞く。

「そんな事があるものですか」

「遺伝はしないでも、私は罪人の子です。切せつないです」

「それは切ないに違ちがいしない。しかし忘れなくっちゃいけない」

警察署から手錠てじょうをはめた囚人が二人、巡査に護送されて出てくる。時雨しぐれが囚人の髪にかかる。

「忘れても、すぐ思い出します」

道也先生は少し大きな声を出した。

「しかしあなたの生しょうがい涯がいは過去にあるんですか未来にあるんですか。君はこれから花が咲く身ですよ」

「花が咲く前に枯れるんです」

「枯れる前に仕事をするんです」

高柳君はだまつている。過去を顧かえりみれば罪である。未来を望めば病気である。現在は麵めんのンためにする写字である。

道也先生は高柳君の耳みみの傍そばへ口を持って来て云った。

「君は自分だけが一人坊ひとりぼつちだと思ふかも知れないが、僕も一人坊ひとりぼつちですよ。一人坊ひとりぼつちチは崇高なものです」

高柳君にはこの言葉の意味がわからなかった。

「わかったですか」と道也先生がきく。

「崇高——なぜ……」

「それが、わからなければ、とうてい一人坊ひとりぼつちでは生きていられません。——君は人よ

り高い平面にいと自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊っちなのでしよう。しかし人が認めてくれるような平面ならば人も上あがってくる平面です。芸者や車くるま引ひきに理會されるような人格なら低いにきまつてます。それを芸者や車引も自分と同等なものと思ひ込んでしまふから、先方から見くびられた時腹が立ったり、煩悶はんもんするので。もしあんなものと同等なら創作をしたつて、やつぱり同等の創作しか出来ない訳だ。同等でなければこそ、立派な人格を發揮する作物さくぶつも出来る。立派な人格を發揮する作物が出来なければ、彼らからは見くびられるのはもつともでしょう」

「芸者や車引はどうでもいいですが……」

「例はだれだつて同じ事です。同じ学校を同じに卒業した者だつて変りはありません。同じ卒業生だから似たものだろうと思うのは教育の形式が似ているのを教育の実体が似ているものと考え違ちがひした議論です。同じ大学の卒業生が同じ程度のものであったら、大学の卒業生はことごとく後世に名を残すか、またはことごとく消えてしまわなくつてはならない。自分こそ後世に名を残そうと力りきむならば、たとい同じ学校の卒業生にもせよ、ほかのものは残らないのだと云う事を仮定してかからなければなりません。すでにその仮定があるなら自分と、ほかの人とは同様の学士であるにもかかわらずすでに大差別があると自認し

た訳じやありませんか。大差別があると自任しながら他ひとが自分を解してくれんと云つて煩悶するのは矛盾です」

「それで先生は後世に名を残すおつもりでやっていらつしやるんですか」

「わたしのは少し、違います。今の議論はあなたを本位にして立てた議論です。立派な作物を出して後世に伝えたいと云うのが、あなたの御希望のようだから御話しをしたのです」

「先生うけたまわのが承る事が出来るなら、教えて頂けますまいか」

「わたしは名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただ自分の満足を得るために世のために働くのです。結果は悪名になろうと、臭しゅうめい名になろうと気狂きちがいになろうと仕方がない。ただこう働かなくつては満足が出来ないから働くまでの事です。こう働かなくつて満足が出来ないと場所をもつて見ると、これが、わたしの道に相違ない。人間は道に従うよりほかにやりようのないものだ。人間は道の動物であるから、道に従うのが一番貴たつといのだらうと思つています。道に従う人は神も避けねばならんです。岩崎の堀へいなんか何でもない。ハハハハ」

剥はげかかった山高帽を阿弥陀あみだに被かぶつて毛繻子張りの蝙蝠傘こうもりをさした、一人坊ひとりぼつちの腰弁こし当の細長い顔から後光ごこうがさした。高柳君ははつと思つた。

往來のものは右へ左へ行く。往來の店は客を迎え客を送る。電車は出来るだけ人を載せて東西に走る。織るがごとき街の中に喪家の犬のごとく歩む二人は、免職になりたての属官と、墮落した青書生と見えるだろう。見えても仕方がない。道也はそれでたくさんだと思ふ。周作はそれではならぬと思ふ。二人は四丁目の角でわかれた。

九

小春の日に温め返された別荘の小天地を開いて結婚の披露をする。

愛は偏狭を嫌う、また専有をにくむ。愛したる二人の間に有り余る情を挙げて、博く衆生を潤おす。有りあまる財を抛つて多くの資格を会す。来らざるものは和樂の扇に塵く風を厭うて、寒き雪空に赴く鳧雁の類である。

円満なる愛は触るところのすべてを円満にす。二人の愛は曇り勝ちなる時雨の空さえも円満にした。——太陽の真上に照る日である。照る事は誰でも知るが、だれも手を翳して仰ぎ見る事のならぬくらい明かに照る日である。得意なるものに明かなる日の嫌なものはない。客は車を駆つて東西南北より来る。

杉の葉の青きを扱えらんで、丸柱の太きを装よそおい、頭の上かしらの一丈にて二本を左右より平たいらに曲かめて
 続つぎ合せたるをアーチと云う。杉の葉の青きはあまりに敵おごそかに過かぐ。愛の郷に入るものは、
 ただおごそかなる門を潜くぐるべからず。青きものは暖かき色に和やわらちられねばならぬ。

裂けげば煙けづる蜜柑みかんの味はしらず、色こそ暖かい。小春こはるの色は黄である。点々と珠たまを綴つづる杉
 の葉影に、ゆたかなる南海の風は通う。紫に明け渡る夜を待ちかねて、ぬつと出る旭あさひ日が、
 岡おかより岡を射いて、万顆ばんかの黄玉こうぎよくは一時に耀かがやく紀の国から、偷ぬすみ来た香かおりと思おもわれる。こ
 の下を通るものは酔よわねば出る事を許ゆるされぬ掟おきてである。

緑門アーチの下には新しき夫婦が立たっている。すべての夫婦は新あらしくなければならぬ。新し
 き夫婦は美しくなければならぬ。新しく美しき夫婦は幸福でなければならぬ。彼らはこの
 緑門の下に立たつて、迎むかへたる賓客いんかくにわが幸福の一分いちぶを与たまへ、送り出す朋友ほうゆうにわが幸福の
 一分を与たまへて、残る幸福に共とも白髪しらがの長き末までを耽ふけるべく、新らしいのである、また美
 くしいのである。

男は黒き上着しまに縞ズボンの洋袴をはを穿はく。折々は雪あざむを欺あざむく白ハシき手ハシ拭アテが黒き胸たのあたりに漂ただよう。
 女は紋つきである。裾すそを色いろどる模様はなの華はなやかなるなかから浮うき上がるがごとく調子よくす
 らりと腰こしから上うへが抜ぬけ出でている。ヴィーナスは浪なみのなかから生なれた。この女は裾すそ模様はなの

なかから生れている。

日は明かに女の頸筋くびすじに落ちて、角かどだたぬ咽喉のどの方はほの白き影となる。横から見るときその影が消えるがごとく薄くなつて、判然はつきとしたやさしき輪廓りんかくに終る。その上に紫むらさきのうずまきは一朵いちだの暗き髪かみを束つかねながらも額ひたいぎわ際に浮かせたのである。金台しんくに深紅しんくの七しつぽ宝うを鏤ちりばめたヌーボー式かんざしの簪かんざしが紫の影から顔だけ出している。

愛は堅きものを忌いむ。すべての硬性ようかを溶化ようかせねばやまぬ。女の眼かみに耀かがやく光りは、光りそれ自みずからの溶とけた姿である。不可思議ふしぎなる神境かみから双眸そうぼうの底たに漂ただようて、視界しがいに入る万有ばんいうを恍惚こうこうの境きょうに遣しやう遥ようせしむる。迎むかえられたる賓客ひんかくは陶然とうぜんとして園内えんないに入る。

「高柳さんはいらつしやるでしようか」と女が小さな声で聞く。

「え？」と男は耳を持つてくる。園内えんないでは楽隊がくたいが越後獅子えちごじしを奏そうしている。客は半分以上集まった。夫婦ふうふはなかへ這入はいつて接待せうたいをせねばならん。

「そうさね。忘れていた」と男が云う。

「もうだいぶ御客ごかくさまがいらしたから、向むかへ行かないじやわるいでしょう」

「そうさね。もう行く方がいいだろう。しかし高柳かやなぎがくると可哀かわい想そうだからね」

「ここにいらつしやらないですか」

「うん。あの男は、わたしが、ここに見えないと門まで来て引き返すよ」

「なぜ？」

「なぜって、こんな所へ来た事はないんだから——一人で一人坊ひとりぼつちになる男なんだから——、ともかくもアーチを潜くぐらせてしまわないと安心が出来ない」

「いらつしやるんでしようね」

「来るよ、わざわざ行つて頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにいられない男だからきつとくるよ」

「御おん厭いやなんですか」

「厭いやつて、なに別に厭いやな事もないんだが、つまりきまりがわるいのさ」

「ホホホ妙ですわね」

きまりのわるいのは自信がないからである。自信がないのは、人が馬鹿に思うと思うからである。中野君はただきまりが悪いからだと言う。細君はただ妙ですわねと思う。この夫婦は自分達のきまりを悪わるるがる事は忘れてゐる。この夫婦の境きょうがい界がいにある人は、いくらきまりを悪わるるがる性しょうべん分ぶんでも、きまりをわるがらずに生しょうがい涯がいを濟きませる事が出来る。「いらつしやるなら、ここにおいて上げる方がいいでしょう」

「来る事は受け合うよ。——いいさ、奥はおやじや何かだいたいぶいるから」

愛は善人である。善人はその友のために自家の不都合を犠牲にするを憚^{はば}からぬ。夫婦は高柳君のためにアーチの下に待っている。高柳君は来ねばならぬ。

馬車の客、車の客の間に、ただ一人高柳君は蹠^{そうろう}跟^{とう}として敵地に乗り込んで来る。この海のごとく和氣^{みなぎ}の漲りたる園遊会——新夫婦の面^{おもて}に湛^たえたる笑の波に酔うて、われ知らず幸福の同化を享^うくる園遊会——行く年をしばらくは春に戻して、のどかなる日影に、窮^{きゆう}陰^{いん}の面^まのあたりなるを忘るべき園遊会は高柳君にとつて敵地である。

富^{いきお}と勢^おと得意と満足の跋扈^{ばっこ}する所は東西球^{きゆう}を極^{きわ}めて高柳君には敵地である。高柳君はアーチの下に立つ新しき夫婦を十歩の遠きに見て、これがわが友であるとはたしかに思わなかつた。多少の不都合を犠牲にしてまで、高柳君を待ち受けたる夫婦の眼に高柳君の姿がちらと映じた時、待ち受けたにもかかわらず、待ち受け甲斐^がのある御客とは夫婦共に思わなかつた。友誼^{ゆうぎ}の三分^ぶ一は服装が引き受ける者である。頭のなかで考えた友達と眼の前へ出て来た友達とはだいたい違う。高柳君の服装はこの日の来客中でもっとも憐^{あわ}れなる服装である。愛は贅^ぜ沢^{たく}である。美なるもののほかには価値を認めぬ。女はなおさらに価値を認めぬ。

夫婦が高柳君と顔を見合せた時、夫婦共「これは」と思った。高柳君が夫婦と顔を見合せた時、同じく「これは」と思った。

世の中は「これは」と思った時、引き返せぬものである。高柳君は蹠踉として進んでくる。夫婦の胸にはつきざした「これは」は、すぐと愛の光りに姿をかくす。

「やあ、よく来てくれた。あまり遅いから、どうしたかと思って心配していたところだった」^{いっわ}偽りもない事実である。ただ「これは」と思った事だけを略したまでである。

「早く来ようと思つたが、つい用があつて……」これも事実である。けれどもやはり「これは」が略されている。人間の交際にはいつでも「これは」が略される。略された「これは」が重なると、喧嘩^{けんか}なしの絶交となる。親しき夫婦、親しき朋友^{ほうゆう}が、腹のなかの「これは、これは」でなし崩し^{くず}に愛想^{あいそ}をつかし合っている。

「これが妻^{さい}だ」と引き合わせる。一人坊^{ひとりぼ}つちに美しい妻君を引き合わせるのは好意^{こうい}より出た罪悪である。愛の光りを浴びたものは、嬉し^{うれ}さがはびこつて、そんな事に頓^{とん}着^{じゃく}はな
い。

何にも云わぬ細君はただしとやかに頭を下げた。高柳君はほんやりしている。

「さあ、あちらへ——僕もいっしょに行こう」と歩^{めく}を運らす。十間ばかりあるくと、夫婦

はすぐ胡麻塩ごましおおやじにつらまった。

「や、どうもみごとな御庭ですね。こう広くはあるまいと思つてたが——いえ始めてで。おとつさんから時々御招きはあつたが、いつでも折悪しく用事があつて——どうも、よく御手入れが届いて、実に結構ですね……」

と胡麻塩はのべつに述べたてて容易に動かない。ところへまた二三人がやつてくる。

「結構だ」「何坪ですかな」「私も年来この辺へんを心掛けておりますが」などと新夫婦を取り捲まいてしまう。高柳君は憮然ぶぜんとして中心をはずれて立っている。

すると向うから、襷たすきがけの女が駈けて来て、いきなり塩瀬しおぜの五つ紋もんをつらまえた。

「さあ、いらつしやい」

「いらつしやいたつて、もうほかで御馳走ごちそうになつちまったよ」

「ずるいわ、あなたは、他にひとこれほど馳かけずり廻らせて」

「旨うまいいものも、ない癖くせに」

「あるわよ、あなた。まあいいからいらつしやいてえのに」とぐいぐい引つ張る。塩瀬しおぜは羽織が大事だから引かれながら行く、途端とたんに高柳君に突き当つた。塩瀬はちよつと驚ろいて振り向いたまでは、粗忽そごつをして恐れ入つたと云う面相めんそうをしていたが、高柳君の顔から

服装を見るや否や、急に表情を変えた。

「やあ、こりゃ」と上からさげすむように云つて、しかも立つて見ている。

「いらつしやいよ。いいからいらつしやいよ。構わないでも、いいからいらつしやいよ」と女は高柳君を後目しりめにかけたなり塩瀬を引つ張つて行く。

高柳君はぼつぼつ歩き出した。若夫婦は遥かあなたに遮られていっしよにはなれぬ。芝生ぼふの真中に長い天幕テントを張る。中を覗のぞいて見たら、暗い所に大きな菊の鉢はちがならべてある。

今頃こんな菊がまだあるかと思う。白い長い花卉が中心から四方へ数百片延び尽して、延び尽した端はしからまた随意そに反り返りつつ、あらん限りの狂態を演じているのがある。背筋せすじの通つた黄な片ひらが中へ中へと抱き合つて、真中に大切なものを守護するごとく、こんもりと丸くなつたのもある。松の鉢も見える。玻璃盤はりばんに堆うずたかく林檎りんごを盛つたのが、白い卓布たくふの上に鮮あざやかに映る。林檎の頬が、暗きうちにも光っている。蜜柑を盛つた大皿もある。傍そばでけらけらと笑う声がある。驚ろいて振り向くと、しるくはつとを被かぶつた二人の若い男が、二人共相好そつこうを崩くずしている。

「妙だよ。実に」と一人が云う。

「珍だね。全く田舎者いなかものなんだよ」と一人が云う。

高柳君はじつと二人を見た。一人は胸開の狭い。模様のある胴衣チョツキを着て、右手の親指を胴衣のぼっけつとへ突き込んだまま肘ひじを張っている。一人は細い杖つえに言訳いいわけほどに身をもたせて、護謨ゴムびき靴の右の爪先つまさきを、豎たてに地に突いて、左足一本で細長いからだの中心さへを支えている。

「まるで給仕人ウエーターだ」と一本足が云う。

高柳君は自分の事を云うのかと思つた。すると色胴衣が

「本当にさ。園遊会に燕尾服えんびふくを着てくるなんて——洋行しないだつてそのくらいな事はわかりそうなものだ」と相鎚あいづちを打っている。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまつて、何か話をしている。同類相集まると云う訳だろう。高柳君はようやくあれを笑つてるのだなと気がついた。しかしなぜ燕尾服が園遊会に適しないかはどうてい想像がつかかなかつた。

芝生の行き当りに葭簀よしず掛けの踊舞台おどりぶたいがあつて、何かしきりにやっている。正面は紅白の幕ひさしで庇ひさしをかこつて、奥には赤い毛氈もうせんを敷いた長い台がある。その上に三味線を抱えた女が三人、抱えないのが二人並んでいる。弾ひくものと唄うたうものと分業にしたのである。舞台の真中に金紙きんがみの烏帽子えぼしを被かぶつて、真白に顔を塗りたてた女が、棹さおのようなものを持つ

たり、落したり、舞扇まいおうぎを開いたり、つぼめたり、長い赤い袖そでを翳かぎしたり、翳さなかつたり、何でもしきりに身振しなをしている。半紙に墨黒々と朝妻船あさづまぶねとかいて貼はり出してあるから、おおかた朝妻船と云うものだろうと高柳君はしばらく後ろうしの方から小さくなって眺ながめていた。

舞台を左へ切れると、御影みかげの橋がある。橋の向むこうの築山つきやまの傍手わきてには松が沢山ある。松の間から暖簾のれんのようなものがちらちら見える。中で女がききと笑っている。橋を渡りかけた高柳君はまた引き返した。楽隊が一度に満庭の空気を動かして起る。

そろそろと天幕テントの所まで帰って来る。今度は中を覗のぞくのをやめにした。中は大勢でがやがやしている。入口へ回って見ると人で埋うずまって皿の音がしきりにする。若夫婦はどこにいるか見えぬ。

しばらく様子を窺うかがっていると突然万歳と云う声が出た。楽隊の音は消されてしまう。石橋の向うで万歳と云う返事がある。これは迷子まいごの万歳である。高柳君はのそりと疳かんちがい違ちがをした客のように天幕のうちに這はい入った。

皿だけ高く差し上げて人と人の間を抜けて来たものがある。

「さあ、御上おあがんなさい。まだあるんだが人が込んでて容易に手が届かない」と云う。高柳

君は自分にくれるにしては目の見当が少し違うと思つたら、後ろの方で「ありがとう」と云う涼しい声がした。十七八の桃色縮緬の紋付をきた令嬢が皿をもらつたまま立っている。

傍にいた紳士が、天幕の隅から一脚の椅子を持って来て、

「さあこの上へ御乗せなさい」と令嬢の前に据えた。高柳君は一閃ばかり左へ進む。天幕の柱に倚りかかつて洋服と和服が煙草をふかしている。

「葉巻はやめたのかい」

「うん、頭にわるいそうだから——しかしあれを呑みつけると、何だね、紙巻はどうてい呑めないね。どんな好い奴でも駄目だ」

「そりや、値段だけだから——一本三十銭と三銭とは比較にならないからな」

「君は何を呑むのだい」

「これをつやつて見たまえ」と洋服が鰐皮の煙草入から太い紙巻を出す。

「なるほどエジプシアンか。これは百本五六円するだろう」

「安い割にはうまく呑めるよ」

「そうか——僕も紙巻でも始めようか。これなら日に二十本ずつにしても二十円ぐらいで

あがるからね」

二十円は高柳君の全収入である。この紳士は高柳君の全収入を煙けむにするつもりである。高柳君はまた左へ四尺ほど進んだ。二三人話をしている。

「この間ね、野添のぞえが例の人造肥料会社を起すので……」と頭の禿はげた鼻の低い金歯を入れた男が云う。

「うん。ありや当ったね。旨うまくやったよ」と真四角な色の黒い、煙草入の金具のような顔が云う。

「君も賛成者のうちに名が見えたじゃないか」と胡麻塩頭ごましおあたまの最前さいぜん中野君を途中で強ごうだ奪つしたおやじが云う。

「それさ」と今度は禿はげの番である。「野添が、どうです少し持つてくれませんかと云うから、さようさ、わたしは今回はまあよしましようと思わったのさ。ところが、まあ、そう云わずと、せめて五百株でも、実はもう貴所あなたの名前にしてあるんだからと云うのさ、面倒だからいい加減に挨拶あいさつをして置いたら先生すぐ九州へ立つて行った。それから二週間ほどして社へ出ると書記が野添さんの株が大変あが上りました。五十円株が六十五円になりました。合計三万二千五百円になりましたと云うのさ」

「そりや豪勢だ、実は僕も少し持とうと思つてたんだが」と四角が云うと

「ありや實際意外だった。あんなに、とんとん拍子にあがろうとは思わなかった」と胡麻塩ましおがしきりに胡麻塩頭かを搔く。

「もう少し踏み込んで沢山僕の名にして置けばよかつた」と禿はげは三万二千五百円以外に残念がつている。

高柳君は恐る恐る三人の傍そばを通り抜けた。若夫婦に逢つて挨拶して早く帰りたいと思つて、見廻わすと一番奥の方に二人は黒いフロックと五色の袖そでに取り巻かれて、なかなか寄りつけそうもない。食卓はようやく人数が減つた。しかし残つている食品はほとんどない。

「近頃は出掛けるかね」と云う声がある。仙台平せんだいひらをずるずる地びたへ引きずつて白足袋しろたびに鼠緒ねすおの雪駄せつたをかすかに出した三十恰好がっこうの男だ。

「昨日須崎すさぎの種田家たねだけの別荘へ招待されて鴨かもり猫ようをやつた」と五分刈ごぶがりの浅黒いのが答えた。
「鴨にはまだ早いだろう」

「もういいね。十羽ばかり取つたがね。僕が十羽、大谷おおたにが七羽、加瀬かせと山内やまのうちが八羽ずつ」

「じゃ君が一番か」

「いいや、斎藤は十五羽だ」

「へえ」と仙台平は感心している。

同期の卒業生は多いなかに、たつた五六人しか見えん。しかもあまり親しくないものばかりである。高柳君は挨拶だけして別段話もしなかつたが、今となって見ると何だか恋しい心持ちがする。どこぞにおりはせぬかと見廻したが影も見えぬ。ことによると帰つたかも知れぬ。自分も帰ろう。

主客は一である。主を離れて客なく、客を離れて主はない。吾々が主客の別を立てて物我の境を判然と分劃するのは生存上の便宜である。形を離れて色なく、色を離れて形なき強いて個別するの便宜、着想を離れて技巧なく技巧を離れて着想なきをしばらく両体となすの便宜と同様である。一たびこの差別を立したる時吾人は一の迷路に入る。ただ生存は人生の目的なるが故に、生存に便宜なるこの迷路は入る事いよいよ深くして出ずる事いよいよかたきを感じず。ひとり生存の欲を一刻たりとも擺脱したるときにこの迷は破る事が出来る。高柳君はこの欲を刹那も除去し得ざる男である。したがって主客を方寸に一致せしむる事のできがたき男である。主は主、客は客としてどこまでも膠着するが故に、一たび優勢なる客に逢うとき、八方より無形の太刀を揮つて、打ちのめさるるがごとき心

地がする。高柳君はこの園遊会において孤軍重囲のうちに陥つたのである。

蹠蹠そうろうとしてアーチを潜くぐつた高柳君はまた蹠蹠としてアーチを出いでざるを得ぬ。遠くから振り返つて見ると青い杉の環わの奥の方に天幕テントが小さく映つて、幕のなかから、奇麗きれいな着物がかたまつてあらわれて来た。あのなかに若い夫婦も交つてるのである。

夫婦の方では高柳をさがしている。

「時に高柳はどうしたろう。御前おまえあれから逢あつたかい」

「いいえ。あなたは」

「おれは逢わない」

「もう御帰りになつたんでしようか」

「そうさ、——しかし帰るなら、ちつとは帰る前に傍そばへ来て話でもしそうなものだ」

「なぜ皆さんのいらつしやる所へ出ていらつしやらないのでしょうか」

「損だね、ああ云う人は。あれで一人じややつぱり不愉快なんだ。不愉快なら出てくればいいのになおお引き込んでしまう。気の毒な男だ」

「せっかく愉快にしてあげようと思つて、御招きするのにな」

「今日は格別色がわるかつたようだ」

「きつと御病氣ですよ」

「やっぱり一人坊つちだから、色が悪いのだよ」

高柳君は往来をあるきながら、ぞつと悪寒を催した。

十

道也先生長い顔を長くして煤竹で囲った丸火桶を擁している。外を木枯が吹いて行く。

「あなた」と次の間から妻君が出てくる。紬の羽織の襟が折れていない。

「何だ」とこつちを向く。机の前におりながら、終日木枯に吹き曝されたかのごとくに見える。

「本は売れたのですか」

「まだ売れないよ」

「もう一カ月も立てば百や貳百の金は這入る都合だとおっしゃったじゃありませんか」

「うん言った。言ったには相違ないが、売れない」

「困るじゃござんせんか」

「困るよ。御前おまえよりおれの方が困る。困るから今考えてるんだ」

「だって、あんなに骨を折って、三百枚も出来てるものを——」

「三百枚どころか四百三十五頁ある」

「それで、どうして売れないんでしょう」

「やっぱり不景気なんだろうよ」

「だろっうよじや困りますわ。どうか出来ないでしうか」

「南溟堂なんめいどうへ持つて行つた時には、有名な人の御序文があればと云うから、それから足立あだち

なら大学教授だから、よかろうと思つて、足立にたのんだのさ。本も借金と同じ事で保証人がないと駄目だぜ」

「借金は借りるんだから保証人もいるでしうが——」と妻君頭のなかへ人ひと指さしゆびを入れてぐいぐい搔かく。束髪そくはつが揺れる。道也はその頭を見ている。

「近頃の本は借金同様だ。信用のないものは連帯責任でないと出版が出来ない」

「本当につまらないわね。あんなに夜遅くまでかかつて」

「そんな事は本屋の知らん事だ」

「本屋は知らないでしょうさ。しかしあなたは御存じでしょう」

「ハハハハ当人は知ってるよ。御前も知ってるだろう」

「知ってるから云うのでさあね」

「言ってくれても信用がないんだから仕方がない」

「それでどうなさるの」

「だから足立の所へ持つて行つたんだよ」

「足立さんが書いてやるとおっしゃって」

「うん、書くような事を云うから置いて来たら、またあとから書けないって断わつて来た」

「なぜでしょう」

「なぜだか知らない。厭いやなのだろう」

「それであなたはそのままにして御置きになるんですか」

「うん、書かんのを無理に頼む必要はないさ」

「でもそれじゃ、うちの方が困りますわ。この間御おあにい兄さんに判を押して借りて頂いた御

金ももう期限が切れるんですから」

「おれもその方を埋うめるつもりでいたんだが——売れないから仕方がない」

「馬鹿馬鹿しいのね。何のために骨を折ったんだか、分りやしない」

道也先生は火桶ひおけのなかの炭団たどんを火箸ひばしの先で突つつきながら「御前から見れば馬鹿馬鹿しいのさ」と云った。妻君はだまってしまふ。ひゆうひゆうと木枯こがらしが吹く。玄関の障子しょうじの破れが紙鳶たこのうなりのように鳴る。

「あなた、いつまでこうしていらつしやるの」と細君は術じゆつなげに聞いた。

「いつまでもとも考はない。食えればいつまでこうしていいじやないか」

「二言目ふたごめには食えれば食えればとおつしやるが、今こそ、どうにかこうにかして行きますけれども、このぶんで押して行けば今に食べられなくなりますよ」

「そんなに心配するのかい」

細君はむつとした様子である。

「だつて、あなたも、あんまり無考むかんがえじゃござんせんか。楽に暮せる教師の口はみんな断ことわつておしまいなすつて、そうして何でも筆で食うと頑固がんこを御張りになるんですもの」

「その通りだよ。筆で食うつもりなんだよ。御前もそのつもりにするがいい」

「食べるものが食べられれば私だつてそのつもりになりますわ。私も女房ですもの、あなたの御好きでおやりになる事をとやかく云うような差し出口はききやあしません」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「だって食べられないんですもの」

「たべられるよ」

「随分ね、あなたも。現に教師をしていた方が楽で、今の方がよっぽど苦しいじゃありませんか。あなたはやつぱり教師の方が御上手なんですよ。書く方は性に合わないんですよ」

「よくそんな事がわかるな」

細君は俯向うつむいて、袂たもとから鼻紙を出してちいんと鼻をかんだ。

「私ばかりじゃ、ありませんわ。御兄おあにいさんだって、そうおっしゃるじゃありませんか」

「御前は兄の云う事をそう信用しているのか」

「信用したっていいじゃありませんか、御兄さんですもの、そうして、あんなに立派にしていらつしやるんですもの」

「そうか」と云ったなり道也先生は火鉢ひばちの灰を丁寧ていねいに掻かきならす。中から二寸釘くぎが灰だらけになって出る。道也先生は、曲まった真鍮しんちゆうの火箸ひばしで二寸釘をつまみながら、片手に障子をあけて、ほいと庭先へ抛ほうり出した。

庭には何にもない。芭蕉ばしやうがずたずたに切れて、茶色ながら立往生をしている。地面は

皮が剥けて、蓆を捲きかけたように反つくり返っている。道也先生は庭の面を眺めながら「だいぶ吹いてるな」と独語のように云った。

「もう一遍足立さんに願つて御覧になつたらどうでしょう」

「厭なものに頼んだつて仕方がないさ」

「あなたは、それだから困るのね。どうせ、あんな、豪い方になれば、すぐ、おいそれと書いて下さる事はないでしょうから……」

「あんな豪い方つて——足立がかい」

「そりや、あなたも豪いでしょうさ——しかし向はともかくも大学校の先生ですから頭を下げたつて損はないでしょう」

「そうか、それじやおおせに従つて、もう一返頼んで見ようよ。——時に何時かな。や、大変だ、ちよつと社まで行つて、校正をしてこななければならぬ。袴を出してくれ」

道也先生は例のごとく茶の千筋の嘉平治を木枯にべらつかすべく一着して飄然と出て行つた。居間の柱時計がぼんぼんと二時を打つ。

思う事積んでは崩す炭火かなと云う句があるが、細君は恐らく知るまい。細君は道也先生の丸火桶の前へ来て、火桶の中を、丸るく掻きならしている。丸い火桶だから丸く掻

きならず。角な火桶なら角に搔きならずだろう。女は与えられたものを正しいものと考え、そのなかで差し当りのないように暮らすのを至善と心得ている。女は六角の火桶を与えられても、八角の火鉢を与えられても、六角にまた八角に灰を搔きならず。それより以上の見識は持たぬ。

立つてもおらぬ、坐つてもおらぬ、細君の腰は宙に浮いて、膝頭は火桶の縁につきつけられている。坐わるには所を得ない、立つては考えられない。細君の姿勢は中途半把で、細君の心も中途半把である。

考えると嫁に來たのは間違っている。娘のうちの方が、いくら氣楽で面白かったか知れぬ。人の女房はこんなものと、誰か教えてくれたら、來ぬ前によすはずであった。親でさえ、あれほどに親切を尽してくれたのだから、二世の契りと掟にさえ出ている夫は、二重にも三重にも可愛がつてくれるだろう、また可愛がつて下さるよと受合われて、住み馴れた家を今日限りと出た。今日限りと出た家へ二度とは歸られない。歸ろうと思つてもおとつさんもお母さんも亡くなつてしまった。可愛がられる目的ははずれて、可愛がつてくれる人はもうこの世にいない。

細君は赤い炭団の、灰の皮を剥いて、火箸の先で突つき始めた。炭火なら崩しても積む

事が出来る。突ついた炭団は壊れたぎり、丸い元の姿には帰らぬ。細君はこの理を心得ているだろうか。しきりに突ついている。

今から考えて見ると嫁に來た時の覚悟が間違つてゐる。自分が嫁に來たのは自分のために來たのである。夫のためと云う考はすこしも持たなかつた。吾が身が幸福になりたいたばかりに祝言の盃もした。父、母もそのつもりで高砂を聴いていたに違ない。思う事はみんなはずれた。この頃の模様を父、母に話したら定めし道也はけしからぬと怒るであらう。自分も腹の中では怒つてゐる。

道也は夫の世話をするのが女房の役だと済ましてゐるらしい。それはこつちで云いたい事である。女は弱いもの、年の足らぬもの、したがつて夫の世話を受くべきものである。夫を世話する以上に、夫から世話されるべきものである。だから夫に自分の云う通りになれと云う。夫はけつして聞き入れた事がない。家庭の生涯はむしろ女房の生涯である。道也は夫の生涯と心得てゐるらしい。それだから治まらない。世間の夫は皆道也のようなものかしらん。みんな道也のようだとすれば、この先結婚をする女はだんだん減るだろう。減らないと見るとほかの旦那様は旦那様らしくしてゐるに違ない。広い世界に自分一人がこんな思をしてゐるかと思がつくと生涯の不幸である。どうせ嫁に來たからは出

る訳には行かぬ。しかし連れ添う夫がこんなでは、臨終まで本当の妻と云う心持ちが起らぬ。これはどうかせねばならぬ。どうにかして夫を自分の考え通りの夫にしないで生きている甲斐がない。——細君はこう思案しながら、火鉢をいじくっている。風が枯芭蕉を吹き倒すほど鳴る。

表に案内がある。寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の兄が立っている。細君は「おや」と云った。

道也の兄は会社の役員である。その会社の社長は中野君のおやじである。長い二重廻しを玄関へ脱いで座敷へ這入ってくる。

「だいぶ吹きますね」と薄い更紗の上へ坐つて抜け上がった額を逆に撫でる。

「御寒いのによく」

「ええ、今日は社の方が早く引けたものだから……」

「今御帰り掛けですか」

「いえ、いったんうちへ帰つてね。それから出直して来ました。どうも洋服だと坐つてるのが窮屈で……」

兄は糸織の小袖に鉄御納戸の博多の羽織を着ている。

「今日は——留守ですか」

「はあ、たった今しがた出ました。おつつけ帰りましょう。どうぞ御緩くり」と例の火鉢を出す。

「もう御構なさるな。——どうもなかなか寒い」と手を翳す。

「だんだん押し詰りましてさぞ御忙がしゅう、いらっしやいましょう」

「へ、ありがとうございます。毎年暮になると大頭痛、ハハハハ」と笑った。世の中の人はおかしい時ばかり笑うものではない。

「でも御忙がしいのは結構で……」

「え、まあ、どうか、こうかやつてるんです。——時に道也はやはり不相変ですか」

「ありがとうございます。この方はただ忙がしいばかりで……」

「結構でないかね。ハハハハ。どうも困った男ですねえ、御政さん。あれほど訳がわからないとまでは思わなかつたが」

「どうも御心配ばかり懸けまして、私もいろいろ申しますが、女の云う事だと思つてちつとも取り上げませんので、まことに困り切ります」

「そうでしょう、私の云う事だつて聞かないんだから。——わたしも傍にいとつい気に

なるから、ついとやかく云いたくなつてね」

「ごもつともでございませとも。みんな当人のためにおつしやつて下さる事ですから……」

「田舎いなかにいりや、それまでですが、こつちにこうしていると、当人の気にいっても、いら

なくつても、やつぱり兄の義務でね。つい云いたくなるんです。——するとちつとも寄りつかない。全く変人だね。おとなしくして教師をしていりやそれまでの事を、どこへ行つても衝突して……」

「あれが全く心配で、私もあのためには、どんなに苦勞したか分りません」

「そうでしょうとも。わたしも、そりやよく御察し申しているんです」

「ありがとうございます。いろいろ御厄介ごやっかいにばかりなりまして」

「東京へ来てからでも、こんなくだらん事をしないでも、どうにでも成るんでさあ。それをせっかく云つてやると、まるで取り合わない。取り合わないでもいいから、自分だけ立派にやつて行けばいい」

「それを私も申すのでござんすけれども」

「いざとなると、やつぱりどうかしてくれと云うんでしょう」

「まことに御気の毒さまで……」

「いえ、あなたに何も云うつもりはない。当人がさ。まるで無鉄砲ですからね。大学を卒業して七八年にもなつて筆耕ひつこうの真似まねをしているものが、どこの国にいるものですか。あれの友達の足立なんて人は大学の先生になつて立派りっぺいになっているじゃありませんか」

「自分だけはあれでなかなかえらいつもりでおりますから」

「ハハハハえらいつもりだつて。いくら一人でえらがつたつて、人が相手にしなくつちやしようがない」

「近頃は少しかしているんじゃないかと思ひます」

「何とも云えませんね。——何でもしきりに金持やなにかを攻撃するそうじやありませんか。馬鹿ですなえ。そんな事をしたつてどこが面白い。一文にやならず、人からは擯斥ひんせきされる。つまり自分の錆さびになるばかりでさあ」

「少しは人の云う事でも聞いてくれるといひんですけれども」

「しまいにや人にまで迷惑をかける。——実はね、きよう社でもつて赤面しちまつたんですがね。課長が私わたしを呼んで聞けば君の弟だそうだが、あの白井道也とか云う男は無暗むやみに不穩な言論をして富豪などを攻撃する。よくない事だ。ちつと君から注意したらよかろうつて、さんざん叱られたんです」

「まあどうも。どうしてそんな事が知れましたんでしよう」

「そりゃ、会社なんてものは、それぞれ探偵が届きますからね」

「へえ」

「なに道也なんぞが、何をかいたつて、あんな地位のないものに世間が取り合う氣遣はないが、課長からそう云われて見ると、放つて置けませんからね」

「ごもつともで」

「それで実は今日は相談に来たんですがね」

「生憎出まして」

「なに当人はいない方がかえつていい。あなたと相談さえすればいい。——で、わたしも今途中でだんだん考えて来たんだが、どうしたものでしょう」

「あなたから、とくと異見いけんでもしていただいて、また教師にでも奉職したら、どんなものでございましょう」

「そうなればいいですとも。あなたも仕合せだし、わたしも安心だ。——しかし異見いけんでおいそれと、云う通りになる男じゃありませんよ」

「そうでござんすね。あの様子じゃ、とても駄目でございましょうか」

「わたしの鑑定じゃ、とうてい駄目だ。——それでここに一つの策があるんだが、どうでしょう当人の方から雑誌や新聞をやめて、教師になりたいと云う気を起させるようにするのは」

「そうなれば私は実ありがたいのですが、どうしたら、そう旨い具合に参りましょう」

「あのこの間あいだじゅう 中 当人がしきりに書いていた本はどうなりました」

「まだそのままになっております」

「まだ売れないですか」

「売れるどころじゃございません。どの本屋もみんな断わりますそうで」

「そう。それが売れなけりやかえって結構だ」

「え？」

「売れない方がいいんですよ。——で、せんだってわたしが周旋した百円の期限はもうじきでしょう」

「たしかこの月の十五日だと思えます」

「今日が十一日だから。十二、十三、十四、十五、ともう四日よっかですね」

「ええ」

「あの方を手厳しく催促させるのです。——実はあなただから、今打ち明けて御話しますが、あれは、わたしが印を押している体にはなっているが本当はわたしが融通したのです。——そうしないと当人が安心していけないから。——それであの方を今云う通り責める——何かほかに工面の出来る所がありますか」

「いいえ、ちつともございません」

「じゃ大丈夫、その方でだんだん責めて行く。——いえ、わたしは黙って見ている。証文の上の貸手が催促に来るのです。あなたも済していなくっちゃいけません。——何を云つても冷淡に済ましていなくっちゃいけません。けっしてこちらから、一言も云わないので。——それで当人いくら頑固だつて苦しいから、また、わたしの方へ頭を下げに来る。いえ来なけりやならないです。その、頭を下げて来た時に、取つて抑えるのです。いいですか。そうたよつて来るなら、おれの云う事を聞くがいい。聞かなければおれは構わんと云いやあ、向でも否とは云われんです。そこでわたしが、御政さんだつて、あんなに苦労してやっている。雑誌なんかで法螺ばかり吹き立てていたつて始まらない、これから性根を入れかえて、もつと着実な世間に害のないような職業をやれ、教師になる気なら心当りを奔走してやろう、と持ち懸けるのですね。——そうすればきつと我々の思わく通

りになると思うが、どうでしょう」

「そうなれば私はどんなに安心が出来るか知れませんが」

「やつて見ましようか」

「何分宜しく願います」

「じゃ、それはきまつたと。そこでもう一つあるんですがね。今日社の帰りがけに、神田を通つたら清輝館せいきかんの前に、大きな広告があつて、わたしは吃驚びつくりさせられましたよ」

「何の広告でござんす」

「演説の広告なんです。——演説の広告がいいが道也が演説をやるんですぜ」

「へえ、ちつとも存じませんでした」

「それで題が大きいから面白い、現代の青年に告ぐと云うんです。まあ何の事やら、あんなものの云う事を聞きにくる青年もなさそうじゃありませんか。しかし剣呑けんおんですよ。やけになつて何を云うか分らないから。わたしも課長から忠告された矢先だから、すぐ社へ電話をかけて置いたから、まあ好いですが、何なら、やらせたくないものですね」

「何の演説をやるつもりでござんしょう。そんな事をやるとまた人ひとさま様に御迷惑がかりましようね」

「どうせまた過激な事でも云うのですよ。無事に済めばいいが、つまらない事を云おうものなら取って返しがつかないからね。——どうしてもやめさせなくっちゃ、いけないね」

「どうしたらやめるでござんしょう」

「これもよせつたつて、頑固がんこだから、よす氣遣きづかいはない。やっぱり欺だますより仕方がないでしよう」

「どうして欺だましたらいいでしょう」

「そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢あいたいからつて使をよこして見ましようか」

「そうでござんすね。それで、あなたの方へ参るようだと宜よろしゆうございますが……」

「聞かないかも知れませんか。聞かなければそれまでさ」

初冬はつふゆの日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰ってくる。

十一

今日もまた風が吹く。汁氣しるけのあるものをことごとく乾から鮭さけにするつもりで吹く。

「御兄おにいさんの所から御使です」と細君が封書を出す。道也は坐ったまま、体たいをそらして

受け取った。

「待つてるかい」

「ええ」

道也は封を切つて手紙を読み下す。やがて、終りから巻き返して、再び状袋のなかへ収めた。何にも云わない。

「何か急用でもござんすか」

道也は「うん」と云いながら、墨を磨すつて、何かさらさらと返事を認したためている。

「何の御用ですか」

「ええ？　ちよつと待った。書いてしまうから」

返事はわずか五六行である。宛名あてなをかいて、「これを」と出す。細君は下女を呼んで渡してやる。自分は動かかない。

「何の御用なんですか」

「何の用かわからない。ただ、用があるから、すぐ来てくれとかいてある」

「いらつしやるでしょう」

「おれは行かれない。なんならお前行つて見てくれ」

「私が？ 私は駄目ですわ」

「なぜ」

「だって女ですもの」

「女でも行かないよりいいだろう」

「だって。あなたに來いと書いてあるんでしよう」

「おれは行かれないもの」

「どうして？」

「これから出掛けなくっちゃならん」

「雑誌の方なら、一日ぐらい御休みになつてもいいでしょう」

「編へん輯しゅう ならいいが、今日は演説をやらなくっちゃならん」

「演説を？ あなたがですか？」

「そうよ、おれがやるのさ。そんなに驚ろく事はなからう」

「こんなに風が吹くのに、よしになさればいいのに」

「ハハハハ風が吹いてやめるような演説なら始めからやりやしなない」

「ですけれども滅めった多たな事はなさらない方がよござんすよ」

「滅多な事とは。何がさ」

「いいえね。あんまり演説なんかなさらない方が、あなたの得だとくと云うんです」

「なに得な事があるものか」

「あとが困るかも知れないと申すのです」

「妙な事を云うね御前は。——演説をしちやいけないと誰か云ったのかね」

「誰がそんな事を云うものですか。——云いやしません、御おあにい兄さんからこうやって、

急用だつて、御使が来ているんですから行って上げなくつては義理がわるいじゃありませんか」

「それじゃ演説をやめなくつちやならない」

「急に差さしつかえ支つかえが出来たつて断わつたらいいでしょう」

「今さらそんな不義理が出来るものか」

「では御兄さんの方へは不義理をなすつても、いいとおっしゃるんですか」

「いいとは云わない。しかし演説会の方は前からの約束で——それに今日の演説はただの演説ではない。人を救うための演説だよ」

「人を救うつて、誰を救うのです」

「社のもので、この間の電車事件を煽動したと云う嫌疑で引つ張られたものがある。――ところがその家族が非常な惨状に陥つて見るに忍びないから、演説会をしてその収入をそちらへ廻してやる計画なんだよ」

「そんな人の家族を救うのは結構な事に相違ないでしょうが、社会主義だなんて間違えられるとあとが困りますから……」

「間違えたって構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか、ただ正しい道がいいのさ」
「だって、もしあなたが、その人のようになったとして御覧なさい。私はやっぱり、その人の奥さん同様な、ひどい目に逢わなけりやならないでしょう。人を御救いなさるのも結構ですが、ちつとは私の事も考えて、やって下さらなくっちゃ、あんまりですわ」

道也先生はしばらく沈吟していたが、やがて、机の前を立ちながら「そんな事はないよ。そんな馬鹿な事はないよ。徳川政府の時代じゃあるまいし」と云った。

例の袴を突っかけると支度は一分たたぬうちに出来上った。玄関へ出る。外はいまだに強く吹いている。道也先生の姿は風の中に消えた。

清輝館の演説会はこの風の中に開かれる。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。その中に文学士高柳周作がい

る。彼はこの風の中を襟えりまき巻に顔を包んで咳せきをしながらやって来た。十銭の入場料を払つて、二階に上あがつた時は、広い会場はまばらに席をあましてむしろ寂せき寞ぼくの感があつた。彼は南側のなるべく暖かそうな所に席をとつた。演説はすでに始まつている。

「……文士保護は独立しがたき文士の言う事である。保護とは貴族的時代に云うべき言葉で、個人平等の世にこれを云うんぬん々するのは恥辱きよくの極である。退いて保護を受くるより進んで自己に適當なる租税を天下から払わしむべきである」と云つたと思つたら、引き込んだ。聴衆は喝かつさい采する。隣りに薩摩さつまがすり緋の羽織を着た書生がいて話している。

「今のが、黒田東陽か」

「うん」

「妙な顔だな。もつと話せる顔かと思つた」

「保護を受けたら、もう少し顔らしくなるだろう」

高柳君は二人を見た。二人も高柳君を見た。

「おい」

「何だ」

「いやに睨にらめるじゃねえか」

「おつかねえ」

「こんだ誰の番だ。——見ろ見ろ出て来た」

「いやに、ひよろ長いな。この風にどうして出て来たろう」

ひよろながい道也先生は綿服めんぷくのまま壇上だんじょうにあらわれた。かれはこの風の中なかを金釘かなくぎのごとく直立して来たのである。から風に吹き曝さらされたる彼は、からからの古瓢箪ふるびょうたんのごとくに見える。聴衆は一度に手をたたく。手をたたくのは必ずしも喝采かくさいの意と解すべからざる場合がある。独り高柳君ひとたかやなぎのみは肅然しゆくぜんとして襟えりを正した。

「自己は過去と未来の連鎖れんさである」

道也先生の冒頭ぼうとうは突如として来た。聴衆はちよつと不意撃ふいうちを食った。こんな演説えんせつの始め方はない。

「過去を未来に送り込むものを旧派きゅうはいと云い、未来を過去より救うものを新派しんはいと云うのであります」

聴衆はいよいよ惑まじつた。三百の聴衆のうちには、道也先生をひやかす目的てきをもつて入場にゅうじやうしているものがある。彼らに一寸すんの隙すきでも与えれば道也先生は壇上だんじょうに嘲殺ちやうさつされねばならぬ。角力すもうは呼吸こきゅうである。呼吸を計らんでひやかせばかえって自分が放り出ほうされるばかり

である。彼らは蛇のごとく鎌首かまくびを持ち上げて待構えている。道也先生の眼中には道の一字がある。

「自己のうちに過去なしと云うものは、われに父母なしと云うがごとく、自己のうちに未来なしと云うものは、われに子を生む能力なしというところと一般である。わが立脚地はここにおいて明瞭めいりょうである。われは父母ふぼのために存在するか、われは子のために存在するか、あるいはわれそのものを樹立せんがために存在するか、吾人生存ごじんの意義はこの三者の一を離るる事が出来るのである」

聴衆は依然として、だまつている。あるいは煙けむに捲まかれたのかも知れない。高柳君はなるほどと聴いている。

「文芸復興は大なる意味だいにおいて父母のために存在したる大時期である。十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味において父母のために存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫派ろうまんぱを生まんがために存在した時期である。すなわち子孫のために存在したる時期である。自己を樹立せんがために存在したる時期の好例はエリザベス朝の文学である。個人について云えばイブセンである。メレジスである。ニイチエである。ブラウニングである。耶蘇教徒ヤソキョウトは基督キリストのために存在している。基督は古えいにしの人である。だから耶

蘇教徒は父のために存在している。儒者じゆしやは孔子こうしのために生きています。孔子も昔いにしえの人である。だから儒者は父のために生きています。……」

「もうわかった」と叫ぶものがある。

「なかなかわかりません」と道也先生が云う。聴衆はどつと笑った。

「あわせ ひとえもの 袷あわせ 単衣ひとえもの のために存在するですか、綿入のために存在するですか。または袷自身のために存在するですか」と云つて、一応聴衆を見廻した。笑うにはあまり、奇警である。慎つしむにはあまり飄ひようきんである。聴衆は迷うた。

「六むずかしい問題じゃ、わたしにもわからん」と済ました顔で云つてしまう。聴衆はまた笑った。

「それはわからんでも差さ支しない。しかし吾われわれ々われは何のために存在しているか？ これは知らなくてはならん。明治は四十年立った。四十年は短かくはない。明治の事業はこれで一段落を告げた……」

「ノー、ノー」と云うものがある。

「どこかでノー、ノーと云う声がある。わたしはその人に賛成である。そう云う人があるだろうと思うて待っていたのである」

聴衆はまた笑った。

「いや本当に待つていたのである」

聴衆は三たび関ときを揚あげた。

「私わたしは四十年の歳月を短かくはないと申した。なるほど住んで見れば長い。しかし明治以外の人から見たらやはり長いだろうか。望遠鏡の眼鏡めがねは一寸の直径である。しかし愛宕あたごや山まから見ると品川の沖がこの一寸のなかに這入はいつてしまう。明治の四十年を長いと云うものは明治のなかに齷齪あくせくしているもの云う事である。後世から見ればずっと縮まつてしまう。ずっと遠くから見ると一弾指いちだんしの間に過ぎん。——一弾指の間に何が出来る」と道也はテーブルの上をとんと敲たたいた。聴衆はちよつと驚ろいた。

「政治家は一大事業をしたつもりでいる。学者も一大事業をしたつもりでいる。実業家も軍人もみんな一大事業をしたつもりでいる。したつもりでいるがそれは自分のつもりである。明治四十年の天地に首を突き込んでゐるから、したつもりになるのである。——一弾指の間に何が出来る」

今度は誰も笑わなかつた。

「世の中の人は云うている。明治も四十年になる、まだ沙翁さおうが出ない、まだゲートルゲートルが出な

い。四十年を長いと思えばこそ、そんな愚痴ぐちが出る。一弾指の間に何が出る」

「もうでるぞ」と叫んだものがある。

「もうでるかも知れん。しかし今までに出ておらん事は確かである。——一言にして云えば」と句を切った。満場はしんとしている。

「明治四十年の日じつげつ月は、明治開化の初期である。さらに語ごを換かえてこれを説明すれば今日の吾人ごじんは過去を有もたぬ開化のうちに生息している。したがって吾人は過去を伝うべきために生れたのではない。——時は昼ちゆうや夜を舍すてず流れる。過去の無い時代はない。——諸君誤解してはなりません。吾人は無論過去を有している。しかしその過去は老耄ろうもうした過去か、幼稚な過去である。則のつとるに足るべき過去は何にもない。明治の四十年は先例のない四十年である」

聴衆のうちにそうかなあと云う顔をしている者がある。

「先例のない社会に生れたものほど自由なものはない。余は諸君がこの先例のない社会に生れたのを深く賀するものである」

「ひや、ひや」と云う声こゑが所々しよしよに起る。

「そう早合点はやがてんに賛成されては困る。先例のない社会に生れたものは、自から先例を作ら

ねばならぬ。束縛のない自由を享けるものは、すでに自由のために束縛されている。この自由をいかに使いこなすかは諸君の権利であると同時に大なる責任である。諸君。偉大なる理想を有せざる人の自由は墮落であります」

言い切つた道也先生は、両手を机の上に置いて満場を見廻した。雷が落ちたような気合である。

「個人について論じてもわかる。過去を顧みる人は半白の老人である。少壮の人に顧みるべき過去はないはずである。前途に大なる希望を抱くものは過去を顧みて恋々たる必要がないのである。——吾人が今日生きている時代は少壮の時代である。過去を顧みるほどに古い込んだ時代ではない。政治に伊藤侯や山県侯を顧みる時代ではない。実業に渋沢男や岩崎男を顧みる時代ではない。……」

「大氣」と評したのは高柳君の隣りにいた薩摩拵である。高柳君はむつとした。

「文学に紅葉氏一葉氏を顧みる時代ではない。これらの人々は諸君の先例になるがために生きたのではない。諸君を生むために生きたのである。最前の言葉を用いればこれらの人々は未来のために生きたのである。子のために存在したのである。しかして諸君は自己のために存在するのである。——およそ一時代にあつて初期の人は子のために生きる覚悟

をせねばならぬ。中期の人は自己のために生きる決心が出来ねばならぬ。後期の人は父のために生きるあきらめをつけなければならぬ。明治は四十年立った。まず初期と見て差さ支かえなからう。すると現代の青年たる諸君は大に自己を發展して中期をかたちづくらねばならぬ。後ろを顧みる必要なく、前を氣遣きづかう必要もなく、ただ自我を思おものままに發展し得る地位に立つ諸君は、人生の最大愉快を極きわむるものである」

満場は何となくどよめき渡つた。

「なぜ初期のものが先例にならん？ 初期はもつとも不秩序の時代である。偶然の跋扈ばつこする時代である。僥ぎよう倖こうの勢いきおいを得る時代である。初期の時代において名を揚げたるもの、家を起したるもの、財を積みたるもの、事業をなしたるものは必ずしも自己の力量に由よつて成功したとは云われぬ。自己の力量によらずして成功するは士のもつとも恥辱とするところである。中期のものはこの点において遥はるかに初期の人々よりも幸福である。事を成すのが困難であるから幸福である。困難にもかかわらず僥倖が少ないから幸福である。困難にもかかわらず力量しだいで思うところへ行けるほどの余裕があり、發展の道があるから幸福である。後期に至るとかたまってしまふ。ただ前代を祖そ述じゆつするよりほかに身動きがとれぬ。身動きがとれなくなつて、人間が腐つた時、また波瀾はらんが起る。起らねば化石する

よりほかにしようがない。化石するのがいやだから、自^{みず}から波瀾を起すのである。これを革命と云うのである。

「以上は明治の天下にあつて諸君の地位を説明したのである。かかる愉快な地位に立つ諸君はこの愉快に相当する理想を養わねばならん」

道也先生はここにおいて一^{いってんご}転語を下した。聴衆は別にひやかす気もなくなったと見える。黙っている。

「理想は魂である。魂は形がないからわからない。ただ人の魂の、行為に発現するところを見て髻^{ほうふつ}髻するに過ぎん。惜しいかな現代の青年はこれを髻髻することが出来ん。これを過去に求めてもない、これを現代に求めてはなおさらない。諸君は家庭に在^あつて父母を理想とする事が出来ますか」

あるものは不平な顔をした。しかしだまつている。

「学校に在つて教師を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「社会に在つて紳士を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「事実上諸君は理想をもつておらん。家に在つては父母を軽蔑し、学校に在つては教師を軽蔑し、社会に出でては紳士を軽蔑している。これらを軽蔑し得るのは見識である。しかしこれらを軽蔑し得るためには自己により大なる理想がなくてはならん。自己に何らの理想なくして他を軽蔑するのは墮落である。現代の青年は滔々として日に墮落しつつある」

聴衆は少しく色めいた。「失敬な」とつぶやくものがある。道也先生は昂然として壇下を睥睨している。

「英国風を鼓吹して憚からぬものがある。気の毒な事である。己れに理想のないのを明かに暴露している。日本の青年は滔々として墮落するにもかかわらず、いまだここまでは墮落せんと思う。すべての理想は自己の魂である。うちより出ねばならぬ。奴隷の頭脳に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隷である。奴隷をもつて甘んずるのみならず、争つて奴隷たらんとするものに何らの理想が脳裏に醗酵し得る道理があるう。

「諸君。理想は諸君の内部から湧き出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となりついに諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃は何にも

ならない」

道也先生はひやかされるなら、ひやかして見ろと云わぬばかりに片手の拳骨げんこつをテーブルの上に乗せて、立っている。汚ない黒木綿くろもめんの羽織はかまに、べんべらの袴はかまは最前さいぜんほどに目立たぬ。風の音がこうと鳴る。

「理想のあるものは歩くべき道を知っている。大なる理想のあるものは大なる道がある。迷子まいごとは違う。どうあつてもこの道があるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

「諸君のうちには、どこまで歩くつもりだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事である。行ける所まで行くのが人生である。誰しも自分の寿命を知ってるものはない。自分に知らない寿命は他人にはなおさらわからない。医者を家業にする専門家でも人間の寿命を勘定する訳には行かぬ。自分が何歳まで生きるかは、生きたあとで始めて言うべき事である。八十歳まで生きたと云う事は八十歳まで生きた事実が証拠立ててくれねばならん。たとい八十歳まで生きる自信があつて、その自信通りになる事が明瞭めいりょうであるにしても、現に生きたと云う事実がない以上は誰も信ずるものはない。したがって言うべきものでない。理想の黙示もくしを受けて行くべき道に行くのもその通りである。自己がどれほどに自己の理想

を現実にし得るかは自己自身にさえ計られん。過去がこうであるから、未来もこうであるうぞと臆測するおくそくのは、今まで生きていたから、これからも生きるだろうと速断するようなものである。一種の山である。成功を目的にして人生の街頭に立つものはすべて山師やましである」

高柳君の隣りにいた薩摩さつまは妙な顔をした。

「社会は修羅場しゆらじやうである。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。四十年前の志士は生死の間に出入あいでしゅつにゅうして維新の大業を成就した。諸君の冒すおかべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。血を見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨である。諸君は覚悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覚悟をせねばならぬ。斃たおる覚悟をせねばならぬ。太平の天地だと安心して、拱手きやうしゅして成功を冀こいねがう輩は、行くべき道に躓つまずいて非業ごうに死したる失敗の児こよりも、人間の価値は遥かに乏しいのである。

「諸君は道を行かんがために、道を遮さへぎるものを追わねばならん。彼らと戦うときに始めて、わが生涯しやうがの内生命ないせいめいに、勤王の諸士があえてしたる以上の煩悶はんもんと辛惨しんさんを見出し得るのである。——今日は風が吹く。昨日も風が吹いた。この頃の天候は不穏である。しかし胸裏きょうりの不穏はこんなものではない」

道也先生は、がたつく硝子窓ガラスまどを通して、往来の方を見た。折から一陣の風が、会釈えしやくなく往来の砂を捲まき上げて、屋やの棟むねに突き当つて、虚空こくうを高く逃のがれて行つた。

「諸君。諸君のどれほどに剛健なるかは、わたしには分らん。諸君自身にも知れぬ。ただ天下後世が証拠だてるのみである。理想の大たい道どうを行き尽して、途上に斃せつなる刹那せつなに、わが過去を一いち瞥べつのうちへつに縮め得て始めて合点がてんが行ゆくのである。諸君は諸君の事業そのものに由よつて伝えられねばならぬ。単に諸君の名に由つて伝えられんとするは軽薄である」

高柳君は何となくきまりがわるかつた。道也の輝やく眼が自分の方に注そそいでいるように思おもわれる。

「理想は人によつて違う。吾々は学問をする。学問をするものの理想は何であろう」

聴衆は黙もく然ねんとして応ずるものがない。

「学問をするものの理想は何であろうとも——金でない事だけはたしかである」

五六カ所に笑声が起る。道也先生の裕ゆう福ふくならぬ事はその服装を見たものの心から取り除のけられぬ事実である。道也先生は羽織のゆきを左右の手に引つ張りながら、まず徐おもろにわが右の袖そでを見た。次に眼を転じてまた徐ろにわが左の袖を見た。黒木綿くろもめんの織目のなかに砂がいつぱいたまっている。

「随分きたない」と落ちつき払って云った。

笑声しょうせいが満場に起る。これはひやかしの笑声ではない。道也先生はひやかしの笑声を好意の笑声で揉み潰つぶしたのである。

「せんだつて学問を専門にする人が来て、私も妻わたしさいをもろうて子が出来た。これから金を溜ためねばならぬ。是非共子供に立派な教育をさせるだけは今のうちに貯蓄して置かねばならぬ。しかしどうしたら貯蓄が出来るとしようかと聞いた。

「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿氣た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。学問をして金をとる工夫くふうを考えるのは北極へ行つて虎狩をするようなものである」

満場はまたちよつとどよめいた。

「一般の世人は労力と金の関係について大なる誤謬ごびゆうを有している。彼らは相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるものだと思ふ。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商賈人になるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であつて、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚てっちに住み込むようなものである」

「そうかなあ」と突飛とつびな声を出す奴やつがいる。聴衆はどつと笑った。道也先生は平然として笑わらいのしずまるのを待っている。

「だから学問のことは学者に聞かなければならん。金が欲しければ町人の所へ持つて行くよりほかに致し方はない」

「金が欲しい」とまぜかえす奴が出る。誰だかわからない。道也先生は「欲しいでしょう」と云つたぎり進行する。

「学問すなわち物の理がわかると云う事と生活の自由すなわち金があると云う事とは独立して関係のないのみならず、かえつて反対のものである。学者であればこそ金がないのである。金を取るから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟りくつがわからないから、その代りに金を儲もつける」

何か云うだろうと思つて道也先生は二十秒ほど絶句して待っている。誰も何も云わない。「それを心得んで金のある所には理窟りくつもあると考えているのは愚ぐの極きよくである。しかも世間一般はそう誤認している。あの人は金持ちで世間が尊敬しているからして理窟りくつもわかつているに違ない、カルチュアーもあるにきまつていると——こう考える。ところがその実はカルチュアーを受ける暇がなければこそ金をもうける時間が出来たのである。自然は公平

なもので一人の男に金ももうけさせる、同時にカルチュアーも授けると云うほど鼻屑には
 せんのである。この見やすき道理も弁ぜずして、かの金持ち共は己惚れて……」

「ひや、ひや」「焼くな」「しっ、しっ」だいぶ賑やかなになる。

「自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど理窟
 に通じたものはない。学者だろうが、何だろうがおれに頭をさげねばならんと思うのは憫
 んぜん 然のしだいで、彼らがこんな考を起す事自身がカルチュアーのないと云う事実を証明し
 ている」

高柳君の眼は輝やいた。血が双頬に上ってくる。

「訳のわからぬ彼らが己惚はとうてい濟度すべからざる事とするも、天下社会から、彼ら
 の己惚をもつともだとは認するに至つては愛想の尽きた不見識と云わねばならぬ。よく云
 う事だが、あの男もあのくらいな社会上の地位にあつて相応の財産も所有している事だか
 ら万更そんな訳のわからない事もなからう。豈計らんやある場合には、そんな社会上の
 地位を得て相当の財産を有しておればこそ訳がわからないのである」

高柳君は胸の苦しみを忘れて、ひやひやと手を打った。隣の薩摩緋はえへんと嘲弄
 的 な 咳 払 を する。

「社会上の地位は何でできまると云えば——いろいろある。第一カルチュアでできまる場合もある。第二門閥もんぼつでできまる場合もある。第三には芸能でできまる場合もある。最後に金でできまる場合もある。しかしてこれはもつとも多い。かようにいろいろの標準があるのを混同して、金で相場がきまった男を学問で相場がきまった男と相互に通用し得るように考えている。ほとんど盲目めくら同然である」

エヘン、エヘンと云う声が散らばつて五六カ所に起る。高柳君は口を結んで、鼻から呼吸きをはずませている。

「金で相場のきまった男は金以外に融通は利きかぬはずである。金はある意味において貴重かも知れぬ。彼らはこの貴重なものを擁ようしているから世の尊敬はばを受ける。よろしい。そこまでは誰も異存はない。しかし金以外の領分において彼らは幅はばを利かし得る人間ではない、金以外の標準をもつて社会上の地位を得る人の仲間入は出来ない。もしそれが出来ると云えば学者も金持ちの領分へ乗り込んで金銭本位の区域内で威張つても好いい訳になる。彼らはそうはさせぬ。しかし自分だけは自分の領分内におとなしくしている事を忘れて他の領分までのさばり出ようとする。それが物のわからない、好い証拠である」

高柳君は腰を半分浮かして拍手をした。人間は真似まねが好すきである。高柳君に誘い出されて、

ばちばちの声が四方に起る。冷笑党は勢の不可なるを知つて黙した。

「金は労力の報酬である。だから労力を余計にすれば金は余計にとれる。ここまでは世間も公平である。(否)これすらも不公平な事がある。相場師などは労力なしに金を攫んでい(る)しかし一歩進めて考えて見るが好い。高等な労力に高等な報酬が伴うであろうか——諸君どう思います——返事がなければ説明しなければならん。報酬なるものは眼前の利害にもつとも影響の多い事情だけできめられるのである。だから今の世でも教師の報酬は小商人の報酬よりも少ないのである。眼前以上の遠い所高い所に労力を費やすものは、いかに将来のためになろうとも、国家のためになろうとも、人類のためになろうとも報酬はいよいよ減ずるのである。だによつて労力の高下では報酬の多寡はきまらない。金銭の分配は支配されておらん。したがつて金のあるものが高尚な労力をしたとは限らない。換言すれば金があるから人間が高尚だとは云えない。金を目安にして人物の価値をきめる訳には行かない」

滔々として述べて来た道也はちよつとここで切つて、満場の形勢を觀望した。活版に押した演説は生命がない。道也は相手しないで、どうとも変わるつもりである。満場は思つたより静かである。

「それを金があるからと云うてむやみにえらがるのは間違っている。学者と喧嘩する資格があると思つてるのも間違っている。気品のある人々に頭を下げさせるつもりでいるのも間違っている。——少しは考えても見るがいい。いくら金があつても病氣の時は医者に降参しなければなるまい。金貨を煎じて飲む訳には行かない……」

あまり熱心な滑稽なので、思わず嘔き出したものが三四人ある。道也先生は気がついた。

「そうでしょう——金貨を煎じたつて下痢はとまらないでしょう。——だから御医者に頭を下げる。その代り御医者は——金に頭を下げる」

道也先生はにやにやと笑つた。聴衆もおとなしく笑う。

「それで好いのです。金に頭を下げて結構です——しかし金持はいけない。医者に頭を下げる事を知つてながら、趣味とか、嗜好とか、気品とか人品とか云う事に関して、学問のある、高尚な理窟のわかつた人に頭を下げることを知らん。のみならずかえつて金の力で、それらの頭をさげさせようとする。——盲目蛇に怖じずとはよく云つたものですねえ」

と急に会話調になつたのは曲折があつた。

「学問のある人、訳のわかつた人は金持が金の力で世間に利益を与うると同様の意味にお

いて、学問をもつて、わけの分つたところをもつて社会に幸福を与えるのである。だからして立場こそ違え、彼らはどうていおか冒し得べからざる地位に確たる尻しりを据すえているのである。

「学者がもし金銭問題にかかれば、自己の本領を棄すてて他の繩張内なわばりうちに這入はいるのだから、金持ちに頭を下げるが順当であろう。同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に關しては金持ちの方が学者に恐れ入つて来なければならん。今、学者と金持の間に葛藤かっとうが起るとする。単に金銭問題ならば学者は初手しよてから無能力である。しかしそれが人生問題であり、道徳問題であり、社会問題である以上は彼ら金持は最初から口を開くけんのう権能のないものと覚悟をして絶対的に学者の前に服従しなければならん。岩崎は別荘を立て連つねる事において天下の学者を圧倒しているかも知れんが、社会、人生の問題に關しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者を凹へこましたと思うのは凌雲閣りよううんかくを作つたから仙人せんじん人が恐れ入つたらうと考えるようなものだ……」

聴衆は道也いぎおいの勢と最後の一句の奇警なのに氣を奪われて黙っている。独り高柳君がたまらなかつたと見えて大きな声を出して喝采かつさいした。

「商人が金を儲もつけるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙ようかいが出来ぬ。しかし商買上

に使わないで人事上にその力を利用するときは、訳のわかった人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪を自ら醸造して平気でいる事がある。今の金持の金のある一部分は常にこの目的に向つて使用されている。それと云うのも彼ら自身が金の主であるだけで、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。いくら教えても人の云う事が理解出来んからである。災は必ず己れに帰る。彼らは是非共学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保てぬ時期がくる」

聴衆は一度にどつと鬨を揚げた。高柳君は肺病にもかかわらずもつとも大なる鬨を揚げた。生れてから始めてこんな痛快な感じを得た。襟巻に半分顔を包んでから風のなかをここまで来た甲斐はあると思う。

道也先生は予言者のごとく凜として壇上に立っている。吹きまくる木枯は屋を撼かして去る。

十二

「ちつとは、好い方かね」と枕元へ坐る。

六畳の座敷は、畳がほけて、とんと打つたら夜でも埃ほこりが見えそうだ。宮島産の丸盆くすりびんに薬瓶けりびんと驗温器けんおんきがいつしよに乗っている。高柳君は演説を聞いて帰ってから、とうとう喀血かっけつしてしまった。

「今日はだいいい」と床の上に起き返つて後から搔か卷まきを背せの半分までかけている。

中野君は 大島 紬おおしまつむぎの袂たもとから魯西亞皮ロシアがわの卷まきた蓆たばこ入いれを出しかけたが、

「うん、煙草たばこを飲んじや、わるかつたね」とまた袂たもとのなかへ落す。

「なに構わない。どうせ煙草ぐらいで癒なやりやしないんだから」と懨然ぶぜんとしている。

「そうでないよ。初はじめが肝かん心しんだ。今のうち養生やうじやうしないといけない。昨日きのう医者へ行つて聞い

て見たが、なに心配するほどの事もない。来たかい医者いしやは」

「今朝あした来た。暖あつたかにしていると云つた」

「うん。暖あつたかにしているがいい。この室へやは少し寒いねえ」と中野君は佻わびし氣げに四方あたりを見廻みまわ

した。

「あの障しょう子じなんか、宿の下女しよめにでも張はらしたらよかろう。風かぜが這はい入いつて寒ふいだろう」

「障しょう子じだけ張はつたつて……」

「転てん地ちでもしたらどうだい」

「医者もそう云うんだが」

「それじゃ、行くがいい。今朝そう云ったのかね」

「うん」

「それから君は何と答えた」

「何と答えるつたつて、別に答えようもないから……」

「行けばいいじゃないか」

「行けばいいだろうが、ただはいかれない」

高柳君は元氣のない顔をして、自分の膝頭へ眼を落した。瓦斯双子の端から鼠色のフラネルが二寸ばかり食み出している。寸法も取らず別々に仕立てたものだろう。

「それは心配する事はない。僕がどうかする」

高柳君は潤のない眼を膝から移して、中野君の幸福な顔を見た。この顔しだいで返答はきまる。

「僕がどうかするよ。何だつて、そんな眼をして見るんだ」

高柳君は自分の心が自分の両眼から、外を覗いていたのだなど急に気がついた。

「君に金を借りるのか」

「借りないでもいいさ……」

「貰うのか」

「どうでもいいさ。そんな事を気に掛ける必要はない」

「借りるのはいやだ」

「じゃ借りなくってもいいさ」

「しかし貰う訳には行かない」

「六^むずかしい男だね。何だつてそんなにやかましくいうのだい。学校にいる時分は、よく君の方から金を借せの、西洋料理を奢^{おご}れのとせびつたじゃないか」

「学校にいた時分は病気なんぞありやしなかつたよ」

「平^{ふだん}生ですら、そうなら病気の時はなおさらだ。病気の時に友達^{ともだち}が世話をするのは、誰から云つたつておかしくはないはずだ」

「そりや世話をする方から云えばそうだろう」

「じゃ君は何か僕に対して不平な事でもあるのかい」

「不平はないさありがたいと思つてるくらいだ」

「それじゃ心^{こころ}快^{よろ}く僕^{ぼく}の云う事を聞いてくれてもよからう。自分で不愉快の眼鏡を掛けて

世の中を見て、見られる僕らまでを不愉快にする必要はないじゃないか」

高柳君はしばらく返事をしない。なるほど自分は世の中を不愉快にするために生きてるのかも知れない。どこへ出ても好かれた事がない。どうせ死ぬのだから、なまじい人の情を恩に着るのはかえって心苦しい。世の中を不愉快にするくらいな人間ならば、中野一人を愉快にしてやったらって五十歩百歩だ。世の中を不愉快にするくらいな人間なら、また一日も早く死ぬ方がましである。

「君の親切を無むにしては気の毒だが僕は転地なんか、したくないんだから勘弁かんべんしてくれ」
 「またそんなわからずやを云う。こう云う病気は初期が大切だよ。時期を失しすと取り返しがつかないぜ」

「もう、とうに取り返しがつかないんだ」と山の上から飛び下りたような事を云う。

「それが病気だよ。病気のせいでそう悲観するんだ」

「悲観するって希望のないものは悲観するのは当り前だ。君は必要がないから悲観しないのだ」

「困った男だなあ」としばらく匙さじを投げて、すいと起たって障子をあける。例の梧桐ごとうが坊主ぼうずの枝を真直まっすぐに空に向って曝さらしている。

「淋^{さび}しい庭^{にわ}だなあ。桐^{きり}が裸^{はだか}で立^たっている」

「この間^ままで葉^はが着^きいてたんだが、早^{はや}いものだ。裸^{はだか}の桐^{きり}に月^{つき}がさすのを見^みた事^{こと}があるかい。凄^{すげ}い景色^{けしき}だ」

「そうだろう。——しかし寒^{ひや}いののに夜^よる起^おきるのはよくないぜ。僕^{ぼく}は冬^{ふゆ}の月^{つき}は嫌^{きら}いだ。月^{つき}は夏^{なつ}がいい。夏^{なつ}のいい月^{つき}夜^よに屋^や根^ね舟^{ふね}に乗^のって、隅^{すみ}田^{でん}川^{がわ}から綾^{あや}瀬^せの方^{かた}へ漕^こがして行^いって銀^{ぎん}扇^{せん}を水^{みづ}に流^{なが}して遊^{あそ}んだら面白^{おもしろ}いだろう」

「氣^き楽^{らく}云^いつてらあ。銀^{ぎん}扇^{せん}を流^{なが}すたどうするんだい」

「銀^{ぎん}泥^{でい}を置^おいた扇^{せん}を何^{なに}本^{ぽん}も舟^{ふね}へ乗^のせて、月^{つき}に向^{むか}って投^なげるのさ。きらきらして奇^{きれい}麗^{れい}だろ
う」

「君^{きみ}の発^{はつ}明^{めい}かい」

「昔^{むか}しの通^{つう}人^{じん}はそんな風^{ふう}流^{りゅう}をして遊^{あそ}んだそうだ」

「贅^{ぜい}沢^{たく}な奴^{やつ}らだ」

「君^{きみ}の机^{けい}の上^{うへ}に原^{げん}稿^{こう}があるね。やつぱり地^ち理^り学^{がく}教^{きょう}授^{じゆ}法^{ぽう}か」

「地^ち理^り学^{がく}教^{きょう}授^{じゆ}法^{ぽう}はやめたさ。病^{びやう}氣^きになつて、あんなつまらんものがやれるものか」

「じゃ何^{なに}だい」

「久しく書きかけて、それなりにして置いたものだ」

「あの小説か。君の一代の傑作か。いよいよ完成するつもりなのかい」

「病気になる、なおやりたくなる。今まではひまになつたらと思つていたが、もうそれまで待つちやいられない。死ぬ前には是非書き上げないと気が済まない」

「死ぬ前は過激な言葉だ。書くのは賛成だが、あまり凝こるとかえつて身体からだがわるくなる」

「わるくなつても書けりやいいが、書けないから残念でたまらない。昨夜ゆうべは続きを三十枚かいた夢を見た」

「よつほど書きたいのだと見えるね」

「書きたいさ。これでも書かなくつちや何のために生れて来たのかわからない。それが書けないときまつた以上は穀潰こくつぶし同然ださ。だから君の厄介やっかいにまでなつて、転地するがものはないんだ」

「それで転地するのがいやなのか」

「まあ、そうさ」

「そうか、それじゃ分つた。うん、そう云うつもりなのか」と中野君はしばらく考えていたが、やがて

「それじゃ、君は無意味に人の世話になるのが厭いやなんだろうから、そこを有意義にしようじゃないか」と云う。

「どうするんだ」

「君の目下もつかの目的は、かねて腹案のある述作を完成しようとするのだらう。だからそれを条件にして僕が転地の費用を担任しようじゃないか。逗子ずしでも鎌倉かまくらでも、熱海あたまでも君の好きな所へ往いつて、呑氣のんきに養生する。ただ人の金を使って呑氣に養生するだけでは心が済まない。だから療養かたがた気が向いた時に続きをかくさ。そうして身体からだがよくなって、作が出来上つたら帰ってくる。僕は費用を担任した代り君に一大傑作を世間へ出して貰う。どうだい。それなら僕の主意も立ち、君の望のぞみも叶かなう。一挙兩得じゃないか」

高柳君は膝頭ひざがしらを見詰めて考えていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持って行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「そうさ。同時に君が天下に対する責任いちぶの一分が済むようになるのさ」

「じゃ、金を貰おう。貰いつ放しに死んでしまいかも知れないが——いいや、まあ、死ぬまで書いて見よう——死ぬまで書いたら書けない事もなかろう」

「死ぬまでかいちや大変だ。暖かい相州そうしゅう辺へんへ行つて氣を樂たのくにして、時々一頁二頁ずつ

書く——僕の条件に期限はないんだぜ、君」

「うん、よしきつと書いて持つて行く。君の金を使って茫然ぼうぜんとしていちや済まない」

「そんな済むの済まないのと考えてちやいけない」

「うん、よし分つた。ともかくも転地しよう。明日あしたから行こう」

「だいぶ早いな。早い方がいいだろう。いくら早くつても構わない。用意はちやんと出来てるんだから」と懐中から七子の三折れななこみつおの紙入を出して、中から一束の紙幣しへいをつかみ出す。

「ここに百円ある。あとはまた送る。これだけあつたら当分はいいだろう」

「そんなにいるものか」

「なにこれだけ持つて行くがいい。実はこれは妻さいの発議ほつぎだよ。妻の好意だと思つて持つて行つてくれたまえ」

「それじゃ、百円だけ持つて行くか」

「持つて行くがいいとも。せつかく包んで来たんだから」

「じゃ、置いて行つてくれたまえ」

「そこでと、じゃ明日あす立つね。場所か？ 場所はどこでもいいさ。君の気の向いた所がよからう。向むこへ着いてからちよつと手紙を出してくれればいいよ。——護送するほどの大病

人でもないから僕は停車場へも行かないよ。——ほかに用はなかつたかな。——なに少し急ぐんだ。実は今日は妻を連れて親類へ行く約束があるんで、待ってるから、僕は失敬しなくつちやならない」

「そうか、もう帰るか。それじゃ奥さんよろしく」

中野君は欣然として帰って行く。高柳君は立って、着物を着換えた。

百円の金は聞いた事がある。が見たのはこれが始めてである。使うのはもちろんの事始めてである。かねてから自分を代表するほどの作物を何か書いて見たいと思うていた。生活難の合間合間に一頁二頁と筆を執った事はあるが、興が催すと、すぐやめねばならぬほど、饑は寒は容赦なくわれを追うてくる。この容子では当分仕事らしい仕事は出来そうもない。ただ地理学教授法を訳して露命を繋いでいるようでは馬車馬が秣を食って終日馳けあるくと変りはなさそうだ。おれにはおれがある。このおれを出さないでぶらぶらと死んでしまうのはもつたない。のみならず親の手前世間の手前面目ない。人から土偶のようにうとまれるのも、このおれを出す機会がなくて、鈍根にさえ立派に出来る翻訳の下働きなどで日を暮らしているからである。どうしても無念だ。石に噛みついてもと思う矢先に道也の演説を聞いて床についた。医者は大胆にも結核の初期だと云う。いよいよ

よ結核なら、とても助からない。命のあるうちにとまた旧稿に向つて見たが、よ縋る繩は遅く、逃げる泥棒は早い。何一つ見やげも置かないで、消えて行くかと思うと、熱さえ余計に出る。これ一つ纏めれば死んでも言訳いいわけは立つ。立つ言訳を作るには手当もしなければならん。今の百円は他日の万金よりも貴いたつと。

百円を懐ふところにして室へやのなかを二度三度廻る。気分も爽さわやかに胸も涼しい。たちまち思い切つたように帽を取つて師走しわすの市いちに飛び出した。黄昏たそがれの神楽坂かぐらざかを上あがると、もう五時に近い。気の早い店では、はや瓦斯ガスを点じている。

毘沙門びしゃもんの提灯ちようちんは年内に張りかえぬつもりか、色が褪さめて暗いなかで揺れている。門前の屋台で職人が手拭てぬぐいを半纏はんだすきにとつて、しきりに寿司すしを握にぎっている。露店の三馬さんまは光るほどに色が寒い。黒足袋くろたびを往来へ並べて、頬ほお被かぶりに懐手ふところをしたのがある。あれでも足袋は売れるかしらん。今川焼は一銭に三つで婆さんの自製にかかる。六銭五厘の万ま年筆ねんふでは安過ぎると思う。

世は様々だ、今ここを通っているおれは、翌あすの朝になると、もう五六十里先へ飛んで行く。とは寿司屋すしやの職人も今川焼の婆さんも夢にも知るまい。それから、この百円を使い切ると金の代りに金より貴いあるものを懐ふところにしてまた東京へ帰つて来る。とも誰も思うもの

はあるまい。世は様々である。

道也先生に逢つて、実はこれこれだと云つたら先生はそうかと微笑するだろう。あす立ちますと云つたらあるいは驚ろくだろう。一世一代の作を仕上げてかえるつもりだと云つたらさぞ喜ぶであろう。——空想は空想の子である。もつとも繁殖力に富むものを脳裏に植えつけた高柳君は、病の身にある事を忘れて、いつの間にか先生の門口に立った。

誰か来客のようであるが、せつかく来たのをとわざと遠慮を抜いて「頼む」と声をかけて見た。「どなた」と奥から云うのは先生自身である。

「私です。高柳……」

「はあ、御這入り」と云つたなり、出てくる景色もない。

高柳君は玄関から客間へ通る。推察の通り先客がいた。市樂の羽織に、くすんだ縞ものを着て、帯の紋博多だけがいちじるしく眼立つ。額の狭い頬骨の高い、鈍栗眼である。高柳君は先生に挨拶を済ました、あとで鈍栗に黙礼をした。

「どうしました。だいぶ遅く来ましたね。何か用でも……」

「いいえ、ちよつと——実は御暇乞に上がりました」

「御暇乞？ 田舎の中学へでも赴任するんですか」

間の襖あいふすまをあけて、細君が茶を持って出る。高柳君と御辞儀おしぎの交換をして居間しりぞへ退く。

「いえ、少し転地からだしようかと思ひまして」

「それじゃ身体からだでも悪いんですね」

「大した事もなからうと思ひますが、だんだん勧める人もありますから」

「うん。わるけりや、行くがいいですとも。いつ？ あした？ そうですか。それじゃまあゆっ緩ゆっくり話したまえ。——今ちよつと用談を済ましてしまふから」と道也先生は鈍栗の方へ向いた。

「それで、どうも御氣の毒だが——今申す通りの事情だから、少し待ってくれないか」

「それは待つて上げたいのです。しかし私の方の都合もありまして」

「だから利子を上げればいいでしょう。利子だけ取つて元金は春まで猶ゆうよ予してくれないか」

「利子は今までもとどこ滞りなくちようだいしておりますから、利子さえ取ればいい金なら、いつまでも御用立てて置きたいのですが……」

「そうはいかんでしようか」

「せつかくの御頼おたのみだから、出来れば、そうしたいのですが……」

「いけませんか」

「どうもまことに御氣の毒で……」

「どうしても、いかんですか」

「どうあつても百円だけ拵こしらえていただかなくつちやならので」

「今夜中にですか」

「ええ、まあ、そうですね。昨日が期限きのうでしたね」

「期限の切れたのは知つて居るです。それを忘れるような僕じゃない。だからいろいろ奔走して見たんだが、どうも出来ないから、わざわざ君の所へ使をあげたのです」

「ええ、御手紙はたしかに拝見しました。何か御著述があるそうで、それを本屋の方へ御売渡しになるまで延期の御申込でした」

「さよう」

「ところがです、この金の性質がです——ただ利子を生ませる目的でないものですか——実は年末には是非入用だかと念を押して御おあにい兄さんに伺つたくらいなのです。ところが御兄さんが、いやそりや大丈夫、ほかのものなら知らないが、弟に限ってけつして、そんな不都合はない。受合う。とおつしやるものですから、それで私も安心して御用立て

申したので——今になって御違約ではなはだ迷惑します」

道也先生は黙然もくねんとしている。鈍栗どんぐりは煙草たばこをすばすば呑む。

「先生」と高柳君が突然横合から口を出した。

「ええ」と道也先生は、こつちを向く。別段赤面した様子も見えない。赤面するくらいなら用談中と云つて面会を謝絶するはずである。

「御話し中はなはだ失礼ですが。ちよつと伺つても、ようございましょうか」

「ええ、いいです。何ですか」

「先生は今御著作をなさつたと承うけたまりましたが、失礼ですが、その原稿を見せていただく訳には行きますまいか」

「見るなら御覧、待つてるうち、読むのですか」

高柳君は黙っている。道也先生は立つて、床の間に積みかさねた書籍の間から、厚さ三寸ほどの原稿を取り出して、青年に渡しながら

「見て御覧」という。表紙には人格論と楷書かいしよでかいてある。

「ありがとう」と両手に受けた青年は、しばしこの人格論の三字をしけじけと眺ながめていたが、やがて眼を挙あげて鈍栗の方を見た。

「君、この原稿を百円に買って上げませんか」

「エへへへへ。私は本屋じゃありません」

「じゃ買わないですね」

「エへへへ御冗談を」

「先生」

「何ですか」

「この原稿を百円で私に譲って下さい」

「その原稿?……」

「安過ぎるでしょう。何万円だって安過ぎるのは知っています。しかし私は先生の弟子だから百円に負けて譲って下さい」

道也先生は茫ぼうぜん然ぜんとして青年の顔を見守っている。

「是非譲って下さい。——金はあるんです。——ちゃんここに持っています。——百円ちゃんとあります」

高柳君は懐ふところから受取ったままの金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から……」と道也先生は押し返そうとする。

「いいえ、いいんです。好いから取って下さい。——いや間違つたんです。是非この原稿を譲って下さい。——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいじめて追出した弟子の一人です。——だから譲って下さい」

愕然たる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去つた。彼は自己を代表すべき作物を転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論を懐にして、これをわが友中野君に致し、中野君とその細君の好意に酬いんとするのである。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集³⁾」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 ²⁾」筑摩書房

1972（昭和47）年1月

初出：「ホトトギス」

1907（明治40）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年2月24日公開

2015年4月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野分

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>